

山梨県北巨摩郡白州町

所帶 I 遺跡

所帶 II 遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

白州町教育委員会
峡北土地改良事務所

序

この報告書は、昭和63年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された所帯I遺跡・所帯II遺跡の結果をまとめたものであります。

白州町には、縄文時代から古代・中世までの各時代にわたり、人々の生活の跡を語る埋蔵文化財が数多く分布し、各遺跡からは、それぞれの時代の土器類等が発見されています。特に、白須・島原・横手地区等の広い段丘面には、大規模な遺跡の存在が知られています。

全町を対象とした水田の圃場整備事業は、昭和58年度から開始され、その間の昭和59年には、縄文時代中期の根古屋遺跡、また、昭和62年には、所帯I・II遺跡に隣接した、平安時代・中世の坂下遺跡の発掘調査が行われました。

所帯I・II遺跡は、いずれも釜無川右岸の河岸段丘上、白州町白須字所帯地内に位置し、所帯I遺跡が1,880m²、所帯II遺跡が3,280m²の範囲にわたり発掘調査されました。

その結果、所帯I遺跡では平安時代の住居跡6基、掘立柱建物跡4棟等が調査され、出土した土師器等によって断続する部分もありますが、およそ3時期に区分されました。

また、所帯II遺跡では、縄文時代・弥生時代・中世の遺物も出土していますが、主体はI遺跡同様に平安時代であります。住居跡10基、掘立柱建物跡2棟、土塹62基が調査され、出土した土師器等によって断続した3時期に区分されました。

さらに、昭和62年に発掘調査された坂下遺跡を含め、これら近接する3遺跡で同時に生活が営まれたことはなく、2~4軒の住居によって構成される小規模な集落が、この3地点をおよそ100年間に推定7回も移動している点は、白州町の歴史を解明するためにも、北巨摩地方の歴史を知る上にも、貴重な資料であります。

最後に、この事業に協力を賜わりました岐北土地改良事務所・山梨県教育文化課等各関係機関の皆様をはじめ、白須上区及び前沢区の区長を中心として直接調査にご協力をいただきました皆様方に、厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

白州町教育委員会

教育長 道村初夫

例　　言

- 1、本書は、昭和63年度県営圃場整備事業に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡白州町に所在する所帯I・II遺跡の調査報告書である。
- 2、発掘調査は、峠北土地改良事務所との負担協定による委託と文化庁・山梨県より補助金を受けて、白州町教育委員会が実施した。
- 3、発掘調査及び出土品の整理は、白州町教育委員会で行った。
- 4、遺構の実測は、株式会社バスコへ委託して行った。
- 5、遺物の実測・写真撮影・本文執筆及び編集は折井が行った。
- 6、遺構及び遺物のトレースは、水石が行った。
- 7、発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏にご教示いただいた。記して感謝する次第である。(敬称略)
新津健・田代孝・森和敏・末木健・坂本美夫・小林広和・八巻与志夫・中山誠二・森原三雄・平野修・畠大介・佐野勝広・小林公明
- 8、本調査の出土品・諸記録・図面・写真等は、白州町教育委員会が保管している。
- 9、本調査にあたり、峠北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課及び地元白須上区長・前沢区長の皆様に御理解とご指導をいただいた。心から謝意を表する次第である。

調　　査　　組　　織

調査主体　白州町教育委員会（教育町　堀内知幸～9月30日）
（教育町　道村初夫　10月7日～）

事務局　宮沢元（教育課長）・山田法親（係長～7月31日）・
山口光茂（係長　8月1日～）・名取利之・伊藤早苗・
植松良治・山田健二・鷗口郁子（～7月31日）・古屋明美
（8月1日～）・折井敦（調査担当）

調査参加者　原幸子・清水光子・山田義則・原たつえ・宮沢正明・
鷗口利道・山本静枝・井上きみえ・伊藤松子・大輪つね子
・向井澄子・名取佐紀子・松野重雄・名取勉・清水幸子・
高見沢マサ子・清水和子・鈴木千代子・中村そのえ

整理参加者　水石佐江子・名取佐紀子

目 次

序	
例 言 · 調査組織	
目 次	
挿 図 目 次	
図 版 目 次 · 凡 例	
第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第Ⅱ章 位 置 と 環 境	6
第1節 自然環境	6
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 所 帯 I 遺 跡	9
第1節 遺跡の概観と層序	9
第2節 遺構と遺物	12
第3節 まとめ	32
第Ⅳ章 所 帯 II 遺 跡	33
第1節 遺跡の概観と層序	33
第2節 遺構と遺物	37
第3節 まとめ	70
第Ⅴ章 総 括	71
参 考 文 献	73
図 版 集	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第32図 所帯II遺跡遺構配置図	35・36
第2図 遺跡付近の地形図	3	第33図 第1号住居跡・カマド完掘図	38
第3図 所帯I遺跡調査位置図	4	第34図 第1号住居跡出土土器	39
第4図 所帯II遺跡調査位置図	4	第35図 第1号住居跡出土土器	39
第5図 所帯I・II遺跡と周辺遺跡	7	第36図 第2号住居跡・カマド完掘図	40
第6図 所帯I遺跡土層図	10	第37図 第2号住居跡出土土器	41
第7図 所帯I遺跡遺構配置図	11・12	第38図 第2号住居跡出土土器	42
第8図 第1号住居跡・カマド下層 ピット群	13	第39図 第2号住居跡出土石製品	42
第9図 第1号住居跡出土土器	14	第40図 第3号住居跡	43
第10図 第1号住居跡出土土器	14	第41図 第3号住居跡出土土器	43
第11図 第2A・2B住居跡・2△カ マド完掘図及びP-4	15	第42図 第4号住居跡・カマド完掘図	44
第12図 第2号住居跡出土土器	16	第43図 第4号住居跡出土土器	45
第13図 第3号住居跡・カマド完掘図 及びP-6・13・14・15	17	第44図 第4号住居跡出土鐵製品	45
第14図 第3号住居跡出土土器	18	第45図 第5・6号住居跡・5号住カ マド完掘図及びP-16・17・ 18・33	47
第15図 第3号住居跡出土土器	18	第46図 第5・6号住居跡出土土器	48
第16図 第4号住居跡・カマド完掘図 及びP-7・8・9・16	19	第47図 第7号住居跡・カマド完掘図 及びP-22・24・30	49
第17図 第4号住居跡出土土器	20	第48図 第7号住居跡出土土器	50
第18図 第4号住居跡出土土器	20	第49図 第7号住居跡出土土器	51
第19図 第5号住居跡・カマド完掘図	21	第50図 第8号住居跡・P-29・28・ 26・34	52
第20図 第5号住居跡出土土器	23	第51図 第8号住居跡出土遺物	53
第21図 第5号住居跡出土土器	24	第52図 第9号住居跡・カマド完掘図	54
第22図 第5号住居跡出土鐵製品	24	第53図 第9号住居跡出土土器	54
第23図 第3号掘立柱建物跡	25	第54図 第9号住居跡出土土器	55
第24図 第1号掘立柱建物跡	27	第55図 第9号住居跡出土石製品	55
第25図 第2号掘立柱建物跡	28	第56図 第10号住居跡・P-44～51	56
第26図 第4号掘立柱建物跡	29	第57図 第10号住居跡出土土器	56
第27図 P-1・2	30	第58図 第1・2号掘立柱建物跡	57・58
第28図 グリッド出土土器	31	第59図 P-1・2・3A・3B	60
第29図 グリッド出土土器	31	第60図 P-7・8	61
第30図 グリッド出土土器	32	第61図 P-9・10	61
第31図 所帯II遺跡土層図	34	第62図 P-11・12・20	61

第63図	P-53	61	第68図	グリッド出土繩文土器	67
第64図	P-14・15・19	62	第69図	グリッド出土繩文土器	68
第65図	P-31・32・52~62・65~ 68・73・74・76A・76B	63・64	第70図	グリッド出土石器	68
第66図	P-69~72	65	第71図	グリッド出土弥生土器	69
第67図	P-52	67	第72図	グリッド出土土師器・須恵器	69
			第73図	グリッド出土古錢	70

図版目次

図版1 所帯I遺跡全景

図版2 上…遺跡全景（調査前）、中…遺構検出状況、下…第1号住居跡

図版3 上から第2号～第4号住居跡

図版4 上…第5号住居跡、中…第5号住居跡カマド、下…第1号掘立柱建物跡

図版5 上から第2号～第4号掘立柱建物跡

図版6 上から第2号・7号・13号土塁

図版7 上…第1号住居跡出土土器、下…第2号住居跡出土土器

図版8 上…第3号住居跡出土土器、下…第4号住居跡出土土器

図版9 第5号住居跡出土遺物

図版10 上…第5号住居跡出土土器、下…グリッド出土土器

図版11 所帯II遺跡全景

図版12 上…遺跡全景（調査前）、中…遺構発掘風景、下…第1号住居跡

図版13 上から第2号～第4号住居跡

図版14 上から第5・6号～第8号住居跡

図版15 上・中…第9号・第10号住居跡、下…第1・2号掘立柱建物跡

図版16 上…第7～10号土塁、中…第11・12・20号土塁、下…第14・15・19号土塁

図版17 上…G-3・4区土塁群、中…第69～72号土塁、下…第52号土塁

図版18 上…兼1号住居跡出土土器、下…第3・5・6号、第8号住居跡出土遺物

図版19 上…第2号住居跡出土土器、下…第4号住居跡出土土器

図版20 上…第4号住居跡出土土器、下…第9号住居跡出土遺物

図版21 上…第7号住居跡出土土器、下…グリッド出土平安時代土器

図版22 上…グリッド出土繩文土器、下…グリッド出土弥生土器

凡例

1. 遺構平面図は、カマド完掘図を除き、国土地理院の座標方向で作成してある。

2. 遺構平面図は、全体図を除き、すべて縮尺60分の1である。

3. 遺物説明で、単に杯・皿のごとく記述してあるものは、土師器である。

第Ⅰ章 調査状況

第1節 調査に至る経過

山梨県北巨摩郡白州町白須字所帯4511番地他に所在する所帯I遺跡、同じく4336番地他に所在する所帯II遺跡は、昭和63年度着工予定の県営圃場整備事業に伴い、昭和62年10月19日～10月23日の間、埋蔵文化財試掘調査を実施し、新たに発見された遺跡である。

試掘調査は、県営圃場整備事業予定区域(151,000m²)を対象として、幅2m、長さ10～22mの試掘坑を任意に設定し、重機により耕作土及び水田床土を排土した後、人力により地山まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認する方法で行った。

その結果、所帯I遺跡では稀薄ながらも黒褐色砂質土中より平安時代の土師器・須恵器が出土し、また、所帯II遺跡では各試掘坑の黒褐色砂質土中より、まんべんなく平安時代の土師器等の遺物が出土した。

そのため、上記2遺跡の全面発掘調査が必要であると判断され、その措置について県文化課・岐北土地改良事務所・町教育委員会との間で協議を行ったところ、岐北土地改良事務所の委託、国・県補助金を受け、町教育委員会が調査主体となり、発掘調査を実施することとなった。調査範囲は、所帯I遺跡が約1,900m²、所帯II遺跡が約3,300m²、合計約5,200m²とした。

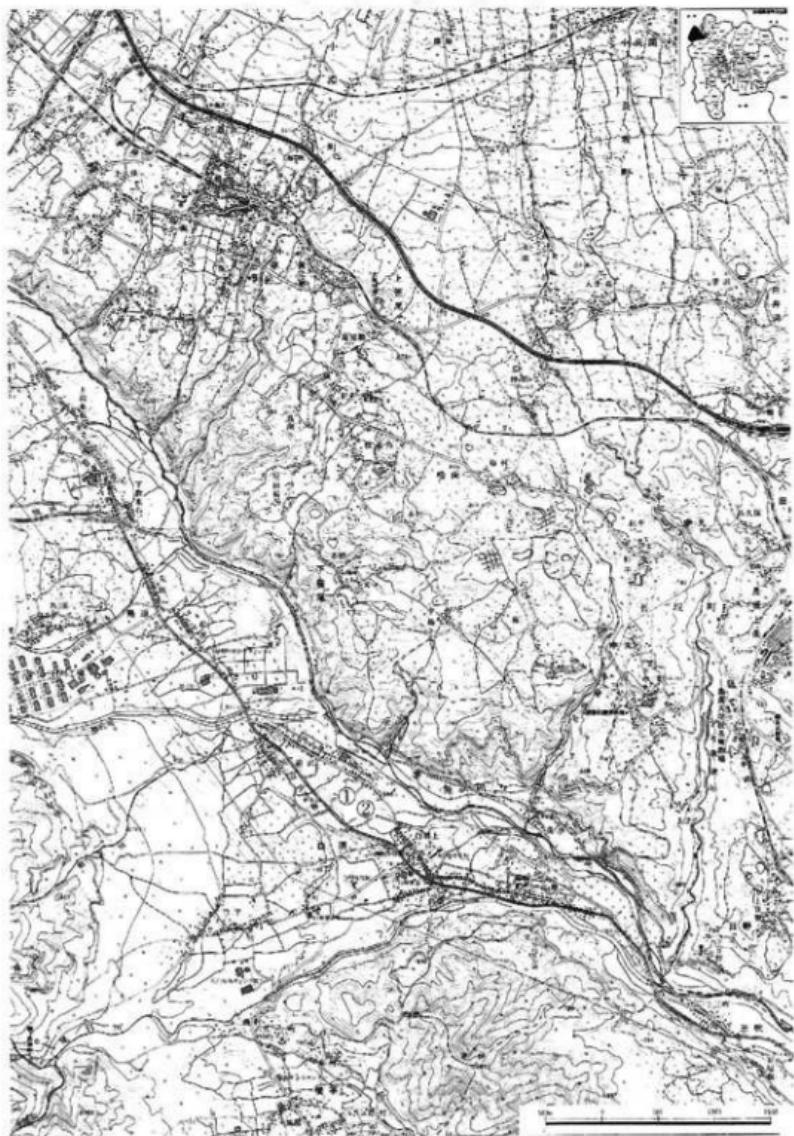
昭和63年5月23日付け、岐北土第5-28号で岐北土地改良事務所長より、文化財保護法第57条の3第1項の規定による、埋蔵文化財発掘の通知書を受け、昭和63年6月1日付け、白教發第6-2号で山梨県教育委員会教育長に達達する。

昭和63年5月6日付け、白教發第5-3号で所帯I遺跡、また昭和63年5月11日付け、白教發第5-14号で所帯II遺跡の文化財保護法第98条の2第1項の規定による、埋蔵文化財発掘調査の通知書を、文化庁長官(県教委経由)に提出する。

第2節 調査経過

発掘調査は昭和63年5月13日より開始し、8月12日現地調査終了、その後、報告書作成までの整理作業が完了したのは平成元年3月31日であった。

所帯I遺跡の発掘調査は5月13日に開始した。まず、調査区域の縮小が可能かどうかを確認するため、調査区域内に10m間隔で幅4mのトレンチを4本設定し、バックホーにより水田耕作土及び床土を排土したところ、量的に濃淡はあるものの、各トレンチの床下層に遺物の分布が見られた。また、地山は水田構築の際に削平されている部分も認められたが、全般には遺存状況は良好と判断された。

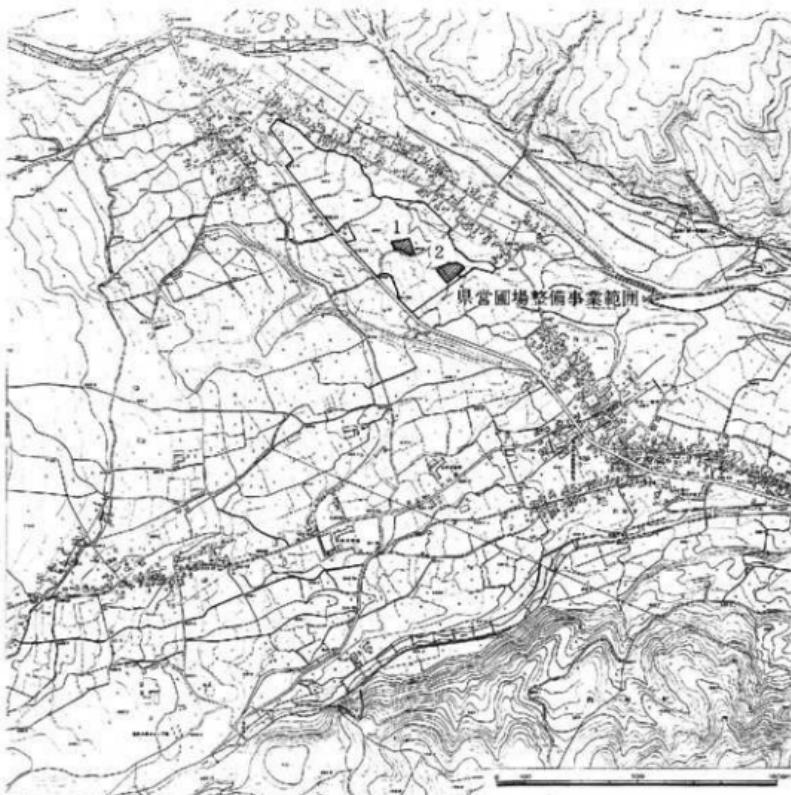


第1図 遺跡位置図 ①一所帯I遺跡・②一所帯II遺跡

そのため、バックホーとブルドーザーを併用し、調査区域全体の表土（耕作土・床土）の排土を行い、5月21日完了した。

重機による表土剥ぎ完了後、10mピッチで基準杭を打設し、メッシュを組み、調査の基準とした。各グリッド名は、西から東方向にA～Hとし、北から南方向へ1～6として、両者を組み合わせ各ブリッドの名称とした。

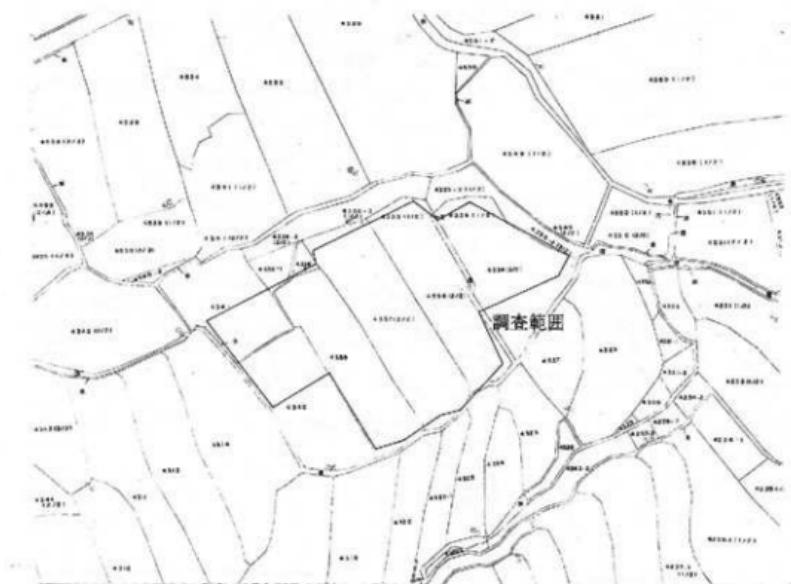
人力による発掘調査は、まず、5月24日から6月17日までの間、遺物包含層の掘り下げ及び遺構検出を行った。その結果、遺物の出土量は比較的少なく、それも遺構上面には限られるといった状況を呈した。遺構は、E-3・4付近にやや集中しているほかは、調査区域全体に分布していた。さらに、E-5からH-3に流れる河道跡が検出され、第1号住居跡が切られ



第2図 遺跡付近の地形図 1 - 所帯 I 遺跡 2 - 所帯 II 遺跡



第3図 所帯I 遺跡調査位置図 (1:1500)



第4図 所帯II 遺跡調査位置図 (1:1500)

ていた。

次に、遺構発掘及び遺構断面図作成を6月20日から7月7日まで行った。遺構内の遺物の出土量は、住居跡のそれがほとんどを占め、包含層出土分を含めても大半を占めた。

遺構完掘後、所帯II遺跡の調査の完了を待って、8月8日から航空写真測量の準備、写真撮影及び細部の平面図作成作業を行い、8月12日調査を完了した。

なお、調査面積は1880m²である。

所帯II遺跡の発掘調査は5月21日に開始した。試掘調査により調査区域の南東側を除き、まんべんなく遺物の分布が見られたため、バックホーとブルドーザーを併用して、調査区域全体の水田耕作土及び床土と畑耕作土を北から南へ堆上し、6月7日完了した。

車機による表土剥ぎ完了後、10mピッチで基準杭を打設し、メッシュを組み、調査の基準とした。各グリッド名は、西から東方向へA～Jとし、北から南方向に1～7として両者を組み合わせ各グリッドの名称とした。

人力による発掘調査は、まず、5月25日から6月10までの間、遺物包含層の掘り下げ及び遺構検出を行った。その結果、遺物の出土は所帯I遺跡同様に比較的少なく、そのうち平安時代の土器片については、遺構上面にはほぼ限られていた。その他では少量ながら、4334・4336番地の北側から繩文土器片、4339番地から弥生土器片がやや集中した形で出土した。遺構では、住居跡や掘立柱建物跡は、調査区域全体に分布しているが、土塙は、調査区域の中央部にかなりの集中状況を見せて検出された。なお、地山は、北西側では礫が露出した状況を呈していた他は、砂質土であった。

次に、遺構発掘及び遺構断面図作成は、所帯I遺跡の遺構発掘の完了を待って、7月8日から8月6日までの間行った。遺構は水田造成時に削平されたものもあったが、全般には遺存状態は良好であった。遺構内の遺物の出土量は、住居跡のそれがほとんどを占め、包含層出土分を含めた全体量から見ても、大半を占めた。なお、第10号住居跡上面より若干の中世遺物が出土した。

遺構完掘後、8月8日から所帯I遺跡とあわせて、航空写真測量準備、写真撮影及び細部の平面図作成作業を行い、8月12日調査を完了した。

なお、調査面積は3280m²で、所帯I遺跡とあわせた合計では5160m²である。

昭和63年9月13日付け、白教発第9-15号で所帯I遺跡の埋蔵物発見届を、また、昭和63年9月13日付け、白教発第9-17号で所帯II遺跡の埋蔵物発見届を、遺失物法第13条の規定により、長坂警察署長に提出した。

第II章 位置と環境

第1節 自然環境

所帯I遺跡の所在地は、山梨県北巨摩郡白州町白須字所帯4511番地他、また所帯II遺跡は、山梨県北巨摩郡白州町白須字所帯4336番地他にある。両遺跡は、小さい沢をはさみ約150m離れて位置し、南西側を国道20号線が南東から北西に走っている。両遺跡から南東700~800mに白須上集落、北西700~800mに前沢集落の中心がある。また、北東500mを釜無川が北西より南東に流れている。標高は所帯I遺跡が602~604m、所帯II遺跡が596~600mである。

両遺跡周辺の地形は、釜無川によって形成された低位段丘・中位段丘・高位段丘の三面の河岸段丘を基盤としているが、前沢側では旧沢川の扇状地堆積物が段丘面を厚く覆い、各面の境が不明瞭になっている。田沢川は、主峰甲斐駒ヶ岳を中心とする巨摩山地の主脈より東に分岐した先端の日向山を源流とする河川で、現在は前沢集落の西側で神宮川に合流している。しかし、以前には大雨ごとに流れを変える暴れ川であったことが、両遺跡の所在する低位段丘面に刻まれた幾筋もの河道跡によって知ることができ、その一筋は所帯I遺跡の中央を切って流れていたことが、発掘調査によって確認された。また、両遺跡西側の崖線に、田沢川が山地から流れ出た後、現在のように北に曲がらず、そのまま東へ流れ高位段丘面を切って釜無川へ流れ込んだ際の名残りがある。

所帯I・II遺跡の立地する低位段丘面は、ほとんどが水田である。中位段丘面は、白須上集落・前沢集落の国道より西側の部分に見られ、さらに、高位段丘面は両遺跡の西側で比高差40~50m位の高台となり、畑や果樹園となっている。なお、中・高位段丘面はローム層を基盤とするが、低位段丘面にはローム層は見られない。

第2節 歴史的環境

白州町内では、昭和59年の根古屋遺跡と昭和62年の所帯II遺跡の南側100mに位置する坂下遺跡の2発掘調査例しかないため、個々の詳細については不明な点が多いが、分布調査等により現在62ヶ所の遺跡が知られている。

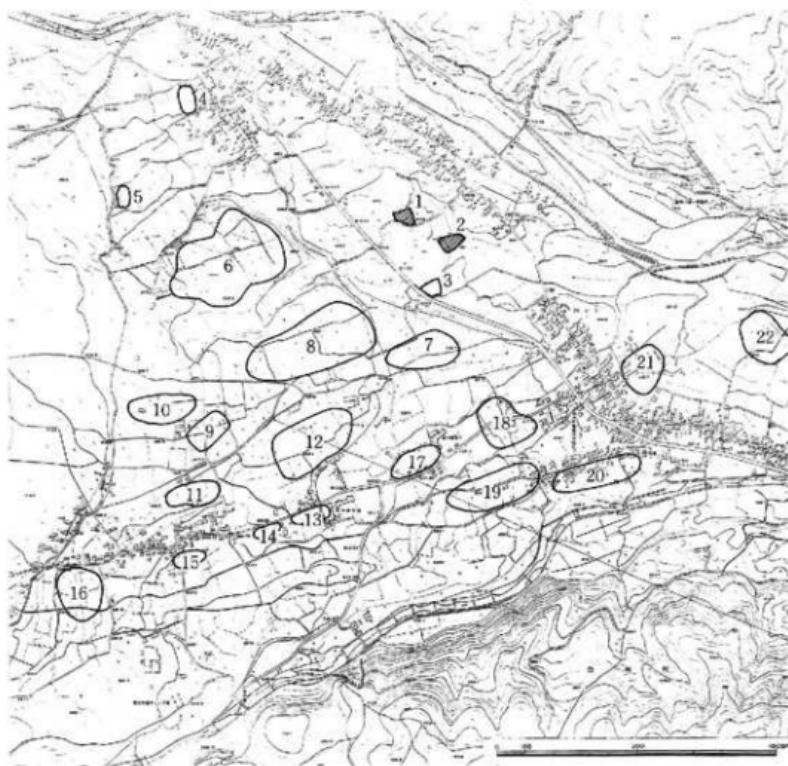
本遺跡周辺の主な遺跡をあげて見ると、両遺跡に近接して低位段丘面に立地する、平安時代・中世を主体とする坂下遺跡がある。特に平安時代の集落跡は、小規模の出作り的性格をもつものと考えられ、所帯I・II遺跡と類似する。

また、高位段丘面には、繩文・平安・中世にかかる北原遺跡、特に繩文土器・平安時代の土

※注1 野出道孝 1986 「第I章 地形と地質」『白州町誌』白州町

※注2 折井 敦 1988 「坂下遺跡」 白州町教育委員会

※注3 新津 健 1986 「第I章 考古」『白州町誌』 白州町



第5図 所帶I・II遺跡と週辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代	番号	遺跡名	所在地	主な時代
1	所帶I	白須字所帶	平安	12	竹字2	白須字竹字	繩文・平安・中世
2	所帶II	白須字所帶	繩文・弥生・平安	13	堰口	白須字堰口	繩文・平安
3	坂下	白須字所帶	平安・中世	14	堰口東	白須字堰口	平安・中世
4	竹花	白須字竹花	繩文・中世	15	桜井1	白須字桜井	繩文
5	雜木	白須字雜木	繩文	16	桜井2	白須字桜井	(前・後)
6	北原	白須字北原	繩文・平安・中世	17	中村1	白須字中村	繩文・平安・中世
7	大除1	白須字大除	中世	18	中村2	白須字中村	繩文・平安・中世
8	大除2	白須字大除	繩文・平安・中世	19	南田	白須字南田・構原	繩文(前・中)・平安・中世
9	大除3	白須字大除	繩文	20	柳原	白須字柳原	(前・中)
10	大除4	白須字大除	繩文・中世	21	田舎原小学校	白須字柳原	繩文
11	竹字1	白須字竹字	繩文	22	大久保	白須字大久保	繩文・中世

漆器・灰釉陶器が頗著である。北原遺跡の南には火除遺跡群・竹字遺跡群と広がり、各地点ごとに縄文前期諸磯式・中期五領ヶ台式土器・平安時代・中世の遺物が採集されている。これらはいずれも規模の大きな遺跡と推定される。

中位段丘面には、平安時代の土師器が多量に散布している中村A1遺跡、中世の遺物が多く館跡の可能性が強い中村A2遺跡、さらに、縄文前期・平安・中世の遺物が見られる南田遺跡等の遺跡が知られている。

以上のように、白須地区には多くの遺跡が知られているが、ほかにも、縄文中期曾利式を主体とする桜井A1遺跡、縄文前期及び後期を中心とする桜井A2遺跡、縄文前期黒浜式・中期曾利式の柳原遺跡、縄文中期及び平安時代の大久保遺跡などが確認されている。さらに、旧菅原小学校（現白州小学校）建設の際に、多量の土器・石器が発見されたと伝えられており、それらの資料から縄文中期全体にわたる大規模な集落遺跡であったことが推定される。

現時点では知られている白須地区の遺跡は、縄文時代前期初頭（花積下層式）・縄文前期（黒浜式・諸磯式）・同中期（五領ヶ台式～曾利V式）・同後期・平安時代・中世と空白の時期があるものの、長期間にわたって生活が営まれたことを知ることができる。また、その多くが広い段丘面上に立地し、遺物の分布範囲も広いことから、規模の大きい拠点的な集落であったものと考えられる。

次に、文献資料から見ると、平安時代に甲斐に設置された御牧の一つ、真衣野牧が白州町から武川村にかけての駒ヶ岳山麓に置かれたと推定されている。^{御牧}御牧は、周囲は格（木の柵）で囲うことされ、境界を明確化するためや馬の逃亡・外敵の侵入防止の意味をもっていたものと考えられる。しかし、維持は大変だったらしく、信濃國では、格の外に濠（堀）を設けたにもかかわらず、火災や盗難によって格が壊され、その改修が思うにまかせず馬が逃亡した状況が伝えられている。真衣野牧でも同様な状況が推測される。そして、武士団の胎頭に伴って、11世紀の末に御牧は記録上から消え去り、私牧化されていったことが十分に推測される。武川筋に分封された牧家氏・白須氏・横手氏等の武川衆の支配地も、この私牧化された牧を基盤として形成されていったものと考えられる。白須地区には白須氏が入ったとされるが、不明な点が多い。

戦国時代に入ると、白須地区には馬場民部信春の居城があったと伝えられている。北巨摩郡勢一班によると、「白須西方の宏野に、馬場美濃守信房（民部信春）の宅跡がある。東西大凡二町余、南北二町、今は全部田畠となっているが、四周に濠跡があり、尚部内に一条の濠を通した跡がある。…〈中略〉…殿町と称する集落より竹生（竹字）に通ずる古道に沿いたる地に門があったと見え今に礎石が存してある。」と記されている。現在は水田の整地で判然としない。

このように白須地区は、縄文時代の集落遺跡・平安時代の拠点及び出作り集落遺跡が数多く見られ、さらに中世では武川衆に関連した遺跡が、居城を中心に点在していたものと考えられる。

※注1 秋山敬 1986 「第2章 古代」『白州町誌』 白州町

※注2 山梨県北巨摩郡教育会 1930 「北巨摩郡勢一班」

第III章 所 帯 I 遺 跡

第1節 遺 跡 の 概 観 と 層 序 (第6・7図)

本遺跡は、地山面まで削平して水田造成を行った部分が、各水田で確認されている。さらに、その上層にある遺物包含層もかなりの範囲で全部ないしはその一部が削土されている。また、遺跡の中央のE-5からH-3に洪水による河道路が通り、第1号住居跡を切っていたことが確認された。そのために、遺物もかなりの量が失われたものと考えられる。また、遺構も上部が削平されて、底面付近が残存するものもある。

さて、発掘した遺構や遺物から所帯I遺跡を概観すると、縄文時代の石器である石匙・石鎌を除くと、遺構の一部に断定しがたいものもあるが、平安時代を主体とする遺跡であると考えられる。

遺構は、竪穴住居跡が6基、掘立柱建物跡が4棟、土塙が11基等が確認されている。なお、第2号住居跡は2基重複しており、第2A・2B住居跡とした。

住居跡は、最大が第5号住居跡で、最小は第1号住居跡で、規模にかなりの差が見られる。カマドは、北壁にあるものと東壁にあるものが見られる。

掘立柱建物跡は、3間×2間のものが2棟、2間×2間の總柱建物跡が2棟ある。柱穴はいずれも方形ないしは長方形で、第2号建物跡では明瞭に柱痕跡が認められる。

土塙は、直径が1.2~1.5mの円形で、9基がE・F-3・4に集中している。そのうち5基が第2B~4号住居跡と重複関係にある。また、E-5の第2号土塙には蝶がつめられている。しかし、若干の遺物しか出土していないため、時期を断定しがたいが、他の時期の遺物が出土していないため、平安時代に属するものと考えられる。

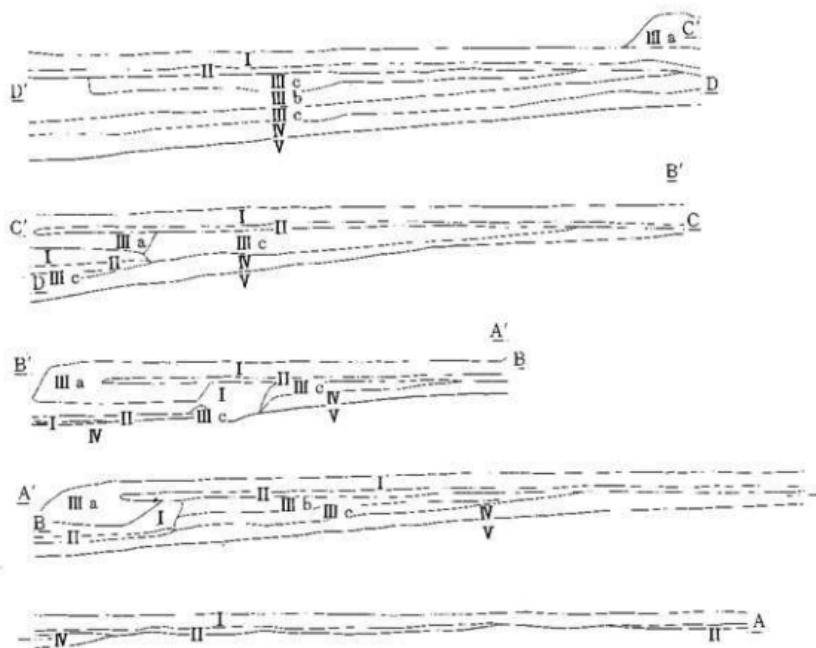
遺物は、そのほとんどが住居跡から出土したものである。その主なものは、土師器の壺・皿・甕、須恵器の壺・壺蓋・甕・鐵鎌・刀子等がある。量的に最も多い土師器の壺には、内面に暗文を施したものや内面を黒色処理したものが目立つ。なお、最も大形の第5号住居跡出土の遺物は、量的に多いばかりでなく、内容でも墨書き土器や鐵製品の他に、灰釉陶器・綠釉陶器があり極っている。

本遺跡は、西から東にむかって緩やかに傾斜した段丘面上に立地しているため、基本層序は、水田造成時における土手の部分や盛土した部分を除いては、極めて簡単な構成となっている。

第I層：耕作土 水田耕作土及び水田拡張前耕作土で、層厚は20~30cmとなっている。

第II層：床土：鉄分を含む赤褐色の固くしまった層で、現在の床土と水田拡張前の床土がある。層厚はいずれも10cmである。

第III層：水田造成時盛土 水田の土手部分の盛土(IIIa)は、耕作土と境目がはっきりしないほど類似している。土手部分以外では、暗褐色土(IIIb)とロームを含む茶褐色土(IIIc)



第6図 所帶I遺跡土層図 (1:80)

の盛土が見られ、水田耕作上から最も厚い部分では 110cmにも達する。

第IV層：III表土 噴褐色砂質土の遺物包含層である。層厚は最も大きい部分で30~35cmとなっているので、これより層の薄い部分では、大なり小なり水田造成時等において削土を受けた部分と考える。なお、西側の部分では、第IV層は全く見られない。

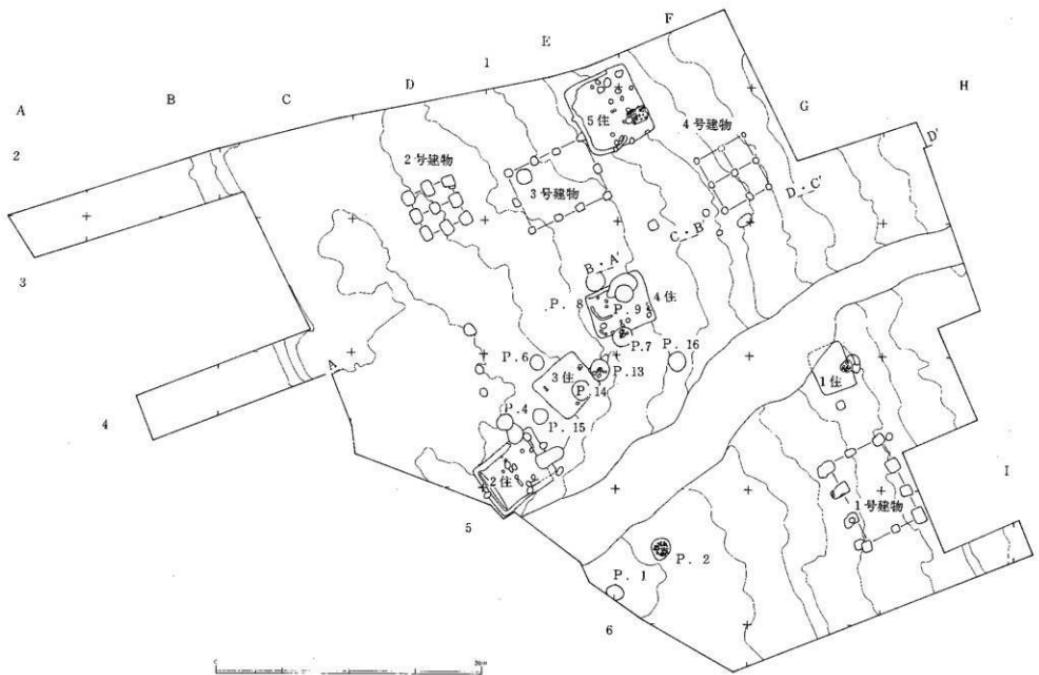
第V層：低位段丘面の地山 白色砂層の部分と黒褐色の固くしまった砂質層の部分とがあり遺構の検出はこの面で行った。

第2節 遺構と遺物

第1号住居跡 (第8~10図、図版2・7)

位 置 G-3・4に位置し 西から東へ若干傾斜している。この地区は、水田造成時の影響を受けていない。

覆 土 住居跡は地表面を掘り込んで形成されている。北西側は河道跡によって切られている。



第7図 所帯I遺跡遺構配置図 (1:300)

覆土は、第Ⅰ層の暗褐色砂質土である。

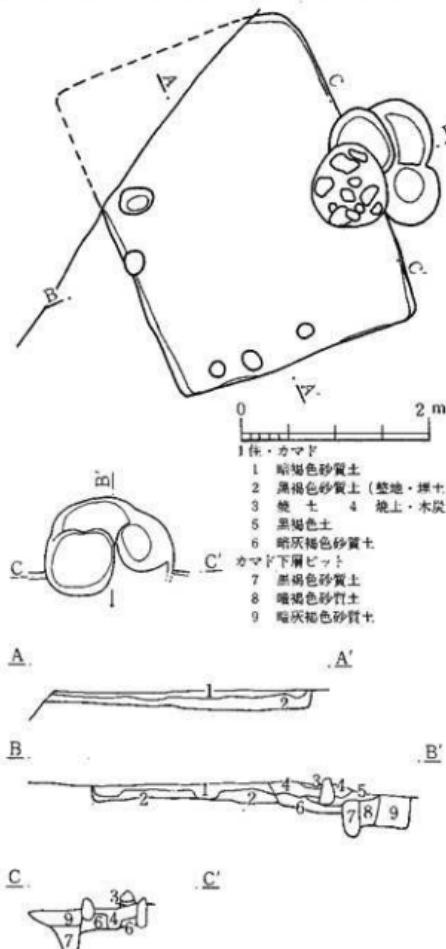
形 状 東西2.75m×南北3.50mの隅丸の長方形である。各辺に歪みはほとんど見られない。

壁 高 床面までの壁高は5~10mで、立ち上がりは垂直に近い。

周 溝 南側と西側の壁下に1本の周溝がある。周溝の幅は20~30cm・深さ5cm程度である。

床 面 一度掘り込んだ後、第2層の黒褐色砂質土により埋上・整地し、よくしまった平坦な床面を作っている。

柱 穴 南西隅に1本確認され、直径16cm・深さ5cmである。



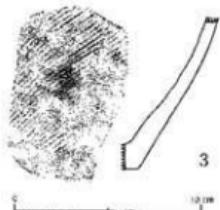
第8図 第1号住居跡・カマド下層ビット群 (1:60)

カマド 東壁中央を切り込んで、硬と粘土により構築されている。カマド内部は焼土・木炭の屑（第3・4層）が堆積しており、最厚部は25cmとなっている。

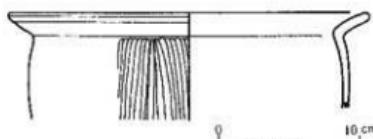
なお、カマド下層に重複した3基のビットが見られる。

遺物の出土状況 遺物量は少なく、壺類は床面直上から、また上師器類はカマド周辺から出土している。

1. 床面直上出土。壺。口径10.4cm、器高4.4cm、底径5.2cmを測る。内面はロクロ撫で後、暗文を施すが、剥落が著しく上半は不鮮明である。暗文は見込みに及ばない。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、外周へラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。
2. 床面直上出土。壺。口径11.0cm、器高4.2cm、底径5.6cmを測る。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。暗文は見込みに及ばない。外面はロクロ撫で後、体部上半までへラ削りを行う。底部は回転糸切り後、全面へラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈するが、体部外面及び口縁部には



第9図 第1号住居跡



第10図 第1号住居跡出土土器 (1:4)

煤が付着し、黒変している。3. 床面直上出土。須恵器甕。胴部下半の破片で、内面はロクロ施で、外面は平行叩き目である。

第10図 カマド部出土。甕。口径は推定25.5cmを測る。口縁は内外面ロクロ施で、胴部は、外面縦方向の、内面横方向のハケ調整を行う。胎土は精選され、焼成も良好で、暗赤褐色を呈するが、外面に若干煤が付着している。

小結 本住居跡は小形である。年代は、暗文付土師器の特徴から見て、9世紀第4四半期に位置づけられる。

出土土器 (1:3) 第2号住居跡 (第11・12図 図版3・7)

位置 E-4・5にかけて位置する。西から東にわずかに傾斜している部分ではあるが、水田造成時に削平され、現況はほぼ平坦地となっている。また、南側に隣接して旧河道路跡が走っている。

覆土 第2号住居跡は、大形の第2A号住居跡と小形の第2B号住居跡の2基が、同一面で重複関係にある。新旧関係は、カマドの遺存状態から第2A号住居跡が新しく、第2B号住居跡が古い。覆土は、2A・2Bともほぼ同質の暗赤褐色砂質土で、2Bの方が固くしまっている。

形状 2A住は東西4.9m×南北4.15mの長方形で、南辺がやや内湾している。

2B住は南北3.8m×東西3.0mの長方形と推定される。

壁高 2A・2B住とともに、床面までの壁高は10~15cmとなっている。壁の立ち上がりは、北壁のみ若干傾斜しているが、他の3辺は垂直に近い。

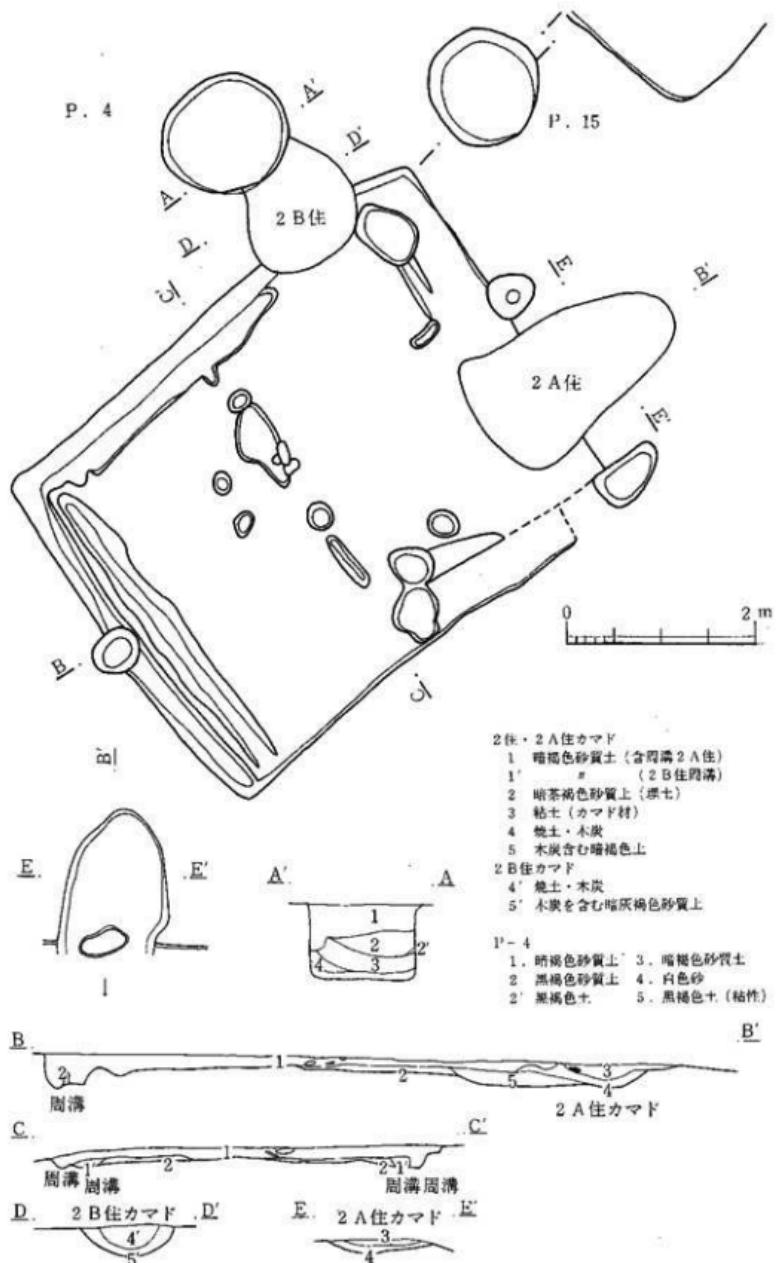
周溝 2A住は、カマド部を除くすべての壁下に一本の周溝がある他、西壁側ではその内側にもう一本周溝が見られる。周溝の幅は15~25cm、深さは5~20cmとなっている。

2B住は、カマド部・東壁を除く部分に一本の周溝がある。幅は20~25cm、深さ10~15cmを測る。

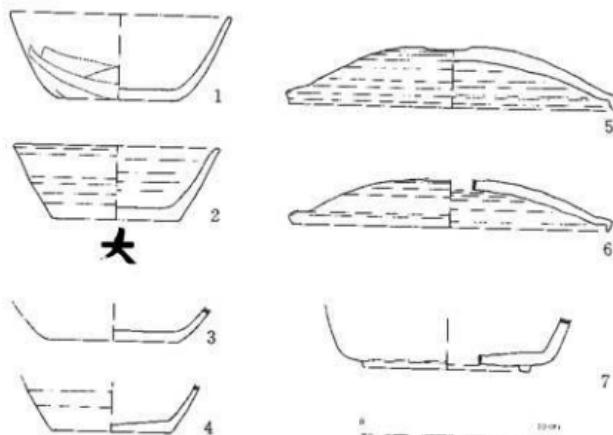
床面 住居構築時に凹地となった部分を、ロームを含む暗茶褐色砂質土により埋土し、平坦の床面としている。

柱穴 2A・2B住とも確認されなかった。

カマド 2A住は、東壁南寄りを切り込んで構築されている。礎は使用せず、粘土の積み上げにより構築されている。煙道先端までは230cmと長く、地盤からの深さも最大25cmとなっている。カマド部は、上層がカマド材の粘土で、下層が焼土・木炭及びそれらを含む層である。



第11図 第2A・2B住居跡・2Aカマド完掘図及びP-4 (1:60)



第12図 第2号住居跡出土土器 (1:3)

2B住は、北壁中央を切り込んで構築されているが、先端を第4号土塙により切られてい。上部のカマド材は削平等により全く見られず、カマド内の焼土・木炭等が確認されるのみである。また、その焼土は、2A住に切られている。なお、地盤からの深さは、最大35cm

を測る。

遺物の出土状況 遺物はいずれも床面直上より出土しているが、遺物量は少ない。また、2A・2B住の遺物の区別はつかない。

なお、出土遺物の主体は須恵器である。

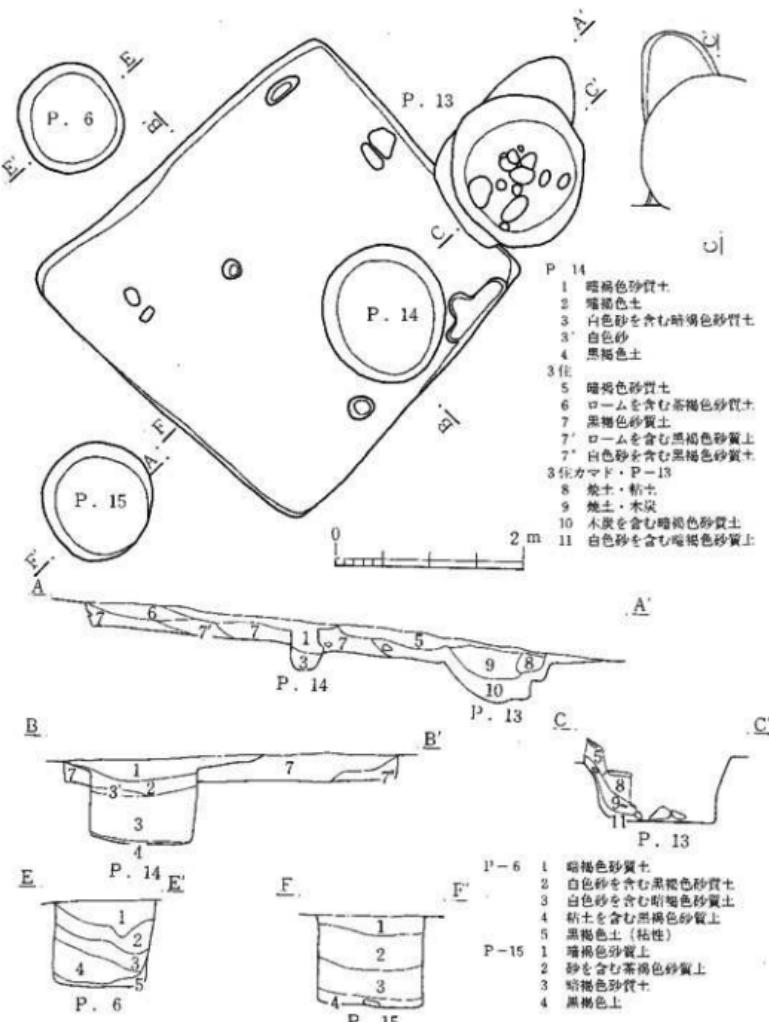
1. 床面直上出土。壺。口径11.8cm、器高4.6cm、底径6.4cmを測る。内面は剥落が著しく、ロクロ撫で後、放射状暗文が施されているのがわざかに見える。暗文は見込みに及ぶ。外表面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、全面ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、色調は赤褐色を呈する。2. 床面直上出土。須恵器壺。口径推定10.9cm、器高4.0cm、底径6.8cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。底部は回転糸切りである。底部には墨書「大」がある。3. 床面直上出土。須恵器壺。底径7.0cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。この壺は、体部と底部の境が丸みをもって不明瞭であるとともに、胎土も精選されず堅緻ではない。4. 床面直上出土。須恵器壺。底径6.4cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。5. 床面直上出土。須恵器蓋。径17.6cm、現高3.3cmを測る。内外面ともロクロ撫で後、外面にヘラ削りを行う。つまみ欠損している。6. 床面直上出土。須恵器蓋。径17.0cm、現高2.6cmを測る。内外面ともロクロ撫で後、外面天井部周辺にヘラ削りを行う。7. 床面直上出土。須恵器有台壺。高台径推定9cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。底部は回転糸切り後、外周をヘラ削りし、高台を貼り付ける。

小結 本住居跡は、2A住(新)と2B住(旧)の2基の住居跡が重複している。2A住は大型で、2B住は小形である。遺物はいずれに属するか判然としないが、年代は、暗文付土師器の特徴から見て、9世紀第2~3四半期に位置づけられる。

第3号住居跡（第13～15図・図版3・8）

位 置 E-4に位置する。西から東に緩やかに傾斜している。この地には土塙群があり、2基と重複し、2基が近接している。

覆 土 住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。カマド部はP-13を切っている。また



第13図 第3号住居跡・カマド完掘図及びP-6・13・14・15 (1:60)

南壁寄りはP-14に切られている。覆土は第7・7'・7"層で、いずれも黒褐色砂質土系である。
形 状 東西3.6~4.0m×南北3.6mの北西隅の張り出した台形である。各辺に歪みはほとんど見られない。

壁 高 床面までの壁高は25~30cm程度となっている。壁の立ち上がりは、全体に垂直に近い状態となっている。

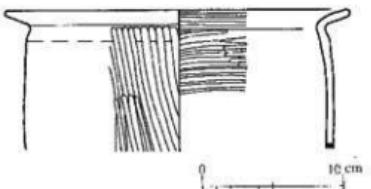
周 溝 検出されなかった。

床 面 比較的平坦な床面で、貼床はされていない。

柱 穴 明確に判別できるものはない。

カマド 東壁南寄りに切り込んで構築されている。礫と粘土を使用して組み上げられていたものと見られるが、カマド材の礫や粘土の大半は、下層の第13号土塙内に陥没したような状況を呈している。また、煙道先端までは、190cmと長く、地盤からの深さも30cmと深くなっている。カマド内部は、焼土・木炭が厚く堆積している。

第14図 第3号住居跡出土土器
(1:3)



第15図 第3号住居跡出土土器(1:4) 外面はロクロ撫でである。胎土はやや大きめの粒子を含み、焼成は良好、黄茶褐色を呈する。

第15図 カマド周辺出土。甕。口径推定24.4cmを測る。口縁部は内外面ともロクロ撫でを行う。胴部は、外面縱方向、内面横方向のヘラ調整を行う。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。胴部下半に煤が付着している。

小 結 本住居跡は中形に属する。カマドの形状は2A住のそれと類似し、また、出土遺物も須恵器が主体で同時期と見られる小片もあることから、本住居跡の年代は、9世紀第2~3四半期に位置づけられる。

第4号住居跡(第16~18図・図3・8)

位 置 E・F-3に位置する。西から東へ緩やかに傾斜している。この地区には3号住同様に、土塙群があり、2基と重複し、1基が極めて近接している。

覆 土 住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。カマド部及び南壁中央付近を、それぞれP-9・P-7に切られている。覆土は、第1層の暗褐色砂質土である。

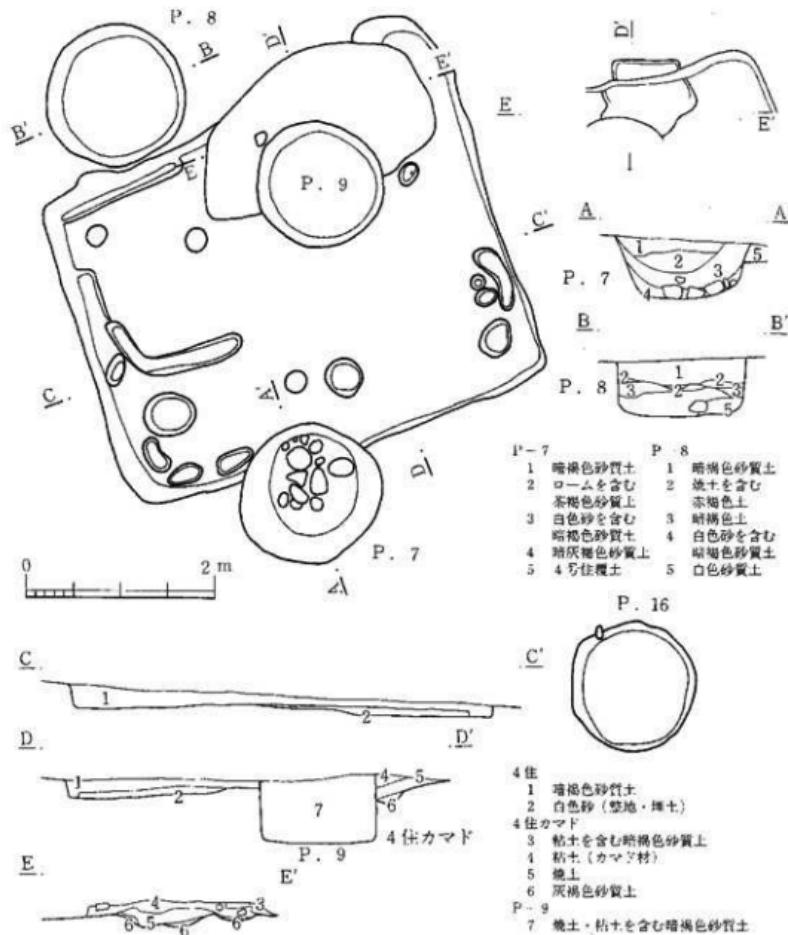
形 状 南北3.8m×東西4.6mのはば長方形であるが、北東隅が影んでいる。

壁 高 床面までの壁高は、西壁で25cm、東壁で10cmとなっている。壁の立ち上がりは、東壁・南壁は垂直に近いが、西壁・北壁は若干傾斜している。

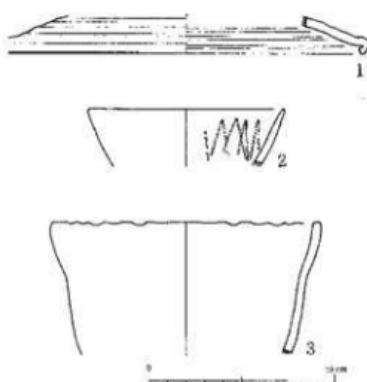
周 溝 カマド部を除く、各壁下に点々と認められる。周溝の幅10~25cm、深さは5cm以内と極めて浅い溝である。

床 面 住居構築時の凹地や傾斜を、白色砂で埋土整地し、平坦でよくしまった床面としている。

柱 穴 4木柱と考えられるが、南壁側の東西隅の2本しか検出されなかった。検出された2



第16図 第4号住居跡・カマド完掘図及びP-7・8・9・16 (1:60)



第17図 第4号住居跡出土土器 (1:3)



第18図 第4号住居跡出土土器 (1:4)

本は、直徑35~50cm、深さ18~20cmである。

カマド 北壁東寄に構築されているが、炊き口付近をP-9により切られている。このカマドは、礫を使用せず粘土の積み上げにより構築されている。床面下への掘り下げは、25cm程度となっており、焼土が厚く堆積している。

なお、P-9には焼土やカマド材の粘土が多く含まれている。

遺物の出土状況 遺物は床面直上より出土しているが、量的には非常に少ない。

1. 床面直上出土。須恵器蓋。内外面ともロクロ撫でを行っている。内面にかえりをもつ。

2. 床面直上出土。壺。口径10.4cmを測る。内面はロクロ撫で後、まばらに花弁状暗文を施すが、口縁には及ばない。外面はロクロ撫で後、ヘラ磨きを行う。胎土は精選され、焼成は良好で、赤褐色を呈する。3. 床面直上出土。手づくね土器。非常に薄手で、内面に指痕が見える。口縁は焼成後、打ち欠いてある。胎土はほとんど混入物がなく、焼成は良好で、灰褐色を呈する。

第18図 床面直上出土。壺。内外面とも剥落が著しく、調整痕も不鮮明であるが、脇部内面は、横方向のハケ溝

整 外面はロクロ撫でを行った。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。

小 紹 本住居跡は、2B住と並んで当地方では珍しい、北壁にカマドを持つ住居跡である。暗文付土師器の特徴からみて、年代は9世紀第2~3四半期と見られる。

第5号住居跡 (第19~22図・図版4・9・10)

位 置 E・F-1・2にかけて位置する。西から東にかけてわずかに傾斜している。この付近は、水田造成の影響を受けていないため、遺存状態は良好である。

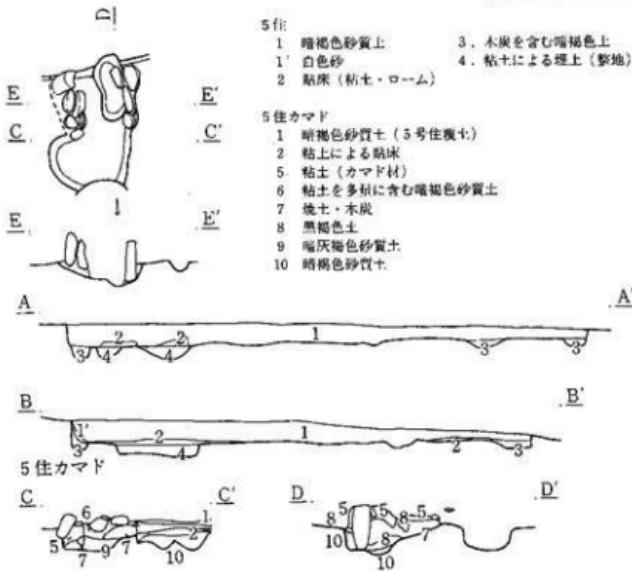
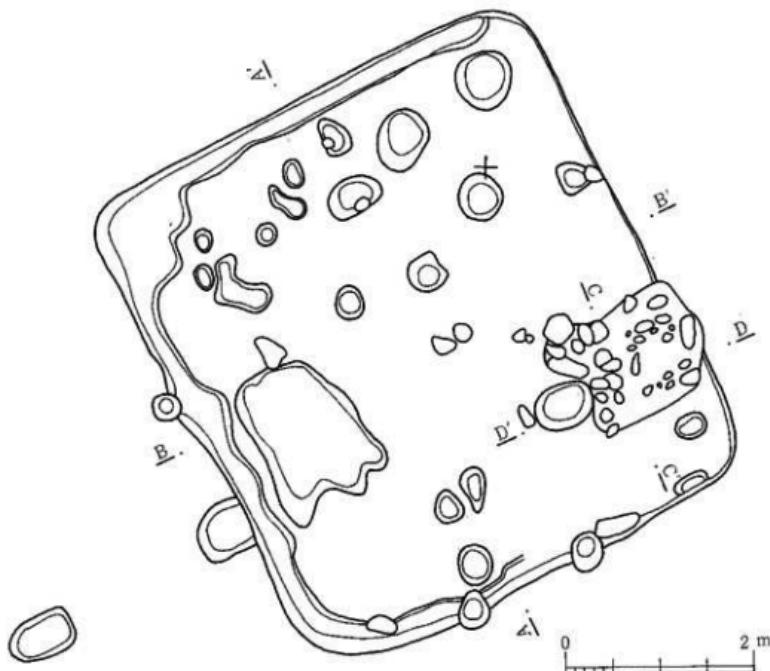
覆 土 住居跡は地山を掘り込んで形成されている。覆土は、第1層の暗褐色砂質土である。

形 状 東西5.1m×南北5.7mの隅丸の方形であり、本遺跡で最大の住居跡である。

壁 高 床面までの壁高は、西壁及び南壁が25cm程度と高く、北壁が10cm、東壁が5cmと低くなっている。壁の立ち上がりは、垂直に近い状態となっている。

周 溝 カマドのある東壁を除く三辺の壁下に周溝がある。周溝の幅は20~25cm、深さ8~15cmを測る。

床 面 住居構築時の多數の凹地を、第2層の粘土・ロームで貼床、第4層の粘土による埋土



第19図 第5号住居跡・カマド完掘図 (1:60)

により整地し、平坦な床面を作っている。

柱穴 南壁に沿って3本、直径30~35cm、深さ50~60cmのピットがある。また、北東隅に直径60cm、深さ20cmのピットがあり、いずれも柱穴の可能性がある。特に南壁上にある2基のピットは、1.4mの間隔で掘られていることから、入口部の柱穴と見られる。

なお、西壁に接して、第3号掘立柱建物跡の柱穴がある。

カマド 東壁南寄に構築されている。カマドは幅20~30cm、高さ40cm、厚さ10cm程の偏平の礫を袖石とし、粘土でまわりを固めて構築されている。床面下への掘り下げは最大20cmとなっている。カマド内部は、焼上・木炭、剥落した粘土の層が厚く堆積している。

なお、炊口部前面に50×25cm、深さ25cmのピットがある。

遺物の出土状況 遺物はいずれも床面直上の第1層より出土している。遺物量は多く、内容も豊富である。遺物の出土位置はカマド周辺に集中している。

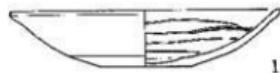
第20図-1 床面直上出土。皿。口径14.4cm、器高3.0cm、底径4.9cmを測る。内面はロクロ撫で後、横方向の暗文を施す。なお、見込み中央は極めて薄手に仕上げている。外面はロクロ撫で後、体部下半に横方向のヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、全面ヘラ削りを行う。口縁はやや玉縁状を呈し、ロクロ調整により体部と明晰に区切る。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。20-2. 床面直上出土。皿。口径推定14.0cm。内面ロクロ撫で、外面ロクロ撫で無調整である。口縁はやや玉縁状で、外反している。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。20-3. 床面直上出土。皿。口径推定13.6cm、器高2.9cm、底径推定6.2cmを測る。内面はロクロ撫でを行う。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行い、中段の後の部分にヘラ磨きを行う。口縁はやや玉縁状で、外反している。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。20-4. 床面直上出土。皿。口径推定13.8cm。内面はロクロ撫で後、口縁と体部との境に一本の沈線を巡らす。また、横方向の暗文を施している。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤茶褐色を呈する。

以上の皿(1~4)は、その特徴から9世紀第4四半期に位置づけられる。

第20図-5. 床面直上出土。脚付皿。口径推定13.6cm、器高3.4cmを測る。内外面ともロクロ撫で、ヘラ磨きを行い。底部外周部に脚を付けた後、内外面に黒色処理を行う。脚は現存部で2本見られるが、全体では3本あったものと考えられる。胎土は精選され、焼成も良好である。20-6. 床面直上出土。有台皿。口径13cm、器高2cm、高台径6.4cmを測る。内面はロクロ撫で、口縁部ヘラ磨き後、黒色処理を行う。なお、体部内面には、放射状のハケ調整が見える。外面は、体部がロクロ撫で、底部が回転糸切り後、底部外周に高台を付ける。高台内面に煤が付着している。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。20-7. 床面直上出土。有台皿。口径推定13.4cm、器高2.7cm、高台径推定6.7cmを測る。内面はロクロ撫で、口縁部ヘラ磨き後、黒色処理を行う。なお、体部内面には、放射状のハケ調整が見える。外面はロクロ撫で、底部回転糸切り後、底部外周に高台を付ける。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。20-8. 床面直上出土。环。底径推定6.3cm。内面黒色処理を行う。外面

はロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好で、灰褐色を呈する。

20-9. 床面直上出土。环。底径推定 8 cm。内面はロクロ撫で、ヘラ磨き後、放射状の暗文を施す。外面はロクロ撫で後、ヘラ磨きを行う。底部はヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好・堅緻で、赤褐色を呈する。



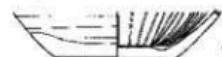
1



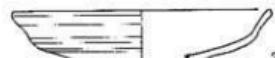
9



2



10



3



4



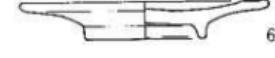
11



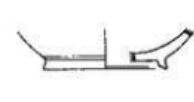
5



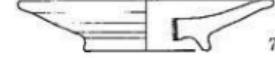
12



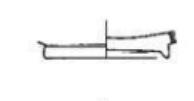
6



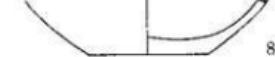
13



7



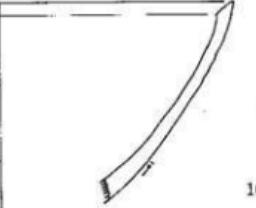
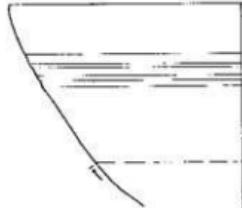
14



8



15

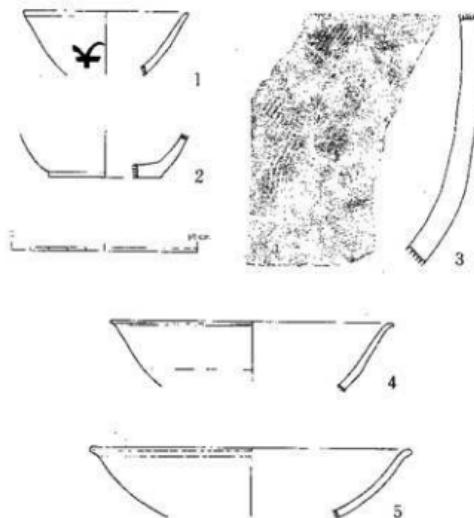


16

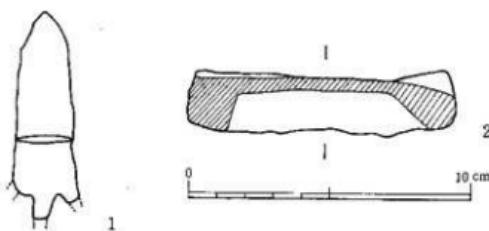
第20図 第5号住居跡出土土器 (1 : 3)

以上の暗文付环(9~11)の年代は、その特徴から9

·11は9世紀第2·3四半期、10は9世紀第4四半期



第21図 第5号住居跡出土土器 (1:3)



第22図 第5号住居跡出土鉄製品 (1:2)

撫でを行う。体部外面に墨書「大」がある。焼成はあまり良好ではなく、灰白色を呈する。
21-2. 床面直上出土。須恵器環。底径6cm。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。
21-3. 床面直上出土。須恵器環。外面はロクロ撫で後、平行叩き目を行う。内面はロクロ撫でを行う。

21-4. 床面直上出土。灰釉陶器椀。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は強く外反する。比較的薄手である。内外面ともロクロ撫でを行う。施釉は刷毛塗りで、外面体部上半と内面に施す。
21-5. 床面直上出土。綠釉陶器椀。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は強く外反する。内外面ともロクロ撫でと見られるが、剥落が著しく不鮮明である。釉は、淡黄色かほとんどで、口縁部に一部濃緑色の部分がある。胎土は白色の軟陶である。

に位置づけられる。

20-12. 床面直上出土。环。内面ロクロ撫で、口縁部へラ磨き後、花弁状暗文を施す。外面はロクロ撫でを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。20-13.

床面直上出土。有台环。内面黒色処理を行う。外面ロクロ撫で、底部回転糸切り後、外周に高台を貼り付ける。20-14. 床面直上出土。有台皿と見られる。内外面とも黒色処理を行う。底部回転糸切り後、外周に高台を貼り付ける。20-15. 床面直上出土。环。底径6.5cm。内面黒色処理を行う。外面ロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好で、灰褐色を呈する。

20-16. 床面直上出土。鉢。内面黒色処理を行う。外面はロクロ撫で後、体部下半にへラ削りを行う。口縁はへラ調整により棱をつくる。胎土はやや大粒の粒子を含み、焼成も良好で、茶褐色を呈する。

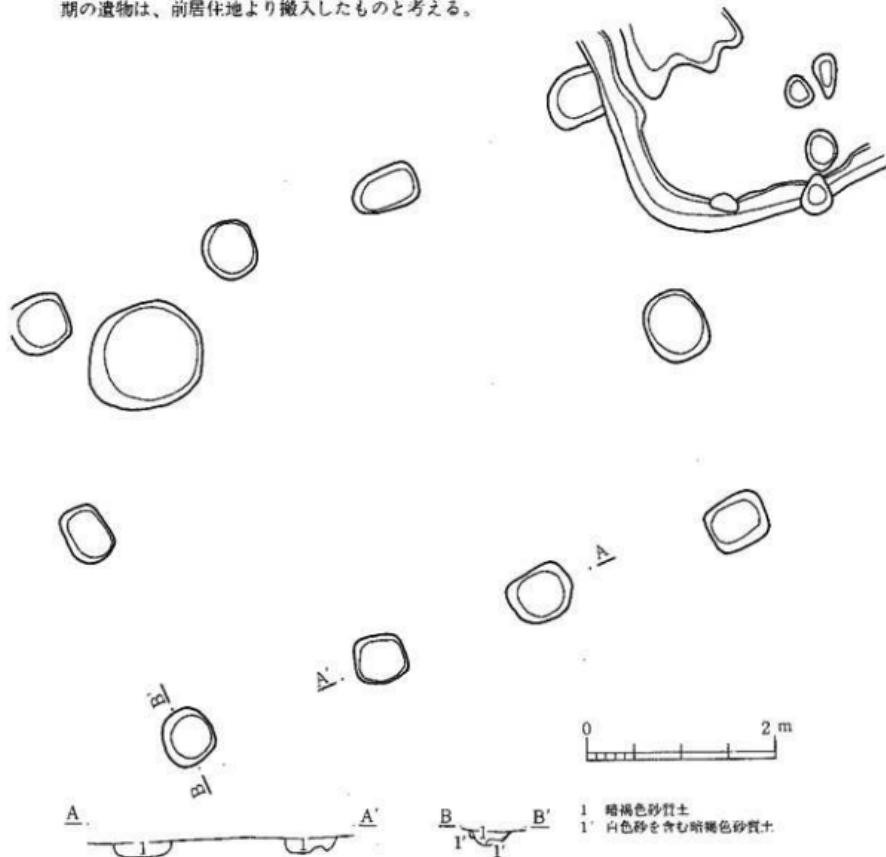
第21図-1 床面直上出土。須恵器環。内外面ともロクロ撫でを行う。底径6cm。内面黒色処理を行う。外面はロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。

第21図-1 床面直上出土。須恵器環。内外面ともロクロ撫でを行う。底径6cm。内面黒色処理を行う。外面はロクロ撫で、底部は回転糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。

第22図-1. 床面直上出土。鉄鐵。現長 7.3cmで茎の欠損した、腸抉柳葉式である。断面はレンズ状を呈する。
22-2. 床面直上出土。刀子。茎部のみで 9.5cmを測る。茎には斜線部に木質の柄の一部が残っている。目釘穴は木質部に 2か所見られる。

小 結 本住居跡は、本遺跡のなかで最大の規模であるほか、カマドも丁寧に築かれている。また、遺物も土師器・須恵器のはか、施釉陶器・鉄製品も唯一出土している。これらの特徴から、集落的で中心的な役割を果したことがうかがえる。

出土遺物に、9世紀第2・3四半期のものと第4四半期のものがあるが、一般的には新しい年代を示す、第4四半期を本住居の年代と位置づけるのが妥当と考える。なお、第2・3四半期の遺物は、前居住地より搬入したものと考える。



第23図 第3号掘立柱建物跡 (1:60)

第3号掘立柱建物跡（第23図・図版5）

位 置 E-2に位置し、西から東に緩やかに傾斜した場所である。

規 模 東西3間（6.3m）×南北2間（4.8m）の東西棟建物で、方位は北25°西へ偏している。柱間寸法は、桁行が2.0～2.2m、梁間が2.3～2.5m程度となっている。

柱 穴 柱掘形は、大きさに若干のばらつきはあるものの、いずれも方形ないしは長方形で、一辺50～70cmを測る。深さはいずれも浅く15～20cmとなっている。柱痕跡は検出されなかった。

小 結 遺物は甕の小片が出土地で出土していることから、住居跡と同時期のものである。なお、北東角の柱穴が、第5号住居跡の西壁と接しているが、新旧関係は不明である。

第1号掘立柱建物跡（第24図・図版4）

位 置 G・H-4・5に位置し、西から東に緩やかに傾斜した場所である。

規 模 南北3間（6.6m）×東西2間（4.6m）の南北棟建物で、方位は北28°西へ偏している。柱間寸法は、桁行が2.2m、梁間が2.3m程度となっている。

なお、本建物は一度建て直されており、上記の数値は建て直し後のものである。建て直し前の数値は、南北6.6m×東西5.0mで、柱間寸法は桁行2.2m、梁間2.3mと2.7m程度である。

柱 穴 柱掘形は、大きさにはばらつきはあるものの、いずれも方形で一辺80～110cmを測る。深さは、いずれも浅く15～35cmとなっている。柱痕跡は、東西の桁行の3か所の柱穴で確認でき、直径約15～20cmを測る。

小 結 遺物は甕の破片が出土地で出土していることから、住居跡と同時期のものである。

第2号掘立柱建物跡（第25図・図版5）

位 置 D-2・3に位置し、西から東へわずかに傾斜した場所である。

規 模 2間（3.3～3.4m）×2間（3.3～3.4m）の純柱建物で、方位は北25°西へ偏している。柱間寸法は、1.6～1.7mを測る。

柱 穴 柱掘形は、中央の柱穴を除き、いずれも長方形で辺80～100cm×90～110cmを測る。深さは30～45cmを測る。柱痕跡は、中央の柱穴を除くすべての柱穴で確認され、直径約20cm程度となっている。また、柱穴覆土は、ロームを含む層と含まない層を交互に埋めたて、版塗状に固めている。

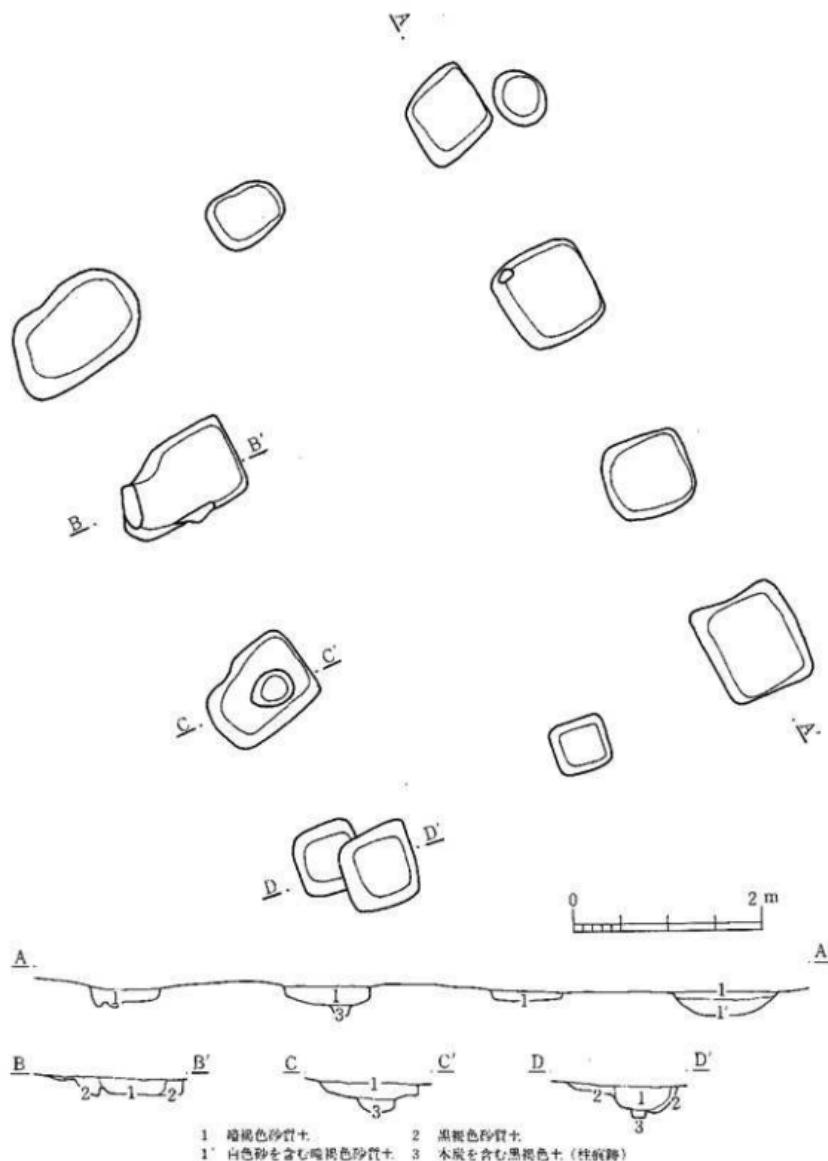
なお、中央の柱穴は、辺80cmの方形で、深さ15cmを測る。版塗状の埋め土は見られない。

小 結 出土遺物は甕の破片があり、住居跡と同時期のものである。なお、第3号掘立柱建物跡と近接し、同一方向であることから、同時期の可能性がある。

第4号掘立柱建物跡（第26図・図版5）

位 置 F・G-2に位置し、西から東へ傾斜した場所である。

規 模 南北2間（4.2m）×東西2間（4.2m）の純柱建物で、方位は北29°西へ偏してい

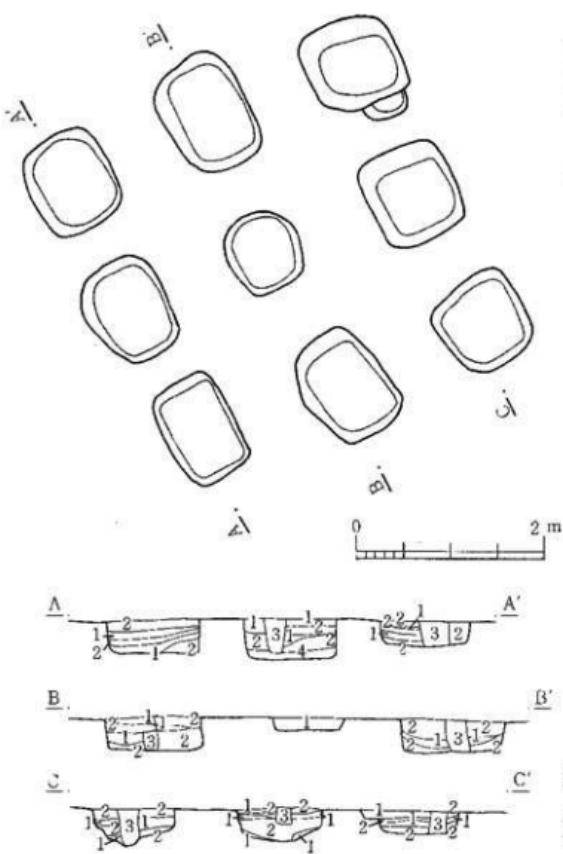


第24図 第1号掘立柱建物跡 (1:60)

る。北側中央の柱穴は検出されなかったが、柱間寸法は、南北が 2.1m、東西が 2 m である。

柱穴 柱掘形は、不定形のものもあるが、ほぼ方形で、辺 40~50cm、深さは 20~25cm となっている。柱痕跡は検出されなかった。

小結 本遺構に伴う遺物は出土していないため、住居との組み合せは不明であるが、第 1 号掘立柱建物跡とほぼ同一方向であることから、同時期の可能性がある。

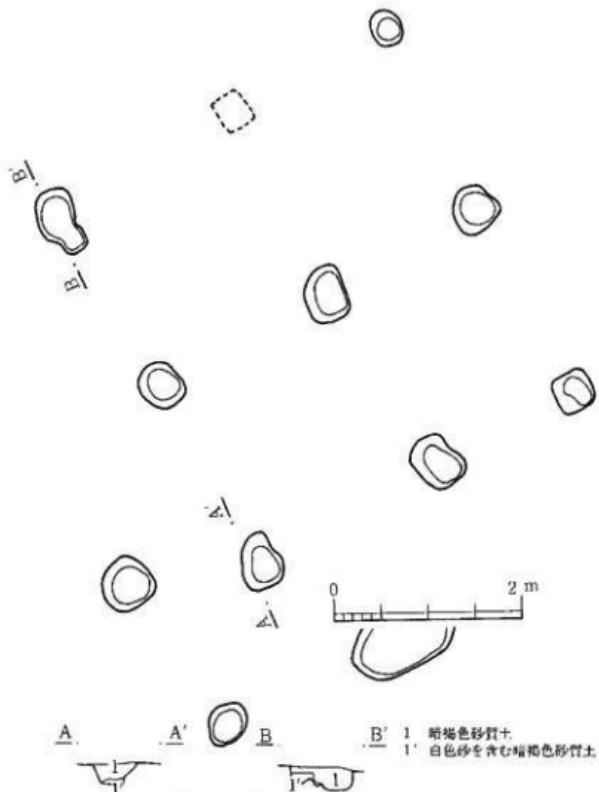


第25図 第2号掘立柱建物跡 (1 : 60)

土塙群 (第11・13・16・27図、図版 3・6)

本遺跡では、11基の土塙が確認されている。このうち、F-5 に位置する第 1 号土塙及び第 2 号土塙を除けば、他の 9 基の土塙（第 4・6・7・8・9・13・14・15・16 号土塙）は、E・F-3・4 に集中している。

これらの土塙群の中には、住居跡（第 2・3・4 号住居跡）と重複関係のある土塙（第 4・7・9・13・14 号土塙）があるが、土塙どおしの重複関係はない。



第26図 第4号掘立柱建物跡 (1 : 60)

ここでは、各土塙について、その特徴を記述する。

P-1, F-5の南西側に位置する。円形で、直径 110cm、深さ25cmである。

P-2, F-5の中央付近に位置する。円形で、直径 150cm、深さ95cmである。壁はやや傾斜した部分もあるが垂直に近い。

覆土の状態は、土層は暗褐色砂質土を主体とする自然堆積で埋まっているが、下層は木炭を多量に含む暗褐色土で、基底部の南東寄にかけて多量の偏平な河原石をつめている。

P-4, E-4 西側に位置する。円形で、直径 120~130cm、深さ80cmである。壁の立ち上がりは垂直ないしはやや内寄している。

本土塙は、第2B号住居跡のカマドを切っている。

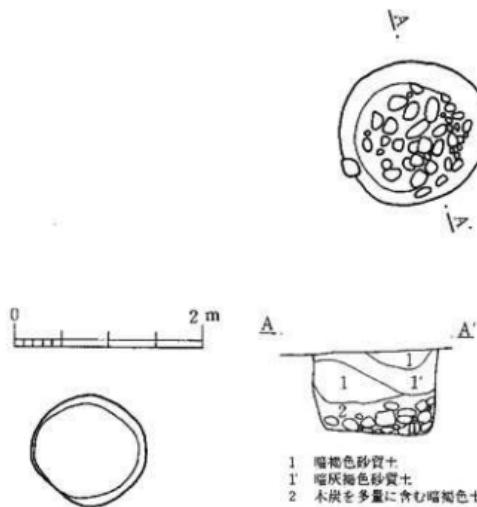
覆土の状態は、暗褐色砂質土ないしは黒褐色砂質土で埋め戻され、最下層は粘性のある黒褐色土である。

P-6, E-4 北側に位置し、第3号住居跡に隣接している。円形で、直径 110cm、深さ96cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直ないしは、やや内寄している。

覆土の状態は、暗褐色砂質土ないしは黒褐色砂質土で埋め戻され、最下層はやや粘性のある黒褐色土である。

P-7, F-3 南西隅に位置し、第4号住居跡の南壁を切っている。円形で、直径 150~160cm、深さ65cmを測る。壁の立ち上がりは、比較的傾斜をもち、底径は 100cm前後である。

覆土の状態は、下層の自然堆積により浅い凹地になった部分を、ロームを含む茶褐色砂質土で埋めたてている。基底部には10数個の偏平な河原石をつめている。



第27図 P-1・2 (1:60)

P-8. E-3 東側に位置し、第4号住居跡と僅めて近接している。円形で、直径140~150cm、深さ60cmを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直に近い。

覆土の状態は、中間に焼土を含む赤褐色土をはさみ、2度にわけて埋め戻されている。なお、焼土は近接する4号住のものと見られる。

P-9. F-3 西端に位置し、第4号住居跡の床面及びカマドを切って、掘り込まれている。円形で、直径130cm、深さ70cmを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直に近い。

覆土の状態は、4号住のカマ

ドを切っているため、焼土・木炭及びカマド材の粘土を含む暗褐色砂質土である。

P-13. E-4 北東隅に位置し、本土塙埋没後、上面に構築された第3号住居跡のカマドが陥没している。形状は、3号住カマドの構築時に上面が削られているが、円形で、直径140cmと推定する。深さは70cmである。壁の立ち上がりは、やや傾斜し、底径は110cmを測る。

覆土の状態は、3号住のカマドの層がそのまま入り込み、土塙内の大部分を占めている。基底部に偏平な河原石が数個見られるが、カマド材の可能性もある。

P-14. E-4 に位置し、第3号住居跡床面を切って、掘り込まれている。円形で、直径130~140cm、深さ90cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土の状態は、暗褐色砂質土系の土による埋め土で、最下層は粘性をもつ黒褐色土である。

P-15. E-4 中央に位置し、第2・3号住居跡の間にある。円形で、直径120cm、深さ100cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土の状態は、最下層の粘性のある黒褐色土を暗褐色砂質土ないしは茶褐色砂質土で埋め土している。

P-16. F-4 北端に位置する。円形で、直径130~140cm、深さ100cmを測る。壁は垂直に立ち上がっている。

覆土の状態は、最下層の粘性のある黒褐色土を暗褐色砂質土を主体とする土層で埋め土している。

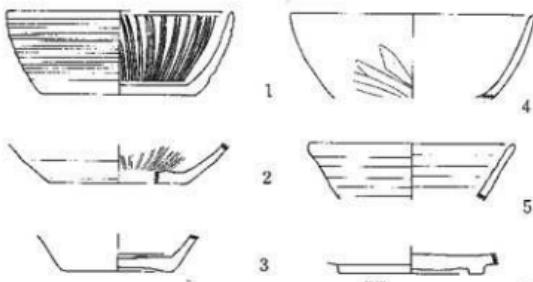
小 結 これらの土塙群のうち、P-1を除く10基は、いずれも円形で、直径110~150cm、深さ60~100cmを測り、その特徴から2種類に分類でき、性格も異なるものと考えられる。

一方は、基底部に河原石を入れ、自然堆積で埋まったもので、壁は埋まっていく過程で崩落したためか、傾斜をもつ。このグループには、P-2・7・13がある。

他方は、基底部付近に粘性のある黒褐色土があり、その上面を埋め土している。壁は垂直に近い。このグループには、P-4・6・8・9・14・15・16がある。

これらの年代は、P-4・8より甕の破片が出土したのみであるが、形状の共通性や住居跡

との重複関係の特徴から、
本集落に伴うものと考える。



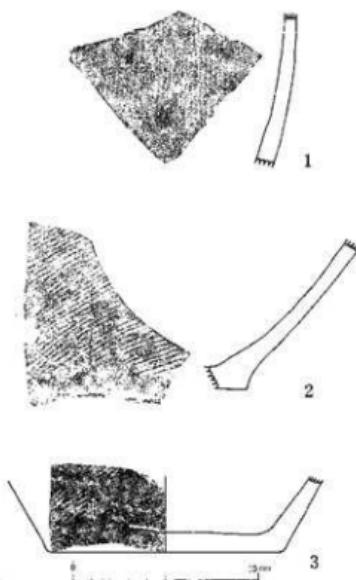
第28図 グリッド出土土器 (1:3)

グリッド出土遺物 (第28
~30図・図版10)

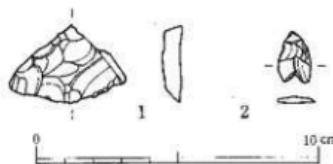
第28図-1. E-4出土。
甕。口径推定12.0cm、器高
4.5cm、底径 8.3cmを測る。

6 内面はロクロ撫で、ヘラ磨
き後、花弁状の暗文を施す。

暗文は見込みに及ぶ。外面はロクロ撫で後、ヘラ磨きを行う。底部は丁寧なヘラ削り、ヘラ磨きを行う。胎土は精選され、焼成は極めて良好・堅硬で、赤褐色を呈する。 28-2. E-3出土。甕。内面は放射状暗文を施した後、黒色処理されている。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。 28-3. E-2出土。甕。底径 6.0cmを測る。内面は剥落が著しいが、かすかに放射状暗文が見られ、見込みに及ぶ。外面はかすかにヘラ削り痕が見える。底部は回転糸切り後、外周にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。 28-4. E-2. 5号住上面出土。甕。内面はロクロ撫で、外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。 28-5. E-4出土。須恵器甕。内外面ともロクロ撫である。 28-6. E-4出土。須恵器有台甕。高台径 7.8



第29図 グリッド出土土器 (1:3)



第30図 グリッド出土石器 (1:2)

cmを測る。見込みはロクロ撫でを行う。底部は回転糸切り後、外周ヘラ削りを行い高台を貼り付ける。

第29図-1. 旧河道内出土。須恵器甕。外面平行叩き目である。29-2. III河道内出土。須恵器甕。内面底部付近に指頭痕が見える。外面は平行叩き目である。29-3. E-4出土。須恵器甕。底径推定12.8 cm。内面ロクロ撫で、外面平行叩き目である。

第30図-1. E-4、2号住上層出土。繩文時代石匙。横型でつまみを欠く。刃部加工は大部分片側から行われているが、粗雑な作りである。石材は黒曜石である。30-2. E-4、3号住上層出土。繩文時代石鏃。円基無基鏃である。裏面は広く自然面を残す。基部の抉りは三角形状である。石材は黒曜石である。

第3節 まとめ

本遺跡では、平安時代の住居跡6基、掘立柱建物跡4棟、土塙11基等が発掘されている。特に住居跡は、出土遺物から見れば、9世紀第2・3四半期(2A・2B・3・4号住)と第4四半期(1・5号住)との2時期に大別されるが、2A住と2B住とは、重複関係にあり、遺物は混在しているものの、2A住が2B住を切って構築されていることから、9世紀第2・3四半期は、さらに2時期に細分できる。

さて、各時期の特徴等は、次のとおりである。

9世紀第2・3四半期(古)は、北壁にカマドを構築した住居で、2B号及び4号住がそれにあたる。また、遺物は、重複関係のない4号住から、暗文付坏及びロクロ撫でにより成形された甕が主体となるものと考える。

9世紀第2・3四半期(新)は、東壁に構築された長い煙道をもつ住居で、2A号及び3号住がそれにあたる。遺物は、3号住のそれから見て、暗文付坏はほとんどなく、内黒坏・須恵器坏及び内外面ハケ調整の甕が主体である。

上記した2時期の特徴は、年代差によるものが、地域差によるものかは、今後の検討課題である。

9世紀第4四半期になると、東壁に河原石を組んだカマドを構築した住居で、1号及び5号住がそれにあたる。遺物は、暗文付坏・皿、内黒坏・甕、内外面ハケ調整の甕、須恵器甕、さらには施釉陶器等種類も豊富である。

なお、掘立柱建物跡はその位置関係から、第1号と第4号が9世紀第4四半期に、第2号と第3号が9世紀第2・3四半期の新・旧いずれか、ないしは両方に属するものと考えられる。また土塙群は各期に属するものと考えられる。

以上のように、本遺跡では、短期間に3回、極めて小規模の集落が営まれたことが判明し、開墾により耕地の増加をはかる、出作り集落の特徴を知る上で極めて興味深い資料である。

第IV章 所帯 II 遺跡

第1節 遺跡の概観と層序

本遺跡は、地山面まで削平して水田造成を行った部分が、各水田で確認されている。さらに、その上層の遺物包含層もかなりの範囲で全部ないしはその一部が削土されている。そのために、遺物もかなりの量が失われたものと考えられる。また、遺構も水田造成時の削平が大きい部分では、底面付近が残存するものや一部が完全に切られているものもある。

さて、発掘した遺構や遺物から所帯II遺跡を概観すると、平安時代を主体とするが、縄文時代・弥生時代・中世の遺物も出土している。

縄文時代 遺物量は少ないが、F・G-2を中心として縄文土器・石器が出土している。縄文土器の年代は、前期末～中期前半と中期末とに分けられる。遺構は判然としない。

弥生時代 遺物量は少ないが、C・D-5に集中して出土している。弥生土器の年代は初期の段階のものと考えられる。遺構は、C-5の集石ビットのみである。

中世 遺跡の南側のG-5・6、平安時代の第10号住居跡と重複する程度の狭い範囲に、わずかな遺物の出土を見た程度である。その主なものは、天日茶碗の小片等の陶器類・古銭等である。遺構は、この地点で多数検出された柱穴と見られるビット群等があり、掘立柱建物跡の住居跡があったものと考えられる。

平安時代 本遺跡の主体をなす時代で、遺物量も比較的多く、東側のH・I・Jを除くほとんどの地区より出土しているが、遺構の密度の高い中央部に多い。

遺構は、竪穴住居跡が10基、掘立柱建物跡が2棟ある。また、土塙は60基程度と多数にのぼるが、遺物の出土していないものが多いため、時期を明確には断定できないが、F・G-3・4に集中し、所帯I遺跡同様、住居跡を切っているものもある。

住居跡は、その出土遺物からみて、3時期に分類できる。なお、第5・6号住居跡は重複関係にある。カマドは、東壁・南壁・西壁・北壁とさまざまな方向にある他、カマドのない住居跡もある。

掘立柱建物跡は、F・G-1・2に2棟並んでいる。いずれも3間×2間で、柱穴はいずれも方形を呈している。

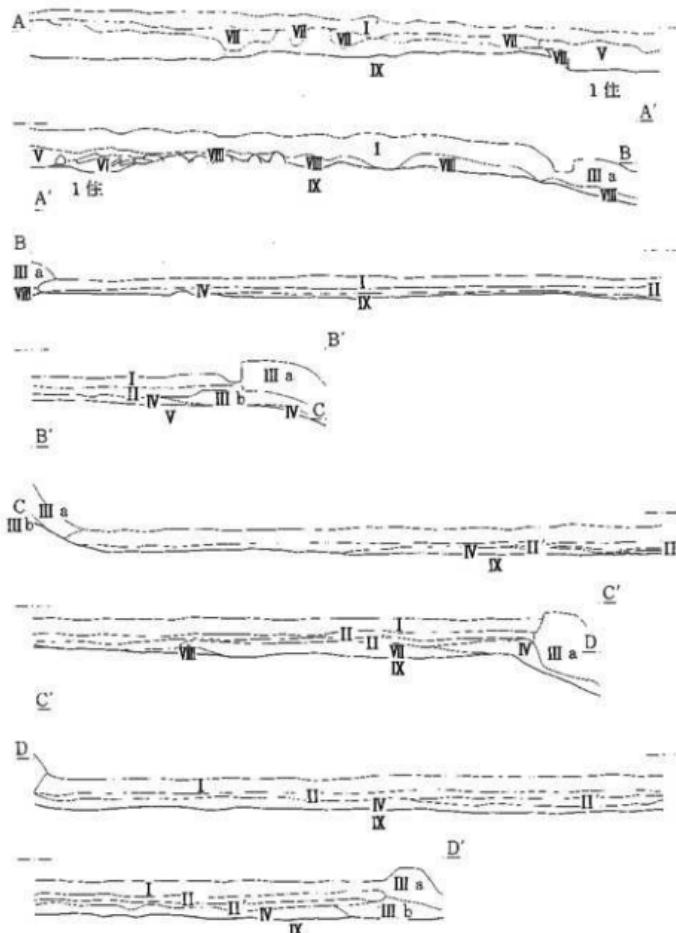
土塙は、円形がほとんどであるが、方形・長方形・不正円形のものもある。円形は、F・G-3・4を中心に分布している。直径1.2m前後のものと直径1.5m前後のものがある。次に長方形は、E-5及びG-4・5に数基見られ、辺2.0×1.2～1.5mである。方形は、G-5・6に3基見られ、辺1.0～1.2m程度となっている。

これらの土塙のなかで円形のものは、点在するものや3～4基が一列に並ぶものがある。また、重複関係も多く、住居跡を切っているものも多い。出土遺物は極めて少なく、覆土中から平安時代ないしは中世の遺物が出土している。これらのことから、土塙の年代は平安時代の集

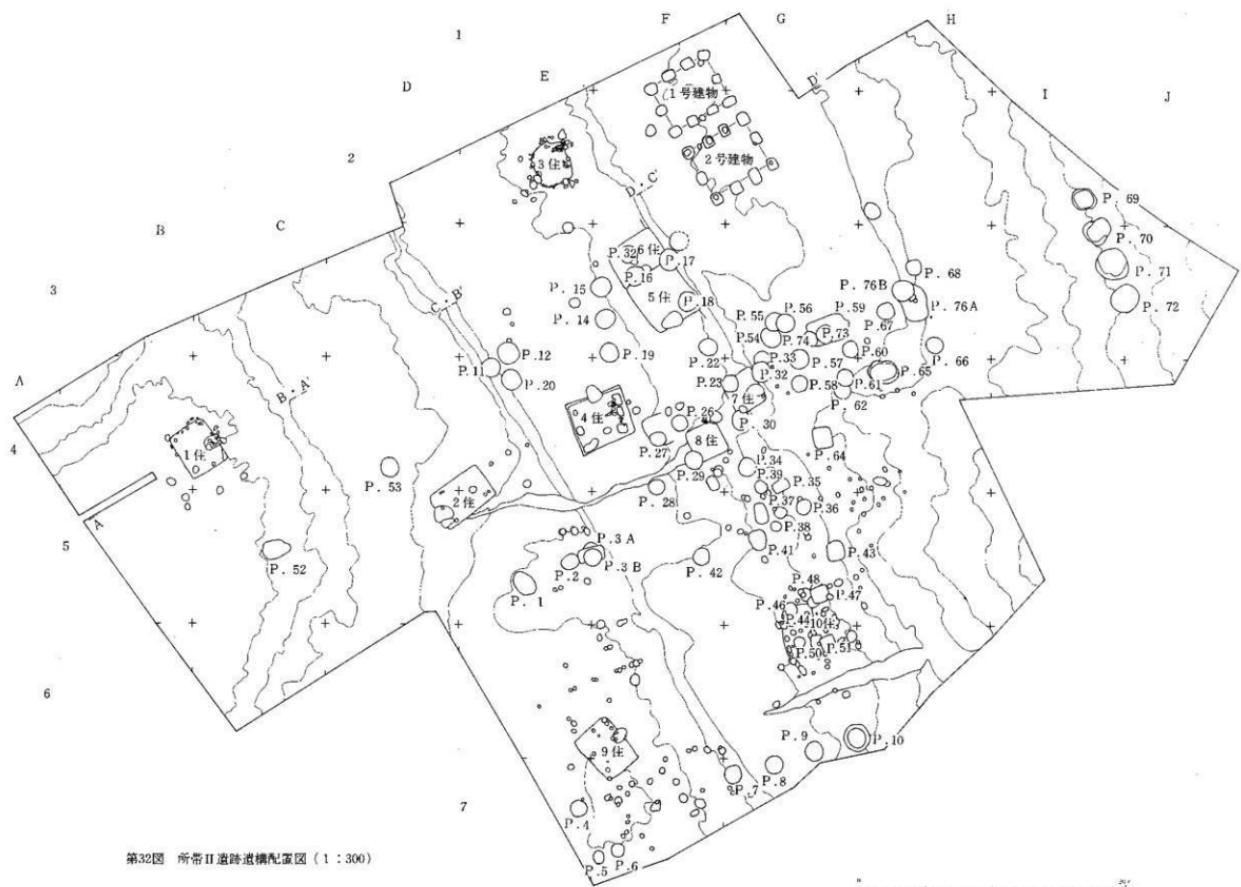
落跡に伴うものと中世の遺構とに分けられるものと考える。

遺物は、住居跡を中心に出土している。その主なものは、土師器の壺・皿・甕、須恵器の壺・甕、鐵鏃・刀子・石製模造品等である。量的に最も多い土師器の壺には、内面に暗文を施したものや内面を黒色処理したものが目立つ。

なお、最も小形の第7号住居跡が、掘り込み深かったためか、最も遺物量が多く、墨書き器も出土している。また、最も大形の第4号住居跡は、遺物のほとんどが須恵器であった。



第31図 所帯II遺跡土層図 (1:80)



第32図 所帯II遺跡遺構配図 (1:300)

本遺跡は、西から東にむかって緩やかに傾斜した段丘面上に立地しているため、基本層序は、水田造成時における土手の部分を除けば、極めて簡単な構成となっている。

第Ⅰ層：水田耕作土 層厚は20~25cmとなっている。

第Ⅰ'層：畑耕作土 層厚は15~20cmである。

第Ⅱ層：床土 固くしまった層で、層厚5~10cmである。

第Ⅱ'層：床土 第Ⅱ層下面の一部に見られ、酸化鉄を含む固くしまった赤褐色砂質土で、水田床土の一部である。層厚は5cm程度である。

第Ⅲ層：水田造成時盛土 いずれも水田の土手部分の盛土で、上部の盛土(Ⅲa)は、耕作土との境目がはっきりしないほど類似している。下部の盛土(Ⅲb)は、茶褐色砂質土で固くしまっている。

第Ⅳ層：旧表土 暗褐色砂質土の遺物包含層である。層厚は最も大きい部分で20cmとなっているので、これより層の薄い部分では、大なり小なり水田造成時に削土を受けた部分と考えられる。なお、西側の畑部分等の洪水堆積層のある部分には、全く見られない。

第Ⅴ層：第1号住居跡覆土 木炭を含む暗褐色砂質土

第Ⅵ層：第1号住居跡カマド 焼土・粘土

第Ⅶ層 洪水堆積層 ロームを含む茶褐色砂質土である。この層のある部分には、Ⅲ表土は見られない。

第Ⅷ層：地山漸移層 黒褐色砂質土である。

第Ⅸ層 低位段丘面の地山 セクションラインより北側では、礫が露出した状況で、それより南側では、白色砂屑の部分と固くしまった黒褐色砂質層の部分とがあり、遺構の検出はこの面で行った。

第2節 遺構と遺物

第1号住居跡（第33~35図・図版12・18）

位置 B・C-4にかけて位置する。ほぼ平坦地であるが、地盤から礫が露出している。

覆土 住居跡は多量の礫を含む地山面を掘り込んで形成されている。覆土は第2層の木炭を含む暗褐色砂質土である。

形状 東西3.2m×南北3.8mの長方形で、各辺に歪みはない。

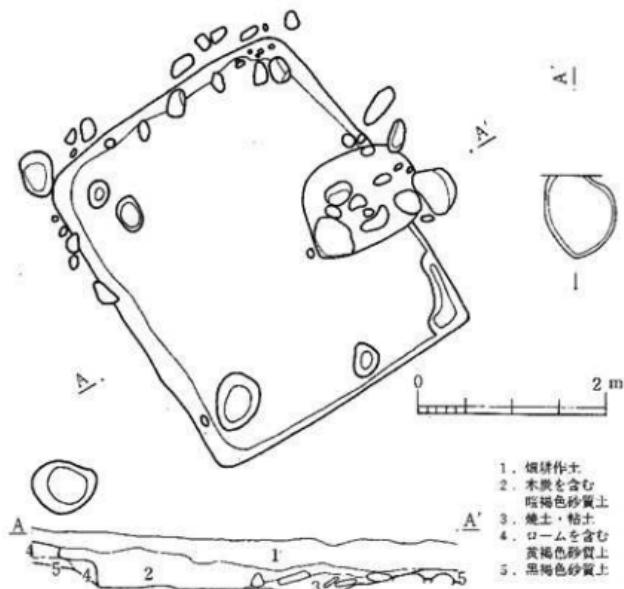
壁高 床面までの壁高は、西壁が30cm、東壁が20cmである。壁の立ち上がりは、礫を掘り上げて構築しているため一定しない。

周溝 検出されなかった。

床面 矿が露出し凹凸は著しい。

柱穴 西壁側の2隅でピットが検出されているが、柱穴とは断定できない。

カマド 東壁中央を切り込んで構築されている。礫と粘土を積み上げ成形したものと考えられる。床面よりの掘り下げは、最大10cmである。カマドは上部が崩れ、内部に焼土・粘土が厚く



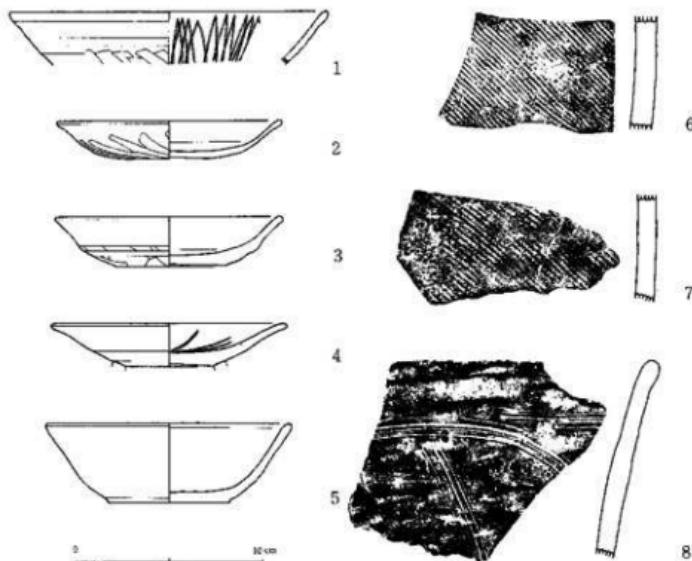
第33図 第1号住居跡・カマド完掘図 (1:60)

選され、焼成も良好で、内面は黒色、外面赤茶褐色を呈する。 34-2. 床面直上出土。皿。口径11.8cm、器高2.0cmを測る。内面はロクロ撫でを行う。口縁端部に煤が付着している。外面はロクロ撫で後、体部下半から底部にかけてヘラ削りを行い、体部と底部の境は不明瞭である。口縁はやや外反し、弱い玉縁状を呈する。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。なお、煤の付着から燈明皿に使用されたものと考える。 34-3. 床面直上出土。皿。口径11.9cm、器高2.7cm、底径5.8cmを測る。内面はロクロ撫でを行う。外面はロクロ撫で後、体部下半はヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、全面ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。 34-4. カマド内出土。有台皿。高台は欠く。口径12.3cm、現高2.2cm、高台内径4.6cmを測る。内面はロクロ撫で、まばらな放射状暗文を施した後、黒色処理を行う。外面はロクロ撫で、底部は回転糸切りを行う。高台は体部下端に貼り付ける。胎土は精選され、焼成も良好である。色調はカマド内にあったため煤が付着している。 34-5. 床面直上出土。環。口径13.0cm、器高4.2cm、底径6.4cmを測る。内面はロクロ撫で後、よく磨かれている。外面ロクロ撫で、底部回転糸切り無調整である。胎土は大粒の粒子を含み、焼成は良好で、色調は内面の一部が黒色、外向淡黄褐色を呈する。 34-6. 床面直上出土。須恵器甕。内面ロクロ撫で、外面平行叩き目である。 34-7. 床面直上出土。須恵器甕。内面一部ハケ調整、外面平行条線である。

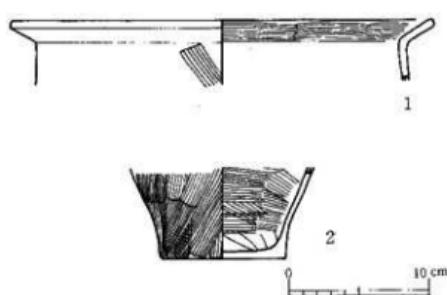
34-8. 床面直上出土。大鉢と見られる。内面ロクロ撫で、外面指頭調整を行った後、柄目

堆積している。
遺物の出土状況
遺物はいずれも床面直上ないしはカマドより出土しているが、量的には少ない。また、遺物の内容は、环・皿・甕及び須恵器甕等がある。

第34図-1. 床面直上出土。环。内面はロクロ撫で後、花弁状暗文を施す。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。口縁は玉縁状に近い。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。 34-2. 床面直上出土。皿。口径11.8cm、器高2.0cmを測る。内面はロクロ撫でを行う。口縁端部に煤が付着している。外面はロクロ撫で後、体部下半から底部にかけてヘラ削りを行い、体部と底部の境は不明瞭である。口縁はやや外反し、弱い玉縁状を呈する。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。なお、煤の付着から燈明皿に使用されたものと考える。 34-3. 床面直上出土。皿。口径11.9cm、器高2.7cm、底径5.8cmを測る。内面はロクロ撫で、まばらな放射状暗文を施した後、黒色処理を行う。外面はロクロ撫で、底部は回転糸切りを行う。高台は体部下端に貼り付ける。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。 34-4. カマド内出土。有台皿。高台は欠く。口径12.3cm、現高2.2cm、高台内径4.6cmを測る。内面はロクロ撫で、まばらな放射状暗文を施した後、黒色処理を行う。外面はロクロ撫で、底部は回転糸切り無調整である。胎土は大粒の粒子を含み、焼成は良好で、色調は内面の一部が黒色、外向淡黄褐色を呈する。 34-5. 床面直上出土。須恵器甕。内面ロクロ撫で、外面平行叩き目である。 34-6. 床面直上出土。須恵器甕。内面一部ハケ調整、外面平行条線である。



第34図 第1号住居跡出土土器 (1:3)



第35図 第1号住居跡出土土器 (1:4)

条線を引いている。胎土は石英・金雲母を含み、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。

第35図-1. 床面直上出上。甕。口縁は内外面ともロクロ施である。胴部は外面縦方向のハケ目、内面ロクロ施でを行う。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。35-2. 床面直上出土。甕。底部は木葉痕である。胴部は、内面が横方向のハケ目、底部内面が指頭痕、外表面は縦方向のハケ目調整である。胎土は金雲母を含み、焼成は良好、黒褐色を呈する。

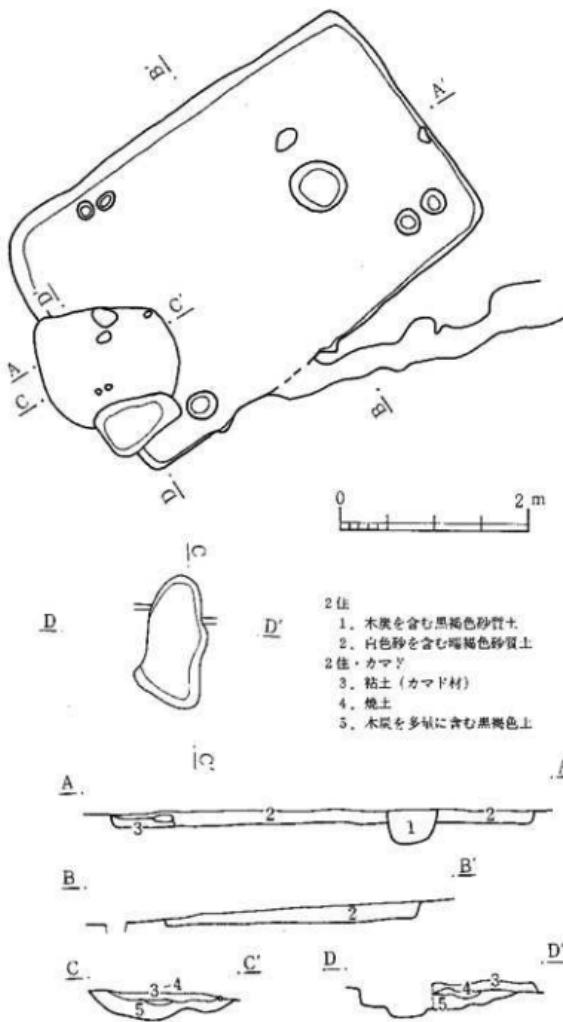
小 結 本住居跡は中形である。年代は、皿の特徴から見て、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期に位置づけられる。

第2号住居跡 (第36～39図・図版13・19)

位 置 D・E-4・5にかけて位置し、北西から南東に緩やかに傾斜している。

覆 土 住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。カマドの一部を含む南北側は、洪水による覆土が白色砂の浅い溝に切られている。また、中央東寄には後世のピットがある。覆土は、第2層の白色砂を含む暗褐色砂質土である。

形 状 東西4.55m、南北が西壁3.0m・東壁2.8mの台形である。各辺に歪みはほとんど見られない。



第36図 第2号住居跡・カマド完掘図 (1:60)

壁 高 床面までの壁高は、南北側が8cmと浅いほかは、平均15cmである。立ち上がりは垂直に近い。

周 溝 検出されなかった。

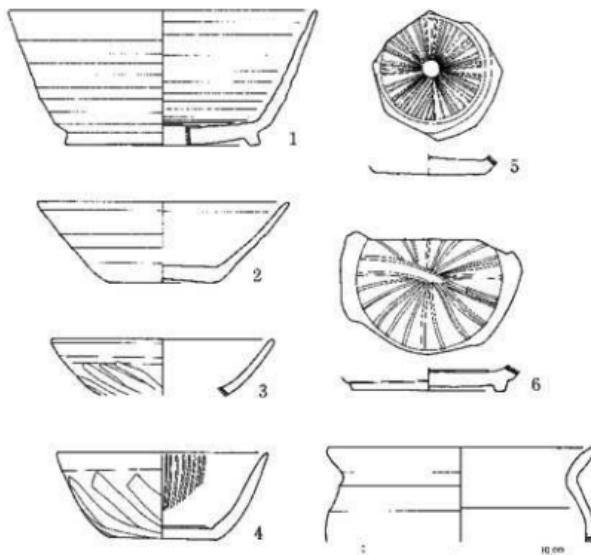
床 面 北西側に地盤の小礫が露出しているが、ほぼ平坦である。

柱 穴 4本柱と考えられ、北東隅を除く3か所で確認された。直径は20~30cm、深さ30~40cmを測る。

カマド 西壁に、若干の礫を入れるがほぼ粘土により構築されている。カマドは上部がカマド材の粘土で、内部に薄く焼土が見られる。床面からの掘り下げは最大30cmである。

遺物の出土状況 遺物量は比較的多く、主にカマド周辺から、他は床面直上より出土している。

A' 第37図-1、床面直上出土。須恵器有台坏。口径推定16.3cm、器高7.1cm、高台径10.3cmを測る。内外面ともロクロ撲でを行う。底部は回転糸切り後、外周部にヘラ削りを行い、高台を貼り付ける。焼成は良好・堅緻で、黒褐色を呈する。37-2、床面直上出



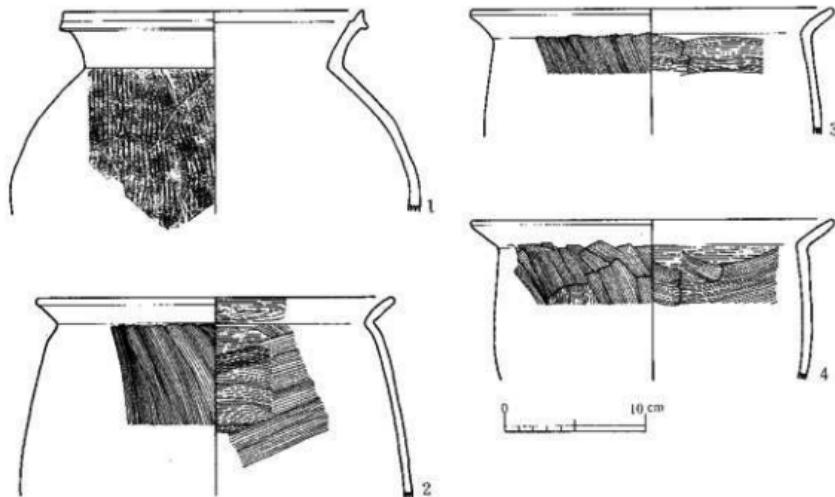
第37図 第2号住居跡出土土器 (1 : 3)

る。内外面とも磨滅が著しい。内面はロクロ撫で後、放射状暗文を施す。暗文は見込みに及んでいる。外面はロクロ撫で後、体部上半までヘラ削りを行う。底部は全面ヘラ削りである。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。37-5. 床面直上出土。环底部。底径5.9cmを測る。見込みはロクロ撫で後、放射状暗文を施す。底部は全面ヘラ削りである。胎土は精選され、焼成も良好で、暗赤褐色を呈する。37-6. 床面直上出土。有台环底部。高台径は8.2cmを測る。見込みはロクロ撫で後、放射状暗文を施す。底部は全面ヘラ削りを行った後、高台を貼り付ける。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。37-7. 床面直上出土。小形甕。口径推定14.0cm。口縁・外外面ともロクロ撫で調整。胎土は大粒の石英等の粒子を多量に含み脆い。焼成は良好で、黒褐色を呈する。

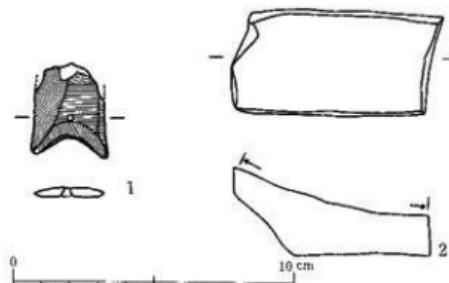
第38図-1. 床面直上出土。須恵器甕。口縁部は外外面ともロクロ撫で、胴部は内面ロクロ撫で、外面は平行叩き目調整を行う。焼成は良好・堅緻で、暗赤褐色を呈する。38-2. カマド部出土。甕。口縁部は外外面ともロクロ撫で、胴部は内面が横方向のハケ目、外面が縱方向のハケ目調整を行う。胎土は金雲母を含み、焼成は良好、茶褐色を呈する。外面に煤が付着している。38-3. カマド部出土。甕。口縁部は外外面ともロクロ撫で、胴部は内面が横方向、外面が縱方向のハケ目調整を行う。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。38-4. カマド部出土。甕。口縁部は外外面ともロクロ撫で、胴部は内面が横方向、外面が縱方向のハケ目調整を行う。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。

土。須恵器甕。器高4.3cm、底径5.7cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りを行う。焼成は良好ではなく、灰白色を呈する。

37-3. 床面直上出土。甕。口径は推定11.6cmである。内外面ともロクロ撫で、外外面体部上部までヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成良好で、赤茶褐色を呈する。37-4. 床面直上出土。甕。口径11.1cm、器高4.5cm、底径5.7cmを測る。



第38図 第2号住居跡出土土器（1：4）



第39図 第2号住居跡出土石製品（1：2）

第39図-1. 床面直上出土。鐵形石製品。無茎縫で先端部を欠く。研磨痕は、表面が両側及び抉り部それぞれに異なる方向を示す。裏面はほぼ一定方向となっている。両側は鋭利な棱を作り出している。抉り部は研磨によりほぼ平坦な面としている。ほぼ中心線上にある孔は、裏面より穿がたれている。石材は粘板岩である。 39-2. 床面直上出土。砾石。およそ半分が欠損している。片面のみよく使用され、中央部が丸く磨りへっている。泥岩製である。

小 織 本住居跡は、西壁にカマドが構築されている珍しい例である。年代は、暗文付坏の特徴から見て、9世紀第3四半期に位置づけられる。

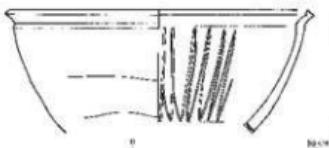
第3号住居跡（第40・41図・図版13・18）

位 置 E-2に位置する。西から東へ緩やかに傾斜しているが、地盤は疊層である。

覆 土 住居跡は疊層を掘り込んで形成されている。覆土は第1層の暗褐色砂質土である。



第40図 第3号住居跡 (1:60)



第41図 第3号住居跡出土土器
(1:3)

遺物の出土状況 本住居跡に伴う遺物は、5点と極めて少なく、固化できるものは1点である。

1. 床面直上出土。壺。口径推定16.2cmを測る。口縁は、外反した後、端部を直立させ、稜をつくる。内面はロクロ撫で後、花弁状の暗文を施す。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。「胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。」

小結 本住居跡にカマドは見られない。年代は、壺の特徴から9世紀第4四半期に位置するものと考えられる。

第4号住居跡 (第42~44図・図版13・19・20)

位置 E・F-4に位置し、西から東へ緩やかに傾斜している部分にあたるが、水田造成時の削土ではほぼ平坦となっている。遺存状態は良好である。

覆土 住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。覆土は、特異な堆積状況を見せており、上層は、木炭・白色砂・ロームを含む暗褐色砂質土であるが、西側から中心部をへて東側壁集中部分にかけての下層は、木炭を多量に含む黒褐色土となっている。なお、壁際は白色砂を含む暗褐色砂質土となっている。

形状 南北方向は、西壁で4.0m、東壁で3.8mを測り、東西は4.5mである。わずかに台形状を呈している。

壁高 床面までの壁高は、20~25cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

周溝 カマド部を含む各壁下で確認された。東壁及び南壁は極めて浅い。周溝の幅は10~20

形状 南北2.8m×東西2.5mの隅丸方形である。

壁高 床面までの壁高は、15~18cmである。壁の立ち上がりは、礎を掘り上げて構築しているため一定しない。

周溝 検出されなかった。

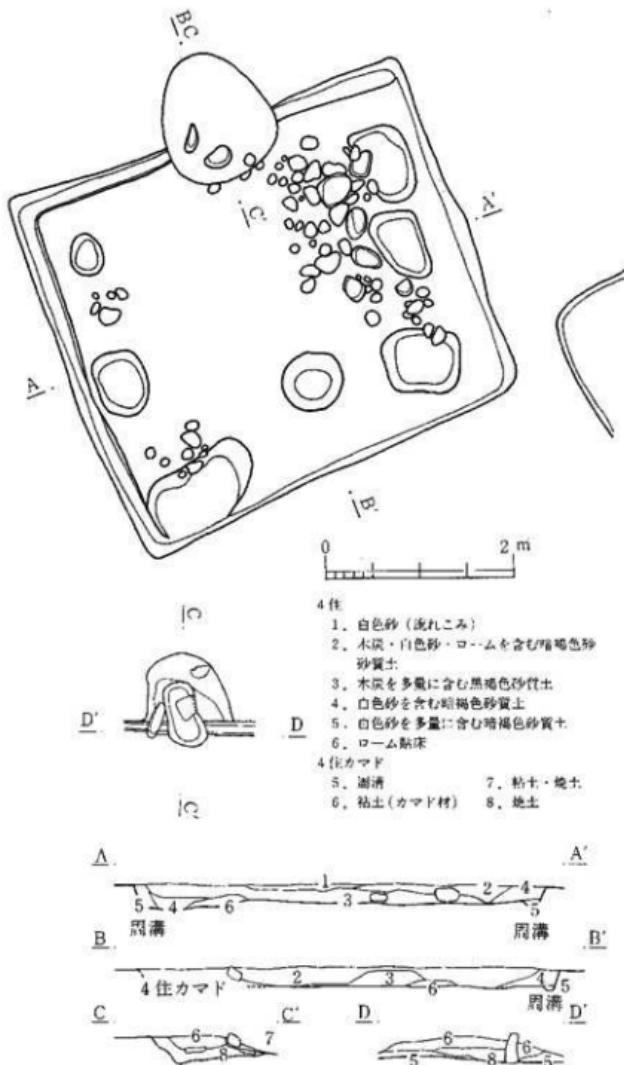
床面 磂が露出して凹凸が見られる。著しい凹地の部分は、白色砂を多量に含む暗褐色砂質土を埋め、整地している。

柱穴 検出されなかった

カマド 焼土は検出されなかつた。ただし、北壁中央に壁を切り込んだ部分がある。

cm、深さは5~15cmである。

床面 ほぼ平坦であるが、部分的にロームの貼床を行っている。なお、礫集中部分には、深さ20cm程度の落ち込みが検出されている。



第42図 第4号住居跡・カマド完描図 (1:60)

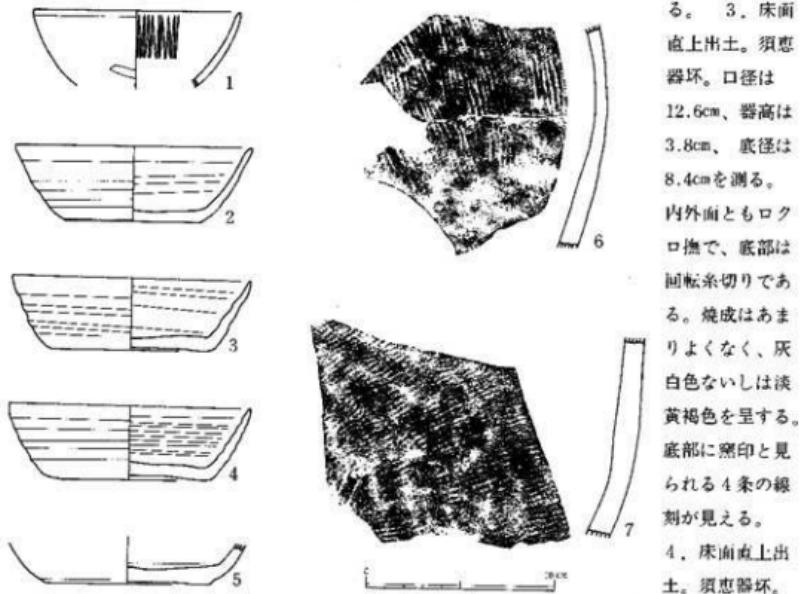
柱穴 4本柱と見られるが、西壁側の2隅が検出されたのみである。規模は、直径30~50cm、深さ17~30cmとばらつきが大きい。

カマド 北壁中央を切り込んで構築されている。礫と粘土により組み上げられており、西側の袖石がよく残っている。内部には焼上が厚く堆積している。

遺物の出土状況 遺物は床面上出土で、そのほとんどが須恵器である。また、床面東側に河原石が多量に分布している。

1. 床面上出土。环。内面はロクロ撫で後、放射状の暗文を施す。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤茶褐色を呈する。

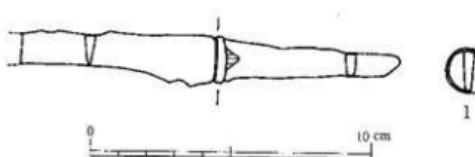
2. 床面上出土。須恵器环。口径12.5cm、器高4.0cm、底径7.2cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。焼成はあまり良好ではなく、灰白色ないしは黄褐色の部分も見られ



第43図 第4号住居跡出土土器 (1 : 3)

8.2cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。焼成はあまりよくなく、ほとんど淡黄褐色を呈する。底部に窯印と見られる4条の線刻がある。 5. 床面直上出土。須恵器坏。底径8.6cmを測る。内外面ともロクロ撫で、底部は回転糸切りである。焼成はあまりよくなく、灰白色を呈す。底部には窯印と見られる4条の線刻がある。 6. 床面直上出土。須恵器壞。内面は指頭痕、外面は平行条線の叩き目調整を行っている。 7. 床面直上出土。須恵器壞。内面はロクロ撫で、外面は平行叩き目調整を行う。

第44図-1. 床面直上出土。刀子。身の一部が欠損して、現存する長さは13.5cmである。



この刀子は、平造りの両闘造りで、把縁金具の一部が残っている。茎には柄の木質部が一部残っている。目釘は木質部に一か所確認できる。

第44図 第4号住居跡出土鉄製品 (1 : 2)

44-2. 床面直上出土。鉄鎌。現長 8.2cmで革の一部が欠損している。この鉄鎌は逆刺の顕著な腸抉柳葉式で、闇鎌をもつ。断面はレンズ状を呈する。

小 結 本住居跡は、他の住居跡とは異なった特徴をもっている。遺構では、北壁にカマドを構築していることや床面に礫が多量に見られる点があげられる。また遺物では、須恵器がほとんどで、主流となる土師器が少ない点である。これらの点から、他地域から入ってきた人の住居の可能性がある。

住居の年代は、暗文付坏や須恵器坏の特徴から、9世紀後半に位置づけられよう。

第5号住居跡（第45・46図・図版14・18）

位 置 F-3に位置し、水田造成の段切りの部分にあたるため、東壁側の一部が切られている。そのため、遺存状態は良好ではない。

覆 土 本住居跡は、第6号住居跡を切っているものの、土塙（P-16・17・18）には、床面または壁を切られている。覆土は第5層の暗褐色砂質土である。

形 状 南北 4.3m × 東西推定 4.3m の隅丸の方形と見られる。

壁 高 床面までの壁高は、15~20cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

周 溝 検出されなかった。

床 面 西から東にむかって緩やかに傾斜している。一部に貼味が見られるが、整地等は行っていない。

柱 穴 検出されていない。

カマド 南壁のやや西側に構築されている。床面からの掘り下げは、最大5cmである。カマド上部のカマド材は全く見られず、内部の焼土が露出している。

なお、カマド前面の床面上に、焼土・木炭を含む暗褐色砂質土が見える。

遺物の出土状況 本住居跡に伴う遺物は極めて少なく、固化できるものは1点である。

第46図-1. 床面直上出土。須恵器坏底部。底部は回転糸切り後、外周ヘラ削りを行い、高台を貼り付けてあったが、剥落している。色調は淡茶褐色を呈する。

小 結 本住居跡は、水田造成によりかなり削平を受けているために、遺物量が極めて少なく、年代決定に至らなかった。

第6号住居跡（第45・46図・図版14・18）

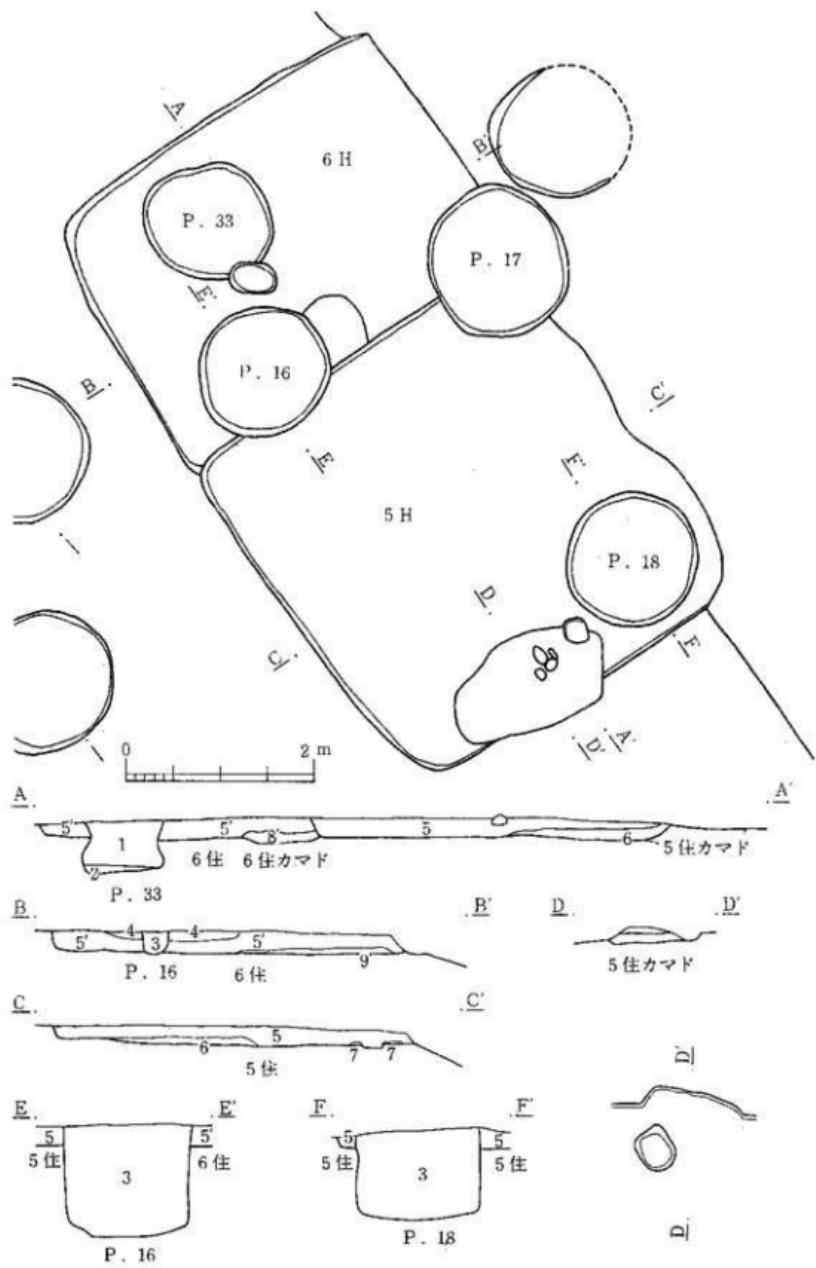
位 置 F-3に位置し、水田造成の段切部にあたるため、東壁側の一部が切られている。そのため、遺存状態は良好ではない。

覆 土 本住居跡は、第5号住居跡に南壁及びカマドの一部を切られているほか、土塙（P-16・17・33）に切られている。覆土は第5層の暗褐色砂質土である。

形 状 南北 3.2m × 東西推定 4.2m の隅丸の長方形と見られる。

壁 高 床面までの壁高は、10~20cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

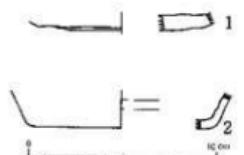
周 溝 検出されなかった。



第45図 第5・6号住居跡・5号住カマド発掘図及びP-16・17・18・33 (1:60)

土 層 説 明

5住・5住カマド	6住・6住カマド	P-33
5. 暗褐色砂質土	4. 黒褐色土	1. 暗褐色土
6. 土壌・木炭を含む暗褐色砂質土	5. 暗褐色砂質土	2. 黑褐色土
7. 粘床	7. 粘床	P-16・18
8. 焼土	8. 焼土	3. 白色砂を多量に含む暗褐色砂質土
9. 木炭を含む黑褐色土		



第46図 第5・6住居跡
出土土器 (1:3)
1-5号住、2-6号住

第46図-2. 床面直上出土。須恵器坏。底部に近い部分の小片で、内外面ともロクロ撫でを行ふ。

小 結 5号住より古いことは、重複関係によってわかるが、その年代については、遺物があまりにも少量のため判断できない。

なお、暗文付环の小片が、6号住には見られるが、5号住には全くない。

第7号住居跡 (第47~49図・図版14・21)

位 置 G-4に位置する。丁度、水田造成時の段切り部にかかっている。

覆 土 本住居跡は、上部を水田造成により削土されているほか、土塙 (P-24・30) に切られていた。なお、土塙 (P-31) とは接している。覆土は第3層の木炭を多量に含む黒褐色砂質土で、水田段切上段の西側で30~50cmと厚く、東側の下段部では10~15cmとなっている。

形 状 東西 2.6m、南北方向は、東壁で 2.6m、西壁で 2.8m を測る。やや台形状の方形である。

壁 高 床面までの壁高は、西壁で30~50cm、東壁で10~15cmとなっている。壁の立ち上がりは、北壁はやや傾斜しているが、他3辺は垂直に近い。

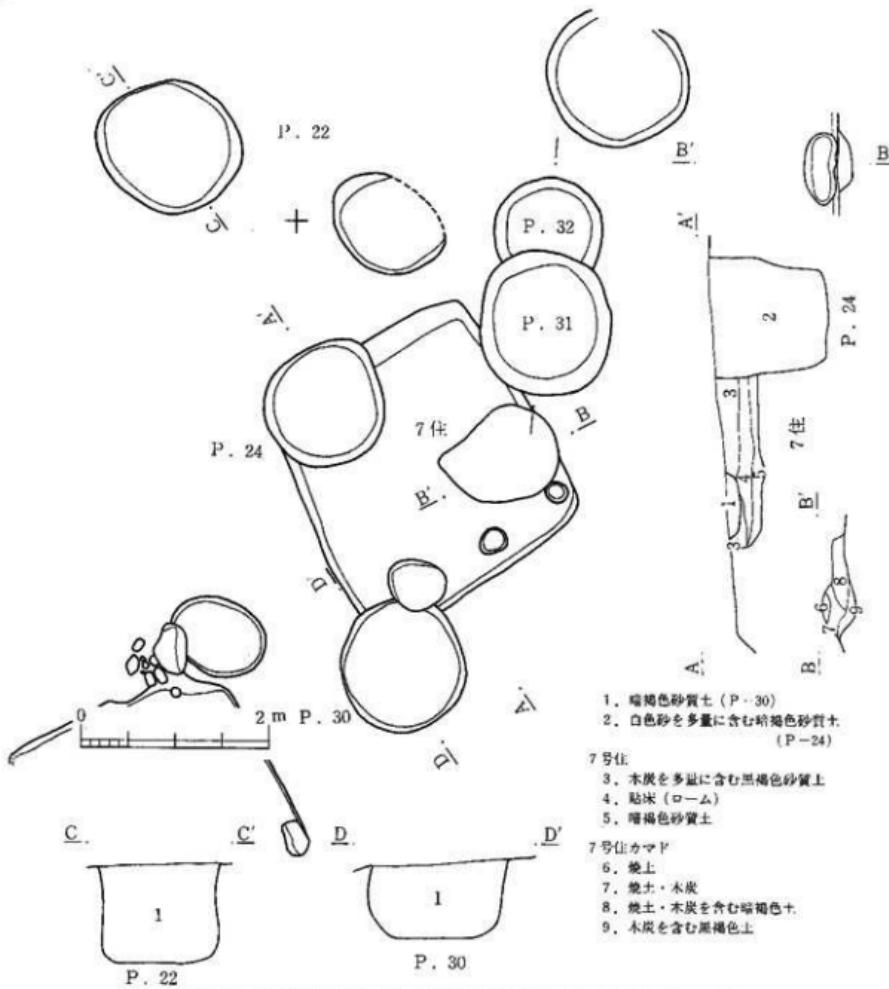
周 溝 検出されなかった。

床 面 地山を第5層下面まで掘り下げた後、第5層の暗褐色砂質土により埋土・整地し、さらに厚さ10~15cmの第4層のロームによる貼床を行い、床面としている。

柱 穴 南東隅の1本のみ検出され、直径20cm、深さ25cmを測る。

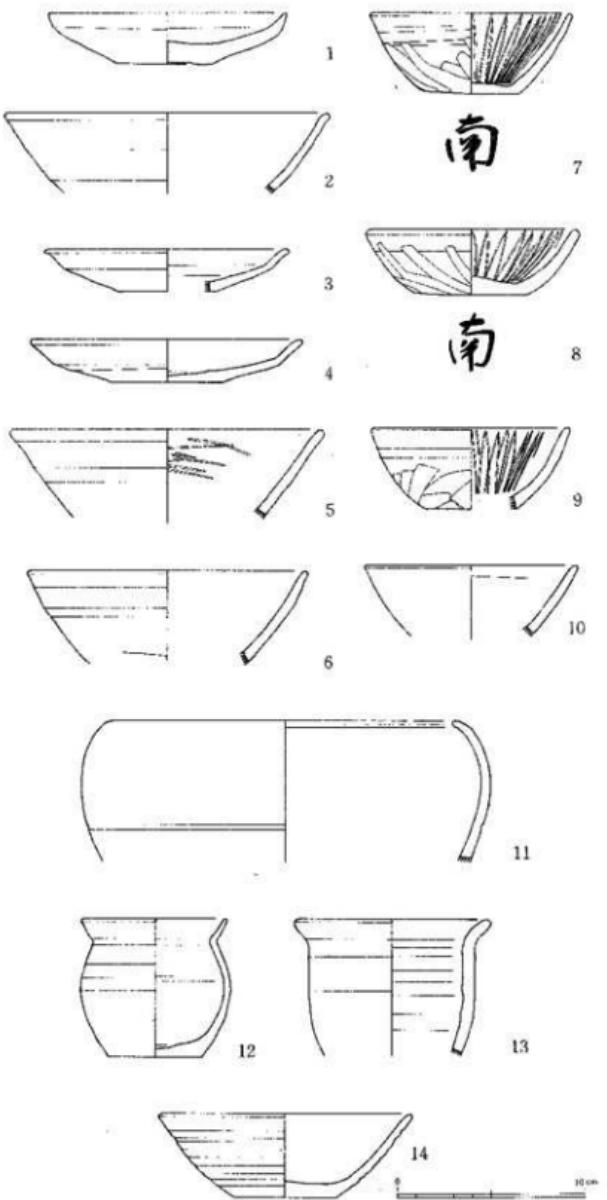
カマド 東壁南寄に構築されている。カマド上部のカマド材は全く見られず、カマド内部の焼土・木炭が厚く堆積している。

遺物の出土状況 遺物はいずれも床面直上より出土している。そのため、水田造成における削土の影響を受けていない。遺物量は、小形の住居跡にもかかわらず、比較的豊富である。



第47図 第7号住居跡・カマド完掘図及びP-22・24・30 (1:60)

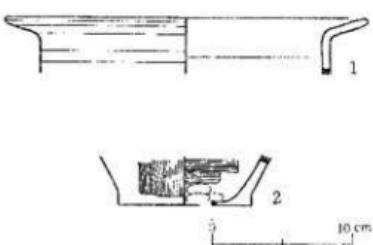
第48図-1. 床面直上出土。皿。口径12.6cm、器高 2.7cm、底径 5.0cmを測る。内面ロクロ撫で、黒色処理されている。外面はロクロ撫で無調整、底部は回転糸切り無調整である。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。 48-2. 床面直上出土。壺。内面ロクロ撫で、黒色処理されている。外面はロクロ撫でを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、淡黄褐色を呈する。 48-3. 床面直上出土。皿。器高 2.2cm。内面はロクロ撫で、外面は体部ロクロ撫で後、下半にヘラ削りを行う。底部はヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。 48-4. 床面直上出土。皿。口径14.3cm、器高 2.3cm、底径 6.0cmを測る。内面はロクロ撫で、外面は体部ロクロ撫で後、下半にヘラ削りを行う。底部は全面ヘラ削りである。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。 48-5. 床面直上出土。壺。内面



第48図 第7号住居跡出土土器 (1 : 3)

はロクロ撫で後、丁寧なヘラ磨きを行い、横方向の暗文を施す。外表面はロクロ撫で無調整である。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。48-6、床面直上出土。环。内外面ともロクロ撫で、外表面部下半にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤茶褐色を呈する。48-7、床面直上出土。环。口径10.4cm、器高4.3cm、底径5.1cmを測る。内面ロクロ撫で後、花弁状暗文を施す。暗文は見込みに及ばない。外表面ロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、全面ヘラ削りを行う。底部には墨書き「南」がある。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。48-8、床面直上出土。环。口径推定10.9cm、器高3.5cm、底径6.0cmを測る。極めて厚手の环である。内面はロクロ撫で後、花弁状暗文を施す。暗文は見込みに及ばない。外表面はロク

ロ拂で後、体部下間にヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後、外周ヘラ削りを行う。底部に墨書「南」がある。胎土は精選され、焼成も良好で、赤茶褐色を呈する。48-9、床面直上出土。壺。器高4.3cm、底径4.9cmを測る。内面はロクロ拂で後、花弁状暗文を施す。外面はロクロ拂で後、体部下間にヘラ削りを行う。底部は外周にヘラ削り痕が見える。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。48-10、床面直上出土。壺。内外面ともロクロ拂でを行う。内面には煤が多量に付着し、證明皿に使用されたものである。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。



第49図 第7号住居跡出土土器（1：4）

上は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。外面に煤が付着している。48-14、床面直上出土。須恵器壺。口径推定13.2cm、器高4.5cm、底径5.5cmを測る。内外面ともロクロ拂で、底部は回転糸切り無調整である。

第49図-1、床面直上出土。壺。内外面ともロクロ拂で調査である。胎土は精選され、焼成も良好で、黄褐色を呈する。49-2、床面直上出土。壺。内面は横方向のハケ目調整、底部内面は指頭依調整を行う。外面は縱方向のハケ目調整を行う。底部には木葉痕がある。胎土はやや大粒の石英を含み、焼成は良好で、内面赤茶褐色、外面黒褐色を呈する。

小結 小形の住居跡にしては遺物量が豊富である。その年代は、暗文付壺や須恵器壺の特徴から見て、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に位置づけられる。

第8号住居跡（第50・51図・図版14・18）

位置 F-4に位置する。

覆土 住居跡は地山を掘り込んで形成されているが、北側及び南側の一部を除き、第2号住居跡から続く、洪水による溝跡に切られている。また、南西隅は土塀（P-29）に切られている。覆土は第3層の木炭を含む暗褐色砂質土である。

形状 南北2.6m×東西2.6m程度の方形である。

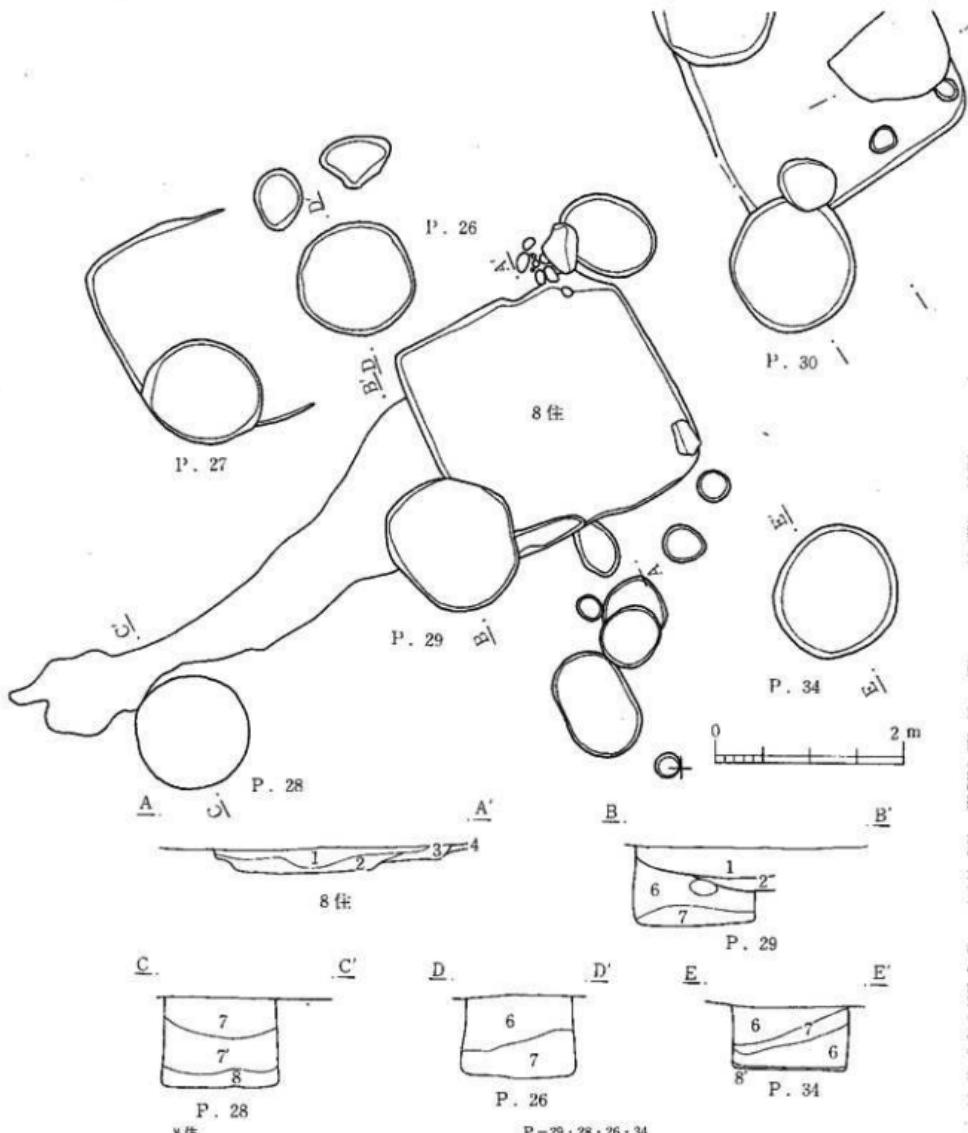
壁高 北壁で、床面より15cmである。立ち上がりは、やや傾斜している。

周溝 検出されなかった。

床面 ほぼ平坦である。

第48図-11、床面直上出土。鉢。口径は推定18.0cm。内面はロクロ拂で後、外周はロクロ拂で、ヘラ磨き後、黒色処理されている。外面全体に一条の沈線が巡る。胎土は精選され、焼成も良好である。48-12、床面直上出土。小形壺。口径推定7.6cm、器高7.3cm、底径5.0cmを測る。内外面ともロクロ拂でを行う。底部は回転糸切りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。48-13、床面直上出土。小形壺。内外面ともロクロ拂である。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。外面に煤が付着している。

48-14、床面直上出土。須恵器壺。口径推定13.2cm、器高4.5cm、底径5.5cmを測る。内外面ともロクロ拂で、底部は回転糸切り無調整である。



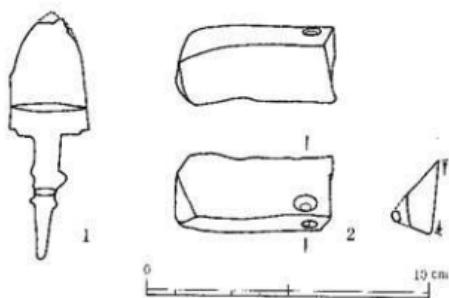
8 住

1. 白色砂（洪水堆積）
2. 白色砂を含む黒褐色土（粘性・洪水堆積）
3. 木炭を含む暗褐色砂質土
4. 暗褐色砂質土

P. 29・28・26・34

1. 白色砂（洪水堆積）
2. 白色砂を含む黒褐色土（粘性・洪水堆積）
6. 明褐色砂質土
7. 白色砂を多量に含む暗褐色砂質土
- 7'. 白色砂、ロームを含む暗褐色砂質土
8. 黑褐色土（粘性）

第50図 第8号住居跡・P-29・28・26・34 (1:60)



第51図 第8号住居跡出土遺物 (1:2)

砥石。断面三角形で、その一面がよく使用されている。頂部にある孔は、両側より穿たれてい。石材は泥岩である。

小 結 本住居跡は、土器類が全くないため年代は不明である。

第9号住居跡 (第52~55図・図版15・20)

位 置 E-6 及び F-6・7にかけて位置し、ほぼ平坦な場所である。

覆 土 住居跡は地山面を掘り込んで形成され、覆土は第2層の暗褐色砂質土である。

形 状 東西 3.1~3.2m、南北 4.1m の長方形で、各辺に垂みはほとんど見られない。

壁 高 床面までの壁高は、平均して 15cm である。壁の立ち上がりは、やや傾斜している。

周 溝 検出されなかった。

床 面 中央がやや凹んでおり、ローム・白色砂で貼床を行い、凹みの著しい部分は埋め上・整地後、貼床を行っている。

柱 穴 4 本柱と見られるが、北東隅と南西隅の 2 本が検出された。直径は 30~40cm、深さは 21~27cm である。

カマド 東壁中央を切り込んで、礫と粘土により構築されている。床面下への掘り下げは、最大 15cm である。上部にはカマド材の粘土が覆い、内部は焼土が堆積している。

遺物の出土状況 遺物は、第53図-4、須恵器坏が覆土中のほかは、床面上出土である。

第53図-1、床面上出土。坏。口径 10.5cm、器高 4.3cm、底径 6.5cm を測る。内面はロクロ撫で後、花弁状暗文を施す。暗文は見込みに及んでいる。外面はロクロ撫で後、体部はヘラ磨き調整を行い、さらに体部下端はヘラ削りを行う。底部は全面ヘラ削りである。底部に墨書三文字が見える。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。なお、内面に煤が付着しており、煙明皿として使用されたものである。 53-2、床面上出土。坏。内面はロクロ撫で後、花弁状暗文を施す。外面はロクロ撫で後、ヘラ磨きを行う。胎土は精選され、焼成も良好・堅緻で、赤褐色を呈する。 53-3、床面上出土。坏。内外面ともロクロ撫でを行う。

柱 穴 検出されなかった。

カマド 焼土は検出されなかった。ただし、北壁東寄に礫の集中している部分がある。

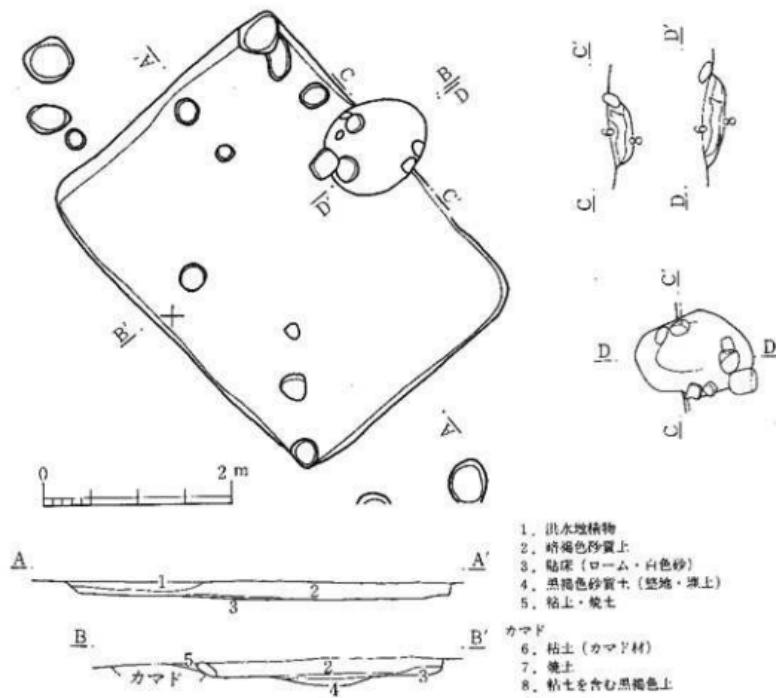
遺物の出土状況 遺物は洪水により、そのほとんどが流されたものと考えられ、鐵錐と砾石等少量である。

1. 床面上出土。鐵錐。先端部を欠くが、ほぼ完形で全長 8.5cm を測る。この鐵錐は抉りのない、柳葉式に近い形態であり、闇鎧被をもつ。断面はレンズ状を呈する。 2. 床面上出土。

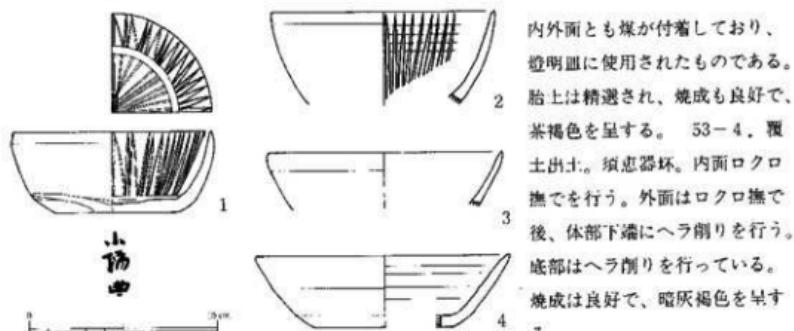
砥石。断面三角形で、その一面がよく使用されている。頂部にある孔は、両側より穿たれてい。

石材は泥岩である。

小 結 本住居跡は、土器類が全くないため年代は不明である。

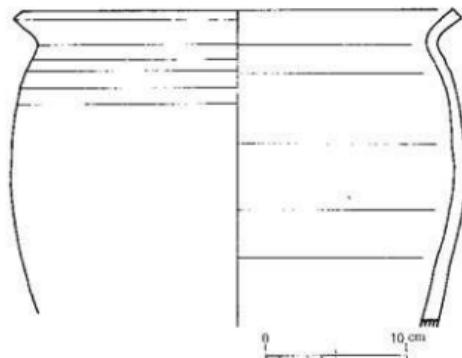


第52図 第9号住居跡・カマド発掘図 (1 : 60)

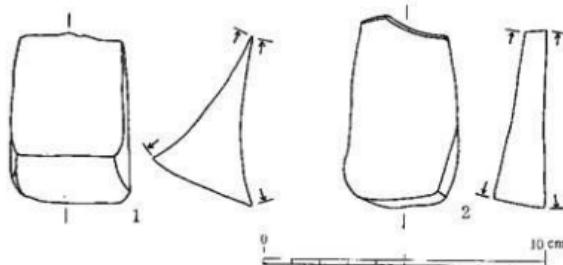


第53図 第9号住居跡出土土器 (1 : 3)

第54図 床面直上出土。甕。
口径推定30.5cm。厚手の甕で、
内外面ともロクロ拂で調整であ



第54図 第9号住居跡出土土器（1：4）



第55図 第9号住居跡出土石製品（1：2）

第10号住居跡（第56・57図・図版15）

位置 G-5・6に位置し、西から東へやや傾斜した場所である。

覆土 住居跡は西側で、わずか地山を掘り込んで形成されている。しかし、中世と見られる上塙（P-44・50・51等）に切られているほか、多数のピットが見られる。そのため、覆土は確認できなかった。

形状 南西角が確認されていることから、方形と見られるが、規模は不明である。

壁高 西壁で床面から5~10cm、南壁で最大6cmの他は、確認されなかった。立ち上がりは垂直に近い。

周溝 検出されなかった。

床面 壁の不明な部分が多く判然としない。

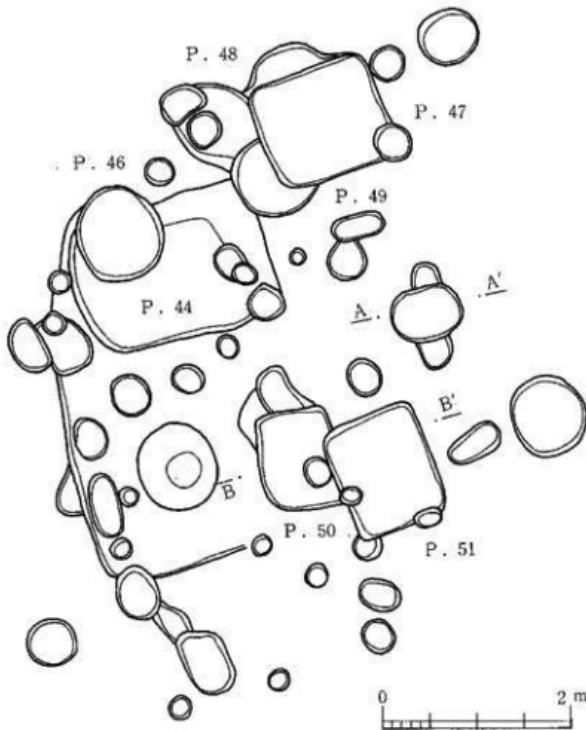
柱穴 多数検出されているピットは、本住居跡に伴うものではなく、その形状から中世の掘

る。胎土は石英等を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。

第55図-1. 床面直上出土。砾石、両面ともよく使用され、薄い部分では、厚さ2mmとなっている。石材は泥岩である。55-2. 床面直上出土。砾石。両面とも使用されている。しかし、彎曲するような使い方はされていない。石材は泥岩である。

小結 本住居跡の年代は、暗文付壺のなかの1点が、その特徴から9世紀第1~第2四半期の所産と見られるが、主体となる遺物は、9世紀

第2~第3四半期に位置づけられるため、本住居跡の年代は、9世紀第2~第3四半期と考えられる。なお、古いタイプの壺は、燈明皿として使用されており、搬入品と考える。



第56図 第10号住居跡・P-44~51 (1:60)

立柱建物跡の柱穴と推定する。しかし、どのピットが組み合わさるか不明である。

なお、これらのピットは、いずれも円形で、直径20~40cm、深さは25~30cmを測る。

カマド 東壁に構築されたものと推定され、西壁から東へ3.6m離れて位置する。地山面から25cm程度掘り下げられている。上部は削平され、掘り込み内に焼土・木炭が堆積している。また、焼土・木炭の一部は、P-51上部にも分布している。

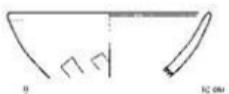
遺物の出土状況 遺物は、西壁直下より环・須恵器等が出土しているが、図化できるものは1点と極めて少量である。

なお、上層からは小片ながら、中世の遺物がかなり見られ、天目茶碗・内耳土器・土師

質土器・古錢（永樂通宝）が上げられる。

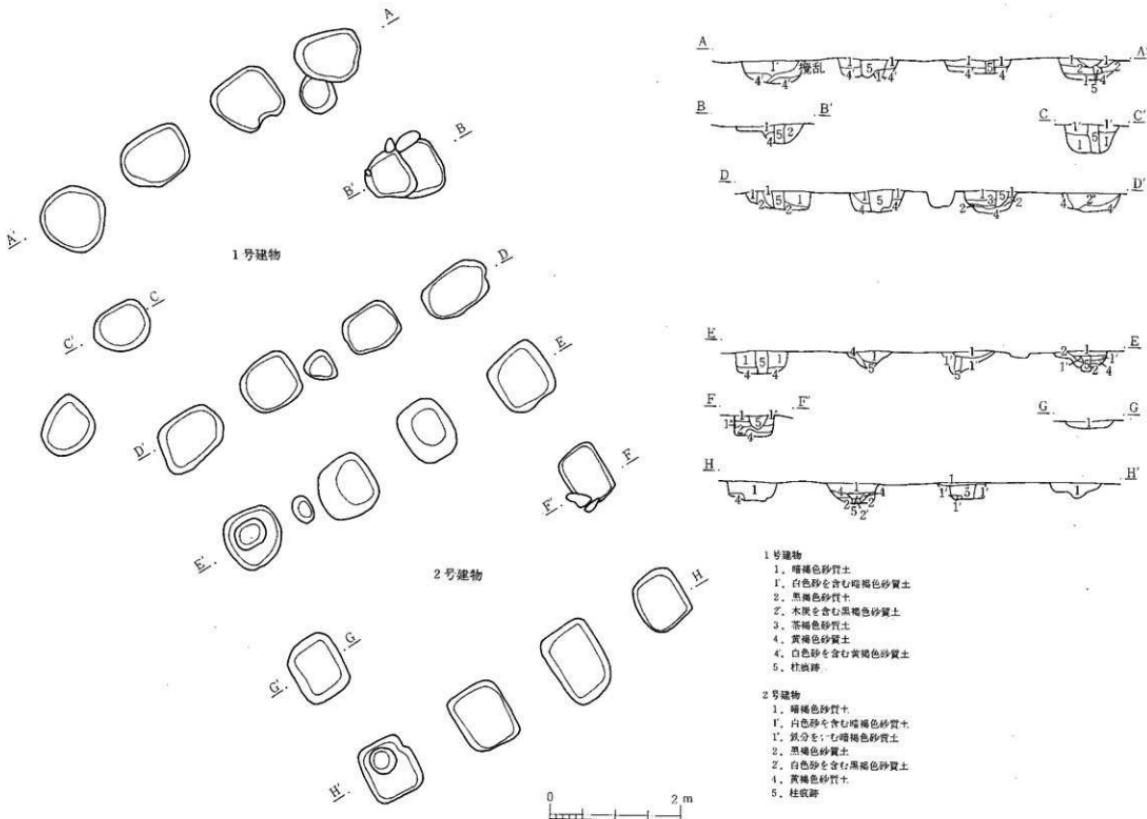
第57図、西壁直下出土。環。口径推定10.8cm。内面はロクロ撲でを行う。外面はロクロ撲で後、体部下半にヘラ削りを行う。胎は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。

小結 本住居跡の年代は、遺物量が少ないため断定はできないが、环の特徴から見ると、9世紀第4四半期に位置づけられる。



第57図 第10号住居跡

出土土器 (1:3)



第58图 第1·2号掘立柱建物跡 (1:60)

第1号掘立柱建物跡（第58図・図版15）

位置 F-1・2及びG-2にかけて位置する。水田造成時に削平され平坦となっているが、礫層が露出している。

規模 東西3間(4.8m)×南北2間(3.8m)の東西棟建物で、方位は北32°西へ偏している。柱間寸法は、桁行の両側の各1間が1.5m、中央が1.8mである。梁間は1.9mを測る。
柱穴 柱堀形は、地山の礫層に影響され、方形を意図したことは十分にうかがえるが、大きさ、形状とも一定しない。

形状は方形ないしは楕円形で、辺ないしは径は80~110cm、深さ20~40cmを測る。柱痕跡は、木の根による攪乱を受けた北西角の柱穴以外のすべての柱穴で確認され、直径は約15~20cmを測る。また、両桁行の西から2番目の柱穴には、直径15cm程度の補助柱を建てた痕跡が見られる。

柱穴覆土は、暗褐色砂質土と黒褐色砂質土ないしは黄褐色砂質土を版築状に埋めたて、固くしまっている。

小結 第2号掘立柱建物跡とは、1.8m離れて並んで建てられていることから、同時期のものと見て差し支えないものと考える。遺物は、内外面ともロクロ施で調整の小形窓が出土している。年代は、平安時代前半の所産である。

第2号掘立柱建物跡（第58図・図版15）

位置 F・G-2にかけて位置する。水田造成時に削平され平坦となっている。礫層の露出はほとんど見られない。

規模 東西3間(4.8m)×南北2間(4.0m)の東西棟建物で、方位は北32°西へ偏している。柱間寸法は、桁行は1.5~1.7mとややばらつきがある。梁間は2.0mを測る。

柱穴 柱堀形は、方形ないしは長方形で、辺70~90cm×90~110cmと比較的一定し、深さは、南側梁間中央を除き、25~35cmを測る。柱痕跡は、7本の柱穴で確認され、直径15~20cmを測る。

柱穴覆土は、暗褐色砂質土と黄褐色砂質土ないしは白色砂を含む暗褐色砂質土を版築状に埋めたて、固くしまっている。

小結 第1号掘立柱建物跡とは、1.8mの近接した位置に並行して建てられている。このことは、同時期に計画性をもって建てられたものと考える。遺物は、口縁がやや外反し、内外面ともロクロ施での皿が出土していることから、年代は、その特徴から9世紀第4四半期に位置づけられる。

以上のように、第1・2号掘立柱建物跡は、その配置状況の規則性から見て、同時期と考えて差し支えない。年代は、建築年代となるが、出土遺物の特徴から、9世紀第4四半期に位置づけられ、第1・3・7・10号住居跡と同時期と考えられる。

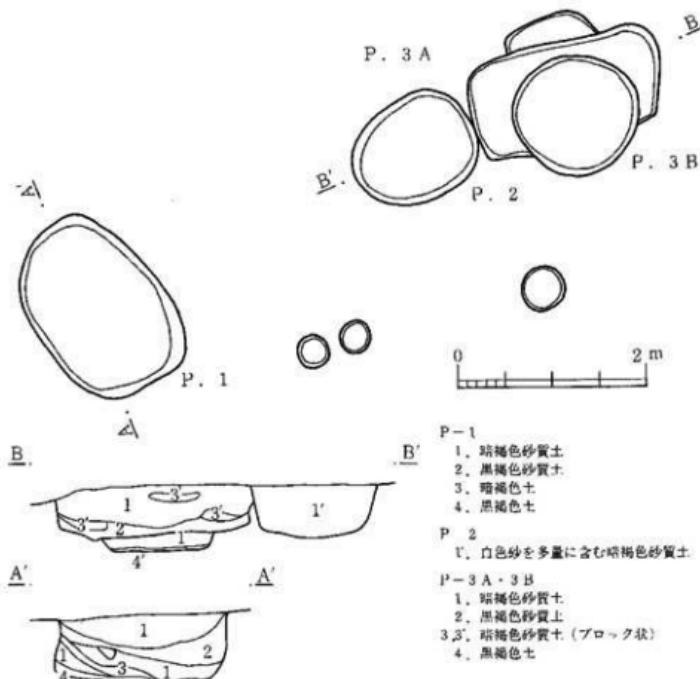
土塙群（第45・47・50・56・59～67図・図版14～17）

本遺跡では、60余基の土塙が確認された。これらのうち、C-5で単独検出された不定形のP-52、調査区東端のI・J-2・3で検出されたすり鉢状のP-69～72、G-3・4・5で検出された方形のP-43・44・47・50・51・64、及びG・H-3で検出された小形竪穴状のP-59・76Aを除くと、いずれも円形ないしは橢円形を呈した土塙である。

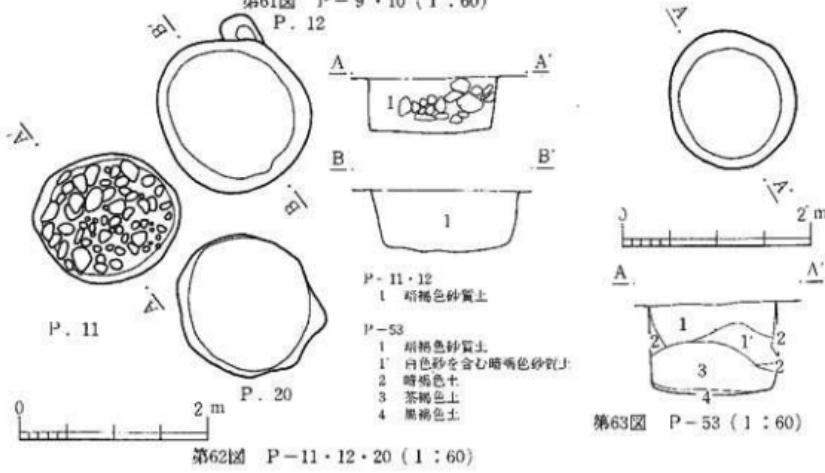
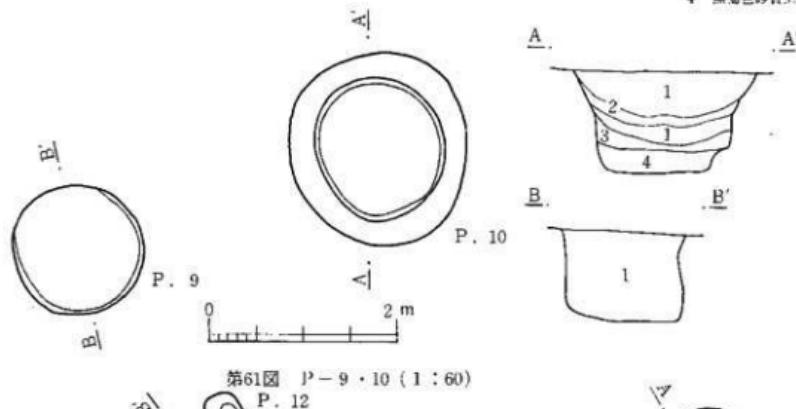
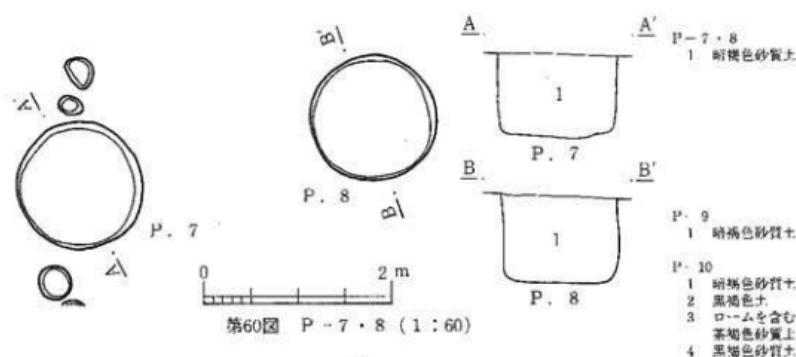
円形及び橢円形の土塙群の分布状況を見ると、F・G-3・4にその大半が集中しており、土塙どうしの重複関係も2・3確認されている。また、これらには住居跡との重複関係にあるものが7基をかぞえ、いずれも土塙が住居跡を切っている。さらに、小形竪穴状土塙とは3基重複関係があり、いずれも土塙が切られている。集中地区以外で、その周辺に1基ないしは3・4基の土塙群が数か所見られる。

これらの土塙群のうち、18基の覆土中より遺物が出土しているが、いずれも小片で埋め戻しの混入の可能性もあるため、いずれの土塙についても年代を断定するに至らなかった。

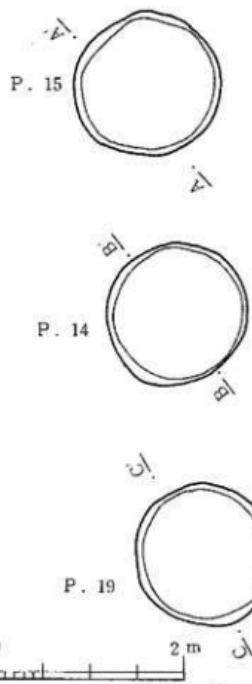
ここでは、これらの土塙群を形状別に分け、その特徴を記述する。



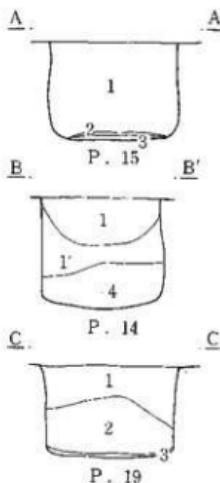
第59図 P-1・2・3A・3B (1:60)



第63図 P-53 (1:60)



第64図 P-14・15・19 (1:60)



円形及び橢円形の土塙 椎円

形は、平面寸法 195~215cm×110~140cm、現況の地山面からの深さは55~115cmとばらつきが大きいが、該当する土塙は、P-1・3 A・65の3基のみである。

本遺跡で主体となる円形土塙は、小形のものを除けば、直径120~160cm、現況の地山面からの深さは53~132cm程度となっている。これらの土塙は、G-3・4に集中し、土塙どおりの重複関係も見られる。また、住居跡との重複関係も見られ、いずれも住居跡を切っている。

特に、P-24・30は、本遺跡のなかの平安時代の住居跡で最も新しい7号住を切っている。

集中地区以外で注目される点は、F-3のP-15・14・19及

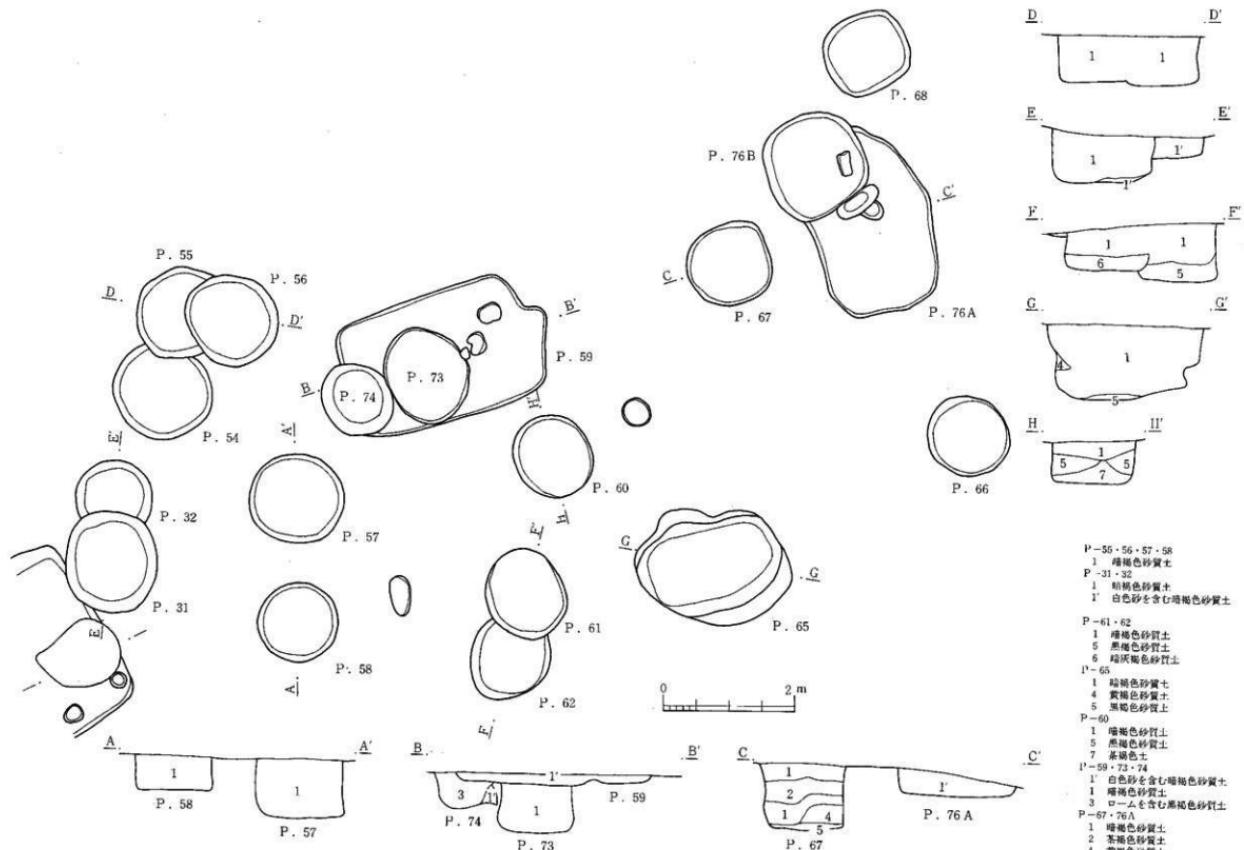
びP-17・18・22、さらにG-7からG-6にかけてのP-7~10のように3~4基の土塙がほぼ等間隔に並んでいることである。このうち、P-15・19からは中世遺物が出土している。

また、2号住に近接したP-53、9号住のP-4のように単独に存在するものもある。

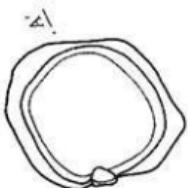
覆土の状態は、一部、茶褐色砂質土の部分もあるが、ほとんどが暗褐色砂質土を主体とし、人为的に埋め戻されている。最下層に黒褐色土の見られるものも多い。

方形の土塙 隅丸の方形で、平面寸法が145~210cm×125~140cm、深さ16~28cmと浅いものと、方形で平面寸法が105~135cm×90~120cm、深さ48~64cmと狭く深いものがある。前者は暗褐色砂質土の自然堆積で、後者は暗褐色砂質土主体で埋め戻され、よく固められている。これらの年代は、遺物がないため断定はできないが、P-44・47・50・51か10号住を切っていることや、中世遺物の比較的集中している部分にあることから見て、中世の所産と考えて差し支えないだろう。

小形堅穴状土塙 隅丸の長方形で、平面寸法は285~300cm×180~200cm、深さ30~42cmを測る。覆土はいずれも暗褐色砂質土系である。また、いずれも上記した円形の土塙を切って



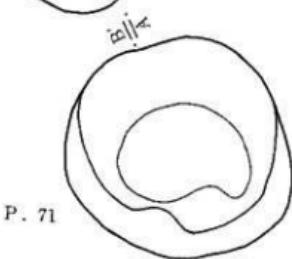
第65図 P-31・32・52~62・65~68・73・74・76A・76B (1:60)



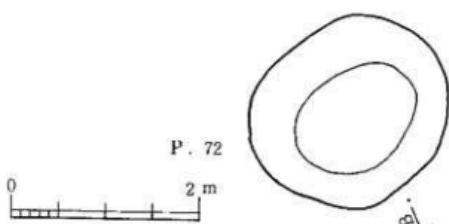
P. 69



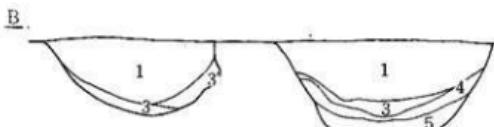
P. 70



P. 71



P. 72



第66図 P-69~72 (1:60)

いる。遺物は全く見られなかつたが、中世の所産と見られる。

すり鉢状土壙 1・2・3

にかけて、P-69-72の4基がほぼ等間隔に並んでいる。平面形は、円形・楕円形・不定形と一定せず、平面寸法は165~230cm×165~230cm、深さは55~110cmと、ばらつきが大きい。壁の立ち上がりは傾斜が強く、底径は判然としない。

覆土は、暗褐色砂質土を主体とし、最下層は黒褐色土ないしは黒褐色砂質土である。なお、覆土中より、平安時代の坏、甕等が出土している。年代は、平安時代以降とみられる。

C-5 集石土壙 単独検出のP-52で、不定形であり平面寸法は205×135cm、深さ16cmを測り、中央部に集石がある。

覆土は、暗褐色砂質土である。この土壙の周囲より弥生土器が出土している。

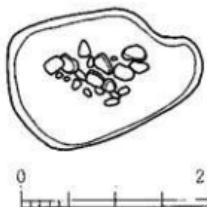
土層説明

- 1 暗褐色砂質土
- 1' 砂粒を多く含む暗褐色砂質土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 黑褐色土
- 3' 砂粒をわずかに含む黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黑褐色砂質土

土 塙 一 覧 表

番号	平面形	平面寸法[mm]	深さ[cm]	備考	番号	平面形	平面寸法[mm]	深さ[cm]	備考
P.1	椭円形	195×140	74		P.46	円 形	100×90	50	
P.2	椭円形	140×110	55		P.47	方 形	135×120	64	
P.3A	楕円形	210×110	55	P.3Bを切る	P.48	円 形	95×80	58	
P.3B	円 形	135×130	70	P.3Aに 切られる	P.49	円 形	105×90	48	
P.4	円 形	130×120	57		P.50	方 形	120×105	48	P.51を切る
P.7	円 形	130×130	90		P.51	方 形	150×140	53	P.50に切られる
P.8	円 形	135×130	102		P.53	円 形	150×150	97	
P.9	円 形	135×135	95		P.54	円 形	145×140	22	P.55に切られる
P.10	円 形	150×140 (200×190)	110 (38)	(内上部七成)	P.55	円 形	145×135	70	P.56と重複 P.54を切る
P.11	円 形	145×135	60	集石	P.56	円 形	140×130	76	P.55と重複
P.12	円 形	170×160	69		P.57	円 形	120×115	90	
P.14	円 形	150×145	120		P.58	円 形	130×120	53	
P.15	円 形	160×150	108		P.60	円 形	130×120	66	
P.16	円 形	140×140	119	5住・6住切る	P.61	円 形	130×130	92	P.62に切られる
P.17	円 形	160×150	106	5住・6住切る	P.62	円 形	130×120	64	P.61を切る
P.18	円 形	140×135	94	5住切る	P.64	方 形	160×140	16	
P.19	円 形	150×145	99		P.65	椭円形	215×140	115	外周崩落したか
P.20	円 形	150×145	97		P.66	円 形	130×120	75	
P.22	円 形	140×130	108		P.67	円 形	130×125	100	
P.24	円 形	130×125	132	7住切る	P.68	円 形	130×120	63	
P.26	円 形	125×120	94		P.73	椭円形	150×120	93	P.59に切られる
P.27	円 形	120×110	25		P.74	円 形	115×105	70	P.59に切られる
P.28	円 形	120×120	101		P.76B	円 形	150×150	115	P.76Aに 切られる
P.29	円 形	140×130	93	8住切る					
P.30	円 形	145×135	85	7住切る	P.59	隅丸 長方形	300×200	30	P.73・74を切る
P.31	円 形	150×140	80		P.76A	隅丸 長方形	285×180	42	P.76Bを切る
P.32	円 形	120×115	37						
P.33	円 形	90×80	56	フラスコ状 6住切る	P.69	円 形	165×165	75	すり鉢状
P.34	円 形	135×125	70		P.70	不定形	210×190 140	55	すり鉢状
P.36	円 形	120×110	26		P.71	不定形	230×230	110	すり鉢状
P.42	円 形	130×125	95		P.72	椭円形	220×190	80	すり鉢状
P.43	方 形	145×135	22		P.52	不定形	205×135	16	集石
P.44	方 形	210×150	28						

※深さは、現地山面からの数値で、構築時の数値とは異なる。



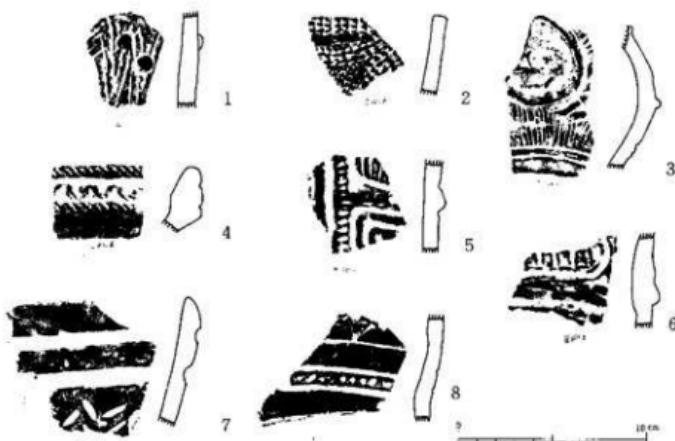
年代は、C-5からD-5の西側にかけて、遺物包含層から弥生時代以外の遺物はないため、弥生時代のピットと考えられる。

小 結 本遺跡の土塙は、弥生時代のP-52を除くと、平安時代と中世のいずれかに属すると見られる。そのうち、方形ないしは隅丸長方形の土塙は中世である。円形及び楕円形は、集中区城や第67図 P-52 (1:60) 3~4基一列に並ぶ土塙群は中世と見られ、また、住居跡に近接して単独存在する土塙は、住居跡に伴うものと考えられる。

円形ないしは楕円形の土塙の用途は、使用後に埋め戻してあることから、墓塚ないしは貯蔵穴と見られる。

グリッド出土縄文土器・石器 (第68~70図・図版22)

1. 脚部破片で、胎土に雲母・石英を含む。内面はよく研磨されている。外面は継位の斜行する沈線文を地文とし、ボタン状貼付を行う。 2. 口縁部破片でわずか外反する。胎土は黒雲母を含む。内面はよく研磨されている。外面は結節状凹線文を直線ないしは弧状に施している。 3. 口縁部破片で内弯する。胎土に黒雲母を含む。内面はよく研磨されている。外面は櫛状工具による沈線を地文とし、半剖竹管により円形に施している。 4. 口縁部破片で、胎土に金雲母を含む。内面はよく研磨されている。外面は二条の沈線と交互刺突により波状帶を作り、口縁凸部に縄文を施す。 5. 脚部破片で、胎土に石英を含む。内面はよく研磨されている。外面は刻目隆帯と隆帯で

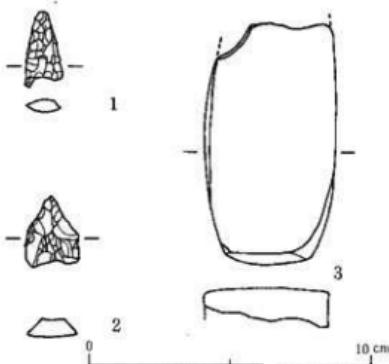


第68図 グリッド出土縄文土器 (1:3)



第69図 グリッド出土
縄文土器 (1:4)

区画し、その内側へ半肉彫の文様を施文する。6. 胴部破片で、胎土に金雲母を含む。内面は粗雑である。外面は横帯文の内側に影刻的な文様を施文する。7. 口縁部破片ではば直立する。胎土は金雲母等を含む。内面は研磨されている。外面は太い沈線を二条めぐらし、その下部に「ハ」の字文を施す。器面はよく研磨されている。



第70図 グリッド出土石器 (1:2)

第69図、胴部破片で、胎土に金雲母を含む。内面はよく研磨されている。外面は地文の縄文を施文した後、櫛状工具で二条の沈線を施す。

第70図-1. 石鎌。凹基無茎鎌で基部の抉りは浅い。両側はほぼ直線的である。長さ 2.8cm を測る。石材は黒曜石である。70-2. 石鎌。凹基無茎鎌で基部の抉りは極めて浅い。両側は大きく膨み、長さ 2.5cm を測る。石材は黒曜石である。70-3. 磨制石斧。定角式磨製石斧で、裏面及び刃部は欠損している。表面はよく研磨されている。

小 編 縄文土器の年代は、前期末の諸磯C式から、中期中葉、中期末葉と遺物量は少ないものの、縄文中期全般の遺物がある。

なお、第68図-8は縄文晚期に属し、次の弥生土器で触れる。

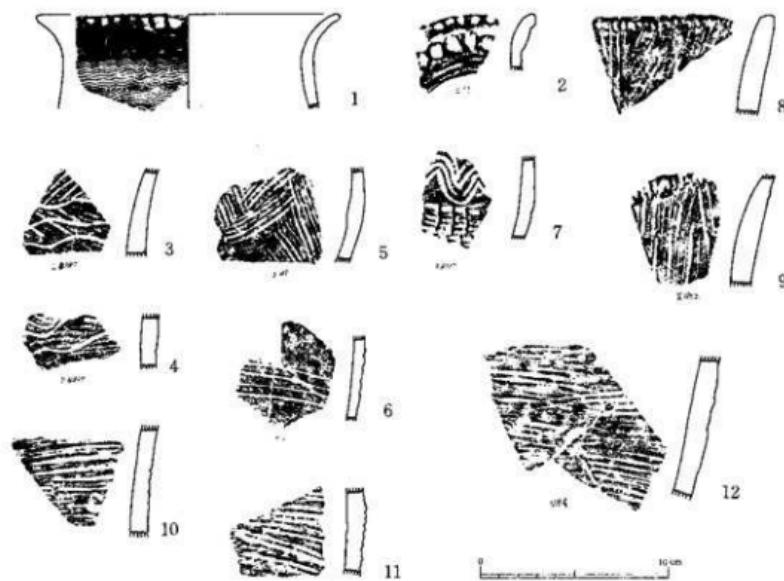
グリッド出土弥生土器（第68・71図・図版22）

第68図-8. 胴部破片で、胎土は精選されている。内面はよく研磨されている。外面は沈線をめぐらし、その間に沈刻を一列めぐらす。外面もよく研磨されている。

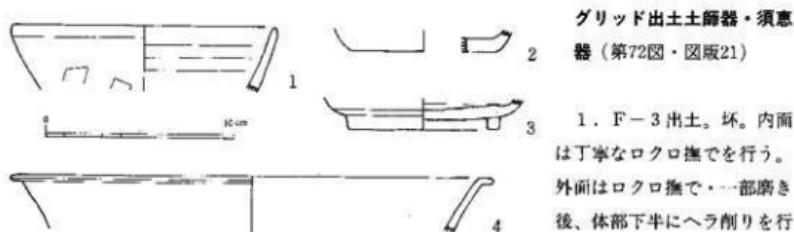
第71図-1. 口縁部破片で、内外面ともよく研磨され、口唇部は指による押圧、肩部には波状文が2段見られる。2. 口縁部破片で、内外面とも器面調整は粗雑、外面は口唇部に櫛描点文、下端には指頭押捺を加える。3・4. 胴部破片で、内面はやや調整が見られ、外面は縄文及び縄文方向の沈線を地文とし、波状沈線をめぐらす。5. 胴部破片で、羽状沈線が施文されている。6. 胴部破片で、内外面ともよく研磨され、外面に沈線を施文する。

7. 頸部破片で、上部に波状文、下部に簾状文を施文する。8・9. 口縁部破片で、内面は研磨されている。外面は口縁に圧痕をつけ、縦方向に条線を施文する。10・11・12. 胴部破片で、外面全面に条痕文を施文するほか、内面にも若干の条痕文を施す。

小 編 本遺跡出土の弥生土器は、弥生初期の条痕文系が主体である。



第71図 グリッド出土弥生土器 (1:3)



第72図 グリッド出土土師器・須恵器 (1:3)

淡茶褐色を呈する。5号ないし6号住の遺物の可能性がある。

1. F-3出土。坏。内面は丁寧なロクロ撫でを行う。外面はロクロ撫で、一部磨き後、体部下半にヘラ削りを行う。口縁は後をもつ。胎土は精選、焼成も良好・堅緻で、

2. F-4出土。須恵器坏。外面ロクロ撫で、底部は糸切りである。焼成はあまりよくなく、灰白色を呈する。

3. F-6出土。須恵器有台坏。内外面ロクロ撫でを行う。底部ヘラ切り後、外周に高台を貼り付ける。焼成は極めてよく、黒褐色を呈する。9号住の遺物である可能性が強い。

4. F-4出土。皿と見られる。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁部は強く外反する。焼成は良好である。



第73図 グリッド出土古銭（1：1）

グリッド出土古銭（第73図）

1. H-3 出土。古銭。「至道元宝」の草書体で、北宋、至道元年（955年）にあたる。
2・3. G-4・5 出土。古銭。いずれも「永樂通寶」で、明 永樂6年（1408年）にあたる。

第3節 まとめ

本遺跡では、平安時代の住居跡10基、掘立柱建物跡2棟、平安時代から中世にかけての土塙60余基等が発掘されている。特に住居跡は、年代を決定しうる遺物のない5・6・8号住を除けば、その出土遺物から、9世紀第2～3四半期（9・4号住）・9世紀第3四半期（2号住）及び9世紀第4～10世紀第1四半期（1・3・7・10号住）の3時期に分けられる。また、5号住と6号住とは重複関係にあり、5号住が6号住を切っている。

さて、資料は少ないものの、各時期の特徴をあげれば、次のとおりである。

9世紀第2～3四半期は、東壁にカマドを構築した9号住と北壁にカマドを構築した4号住がある。カマドは壁を50～80cm切り込んで構築されている。遺物は、9号住が土師器を主体とするに対し、4号住は須恵器を主体としている。これらの特色の差は、全く異なる人々によって本集落が成立したことを示しているものと考える。

9世紀第3四半期は、西壁にカマドを構築した2号住のみがあげられる。遺物は、暗文付环や内外面ハケ目調整の表、須恵器等があげられる。

9世紀第4～10世紀第1四半期は、東壁側で壁をほとんど切り込まないカマドを構築した1・7・10号住及びカマドを持たない3号住があげられる。遺物は、1・7号住に比較的多く出土している。土師器の暗文付环、皿、内窓の环や皿、内外面ハケ目調整の表等がある。また、掘立柱建物跡は、出土遺物から見て、2棟ともこの時期の集落に伴うものである。

なお、出土遺物がほとんどなく、時期決定できなかった5・6・8号住については、遺跡全体の出土遺物に上記3時期の前後に位置づけられるものはないため、いずれかの住居跡と組み合わさって集落を構成していたものと推定する。

以上のように、本遺跡では、断続的に3回の極めて小規模の集落が営まれていたことが判明し、所帯I遺跡等を含め、出作り集落の特徴や移動を知る上で貴重な資料であろう。

第V章 総括

所帯I・II遺跡及び坂下遺跡の集落の変遷について

所帯I・II遺跡及び昭和62年発掘調査された坂下遺跡の3遺跡は、いずれも釜無川の形成した低位段丘面上に位置し、北から所帯I・所帯II・坂下の順に小さい谷を挟んで、約150m間隔で並んでいる。

これら3遺跡は、1時期の住居跡が2~4基という極めて小規模な集落によって構成されている。また、その時代幅も所帯I遺跡の9世紀第2~第3四半期に出現し、所帯II遺跡の9世紀第4~10世紀第1四半期までの、およそ1世紀(100年間)に限られている。さらに、3遺跡は個々には断続的な営みの結果を見せており、大きく1遺跡として捉えた場合には、継続的な営みの所産であることがわかる。

では、個々の遺跡の特徴を上げて見よう。

所帯I遺跡

9世紀第2~第3四半期(古) 北壁に粘土により構築したカマドをもつ2基の住居跡を主体とする集落で、遺物は量的には少ないが、暗文付壺や内外面ロクロ施での甕等がある。

9世紀第2~第3四半期(新) 東壁に若干の礫と粘土により構築された、長い煙道のカマドをもつ2基の住居跡を主体とする集落で、遺物は量的には少なく、内黒壺・須恵器壺及び内外面ハケ調整の甕等がある。なお、掘立柱建物跡を伴うものと見られる。

9世紀第4四半期 東壁に河原石を袖石として構築したカマドをもつ2基の住居跡を主体とし2棟の掘立柱を伴う集落で、前2時期と異なり、第5号住居跡を中心に遺物量が多く、暗文付壺・皿・内黒壺・皿・内外面ハケ調整の甕、須恵器壺、さらに施釉陶器等種類も豊富である。また、暗文付壺のなかには、9世紀第2~第3四半期のものが共伴することから、9世紀第4四半期でも古い時期に属する集落であることがわかる。

なお、9世紀第4四半期に限り遺物量が多い点については、洪水により緊急避難の必要性が生じたものと推定され、その際、第1号住居跡は、洪水の流路となり一部が削られたものと考える。以後、所帯I遺跡に、集落は作られていない。

所帯II遺跡

9世紀第2~第3四半期 東壁に若干の礫と粘土により構築されたカマドをもつ第9号住居跡と北壁に片側に河原石を袖石として構築したカマドをもつ第4号住居跡を主体とする集落である。遺物は量的には少なく、9号住では暗文付壺・内外面ロクロ施での甕等があり、一般的な様相を見せており、4号住は住居内に集石があるほか、須恵器壺・甕がほとんどを占め、異なった特徴を見せており、このような特徴の違いから、4号住の居住者は、他地域から新たにこの集落に入った人々と考えられる。

9世紀第3四半期 西壁に若干の礫と粘土により構築されたカマドを持つ第2号住居跡のみが出土遺物の特徴から位置づけられる。しかし、時期の決定できなかった第5・6・8号住居跡のいずれかが共存し集落の主体となっていたものと考える。遺物は量的には少なく、暗文付环・内外面ハケ調整の甕、須恵器甕等がある。

9世紀第4～10世紀第1四半期 東壁に粘土により構築されたカマドをもつ第1・7号住居跡及び第3・10号住居跡の4基を主体とし、2棟の掘立柱建物跡を伴う集落である。遺物は7号住を中心豊富で、暗文付环・皿、内黒环・皿、小形甕、小形壺、内外面ハケ調整やロクロ撫での甕等がある。

なお、9世紀第4～10世紀第1四半期に限り遺物量が多いのは、3遺跡を含むこの地域が生活に適さなくなってしまったことによるものと考える。2号住及び9号住には、洪水による浅い流路が西から東へ走っていることも、集落の廃絶と関係している可能性がある。

坂下遺跡

9世紀第4四半期 東壁に粘土ないしは河原石を袖石にした住居跡4基（1基不明）を主体とし、掘立柱建物跡を1棟伴う集落である。遺物は比較的多く、暗文付环・皿、内黒环・内外面ハケ調整の甕等がある。年代は暗文付环の特徴により9世紀第4四半期に位置づけられる。

なお、この集落は火災により廃絶したことが、各住居跡の床面に分布する屋根材の炭化物から判断できる。

以上のように、昭和62年度発掘調査を行った坂下遺跡を含め、その特徴を個々に述べてきたが、それらを一体のものとして捉えると、9世紀第2四半期から10世紀第1四半期にかけての100年間に7回の集落の変遷をたどることができる。

第Ⅰ期：所帯I遺跡－2B・4号住。粘土による北カマド。暗文付环・内外面ロクロ撫で甕。

第Ⅱ期：所帯II遺跡－9・4号住。若干の礫と粘土による東カマド。暗文付环・内外面ロクロ撫で甕。4号住は他地域からの移住者で須恵器環がほとんど。

第Ⅲ期：所帯I遺跡－2A・3号住。若干の礫と粘土による通水の長い東カマド。内黒环・須恵器环・内外面ハケ目甕。暗文付环は少ない。掘立柱建物を作り。

第Ⅳ期：所帯II遺跡－2号住ほか。若干の礫と粘土による西カマド。暗文付环（ここまで暗文は見込みに及ぶ）、内外面ハケ目甕。

第Ⅴ期：所帯I遺跡－1・5号住。河原石を袖石とした東カマド。暗文付环・皿、内黒环・皿・内外面ハケ目甕。掘立柱建物を作り。洪水により廃絶。

第VI期：坂下遺跡－1～4号住。粘土ないしは河原石を袖石とした東カマド。暗文付环・皿、内黒环・内外面ロクロ撫で甕。掘立柱建物を作り。火災廃絶。

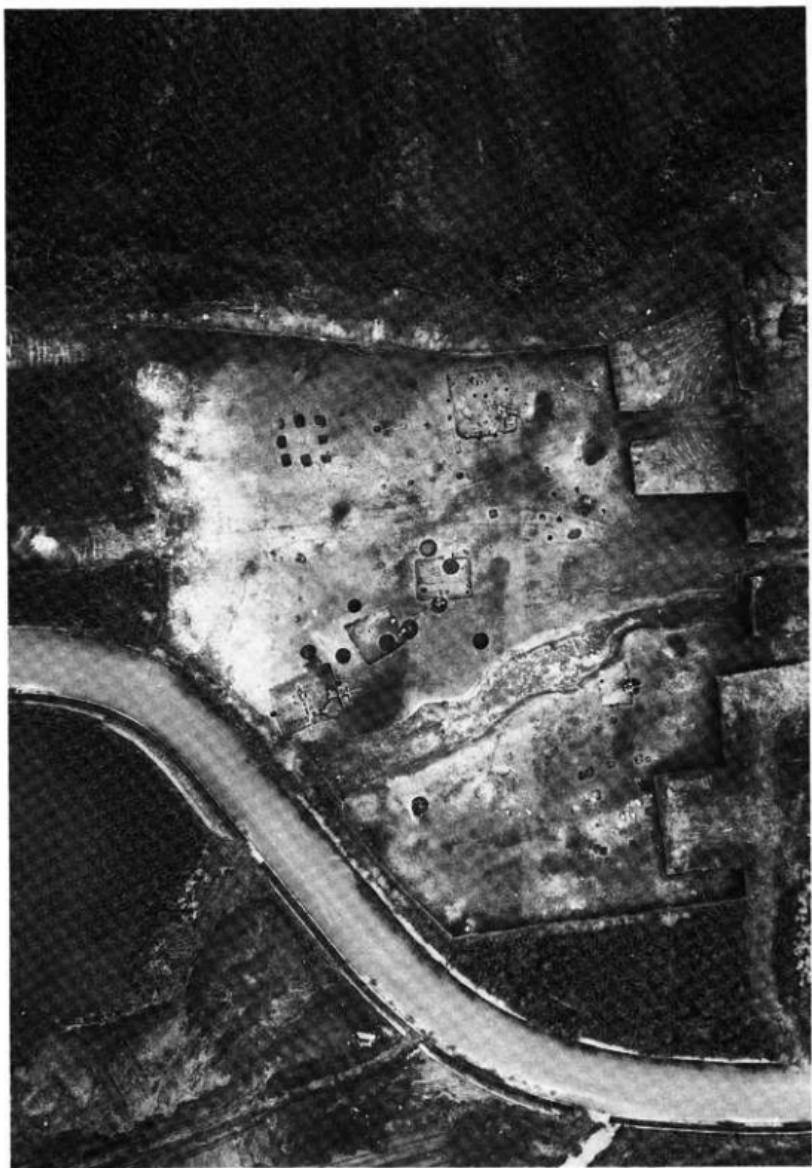
第VII期：所帯II遺跡－1・3・7・10号住。粘土による東カマド。暗文付环・皿、内黒环・皿、小形甕、小形壺、内外面ハケ目・ロクロ撫で甕。掘立柱建物を作り。洪水により移動したものと見られる。

以上のように、2～4基の住居跡を主体として構成される、いわゆる「出作り集落」の大まかな変遷過程・内容の変化を知ることができたことは、今後の課題である生産活動の解明へのステップとして、意義深いものがあろう。

参考文献

- 折井 敦 1988 「坂下遺跡」 白州町教育委員会
- 白州町誌編纂委員会 1986 「白州町誌」 白州町
- 武藤雄六 他 1978 「曾利」 富士見町教育委員会
- 長沢宏昌 他 1985 「北掘遺跡」 山梨県教育委員会
- 山下孝司 1988 「前田遺跡」 増崎市教育委員会
- 雨宮正樹 1984 「東久保遺跡」 高根町教育委員会
- 斎藤孝正 1982 「猿投窓における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』211
- 斎藤孝正 他 1983 「猿投窓の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要2』
- 田口昭二 他 1985 「美濃窯の一三〇〇年」
- 百瀬長秀 他 1982 「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—茅野市 その5」 長野県教育委員会
- 加藤唐九郎 1972 「日本陶磁大辞典」 淡交社
- 日本貨幣商協同組合 1982 「日本貨幣型録 1982年版」
- 平野 修 1988 「宮間田遺跡」 武川村教育委員会
- 坂本美大 他 1987 「二之宮遺跡」 山梨県教育委員会
- 第4回三県シンポジウム 「東日本における黎明期の弥生土器」

図版



所带 I 遗迹全景



遺跡全景（調査前）



遺構検出状況



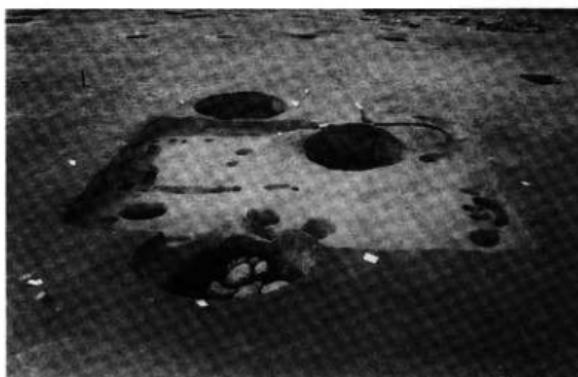
第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡



第4号住居跡



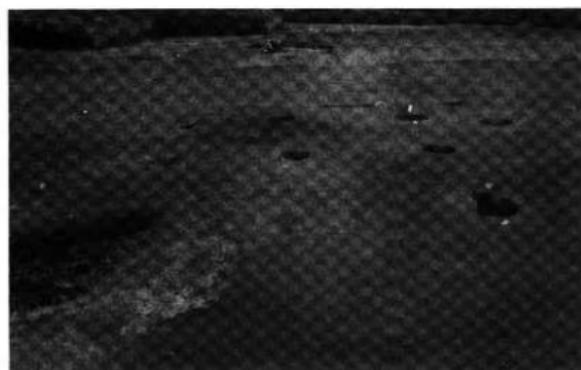
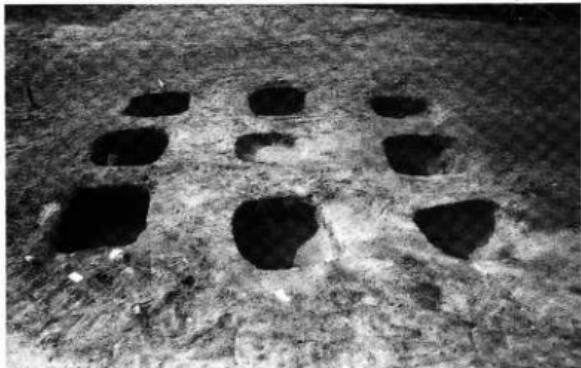
第5号住居跡



第5号住居跡カマド



第1号掘立柱建物跡

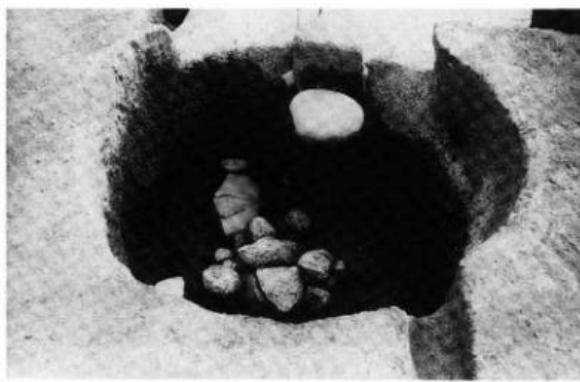




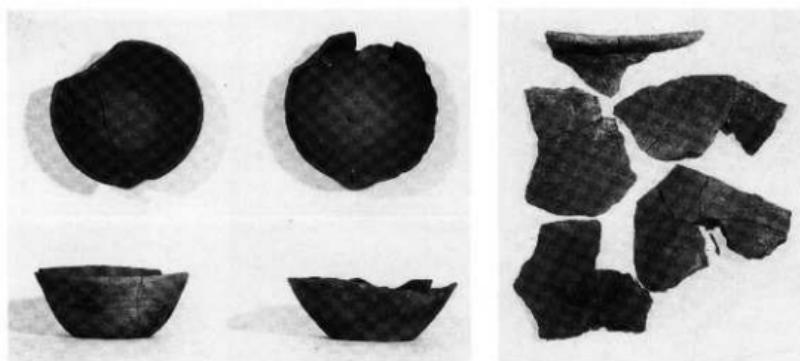
第2号土堆



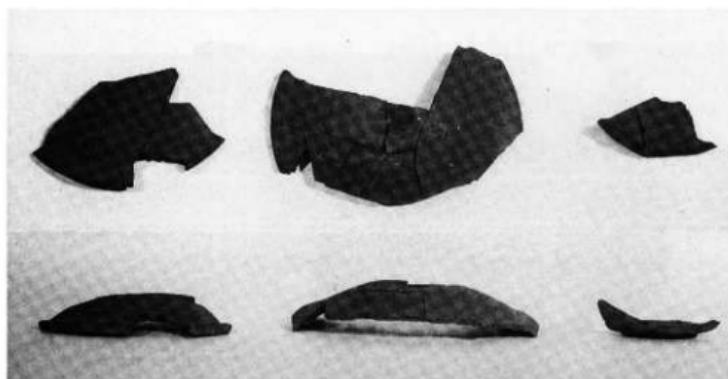
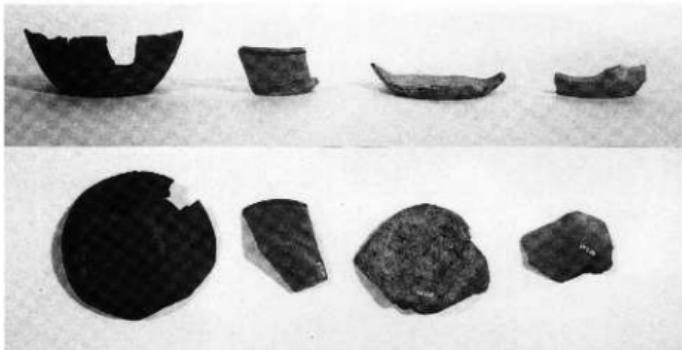
第7号土堆



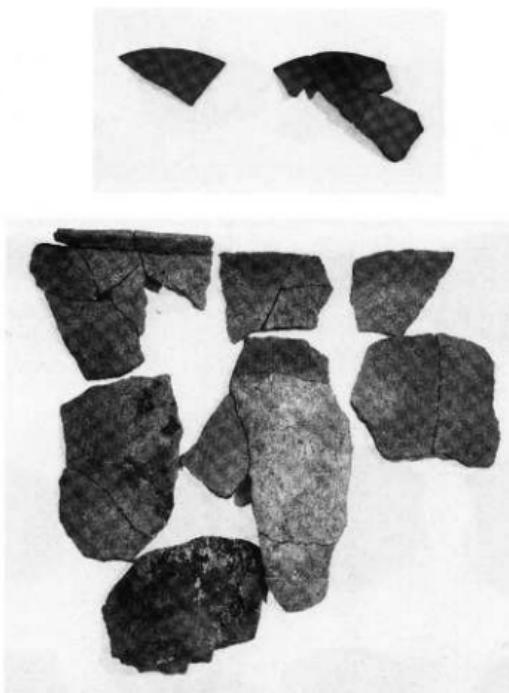
第13号土堆



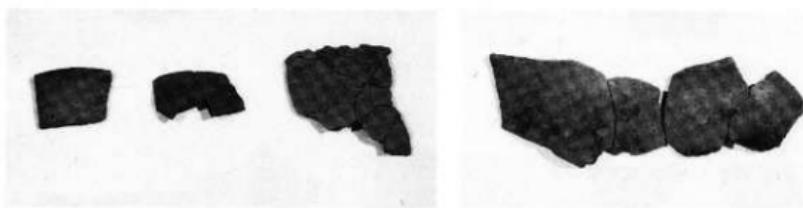
第1号住居跡出土土器



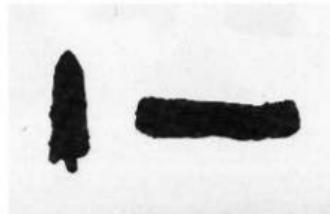
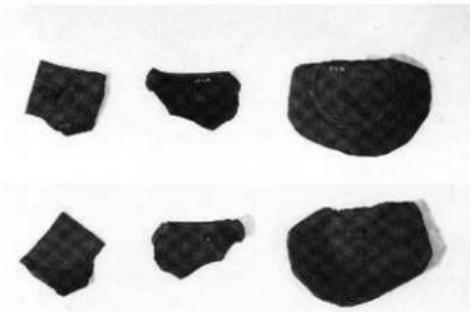
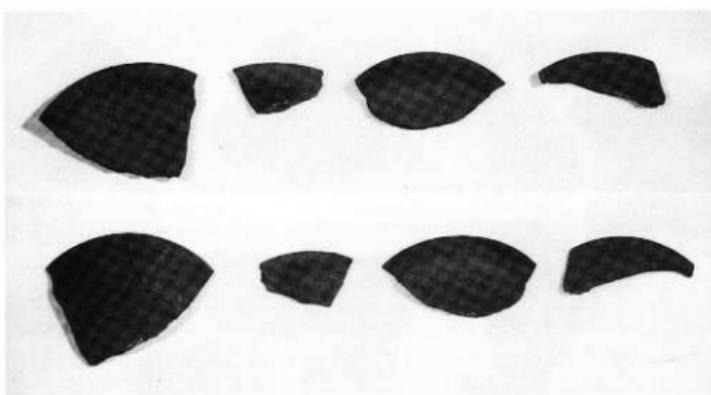
第2号住居跡出土土器



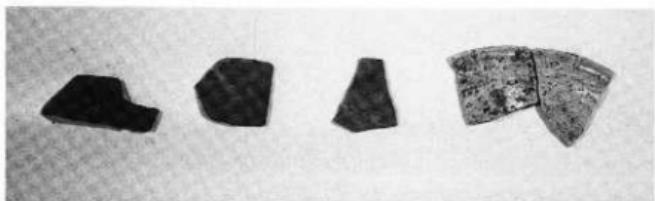
第3号住居跡出土土器



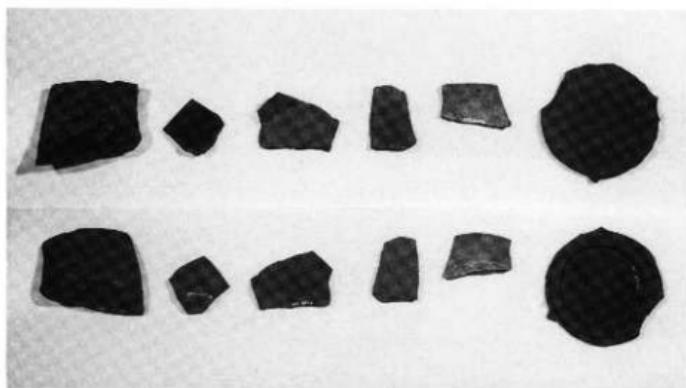
第4号住居跡出土土器



第5号住居跡出土遺物



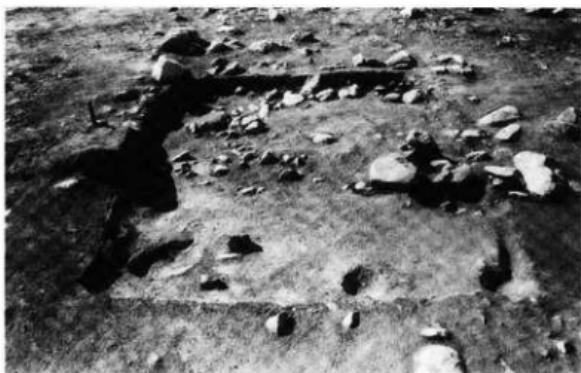
第5号住居跡出土土器



グリッド出土土器



所帶 II 遺跡全景

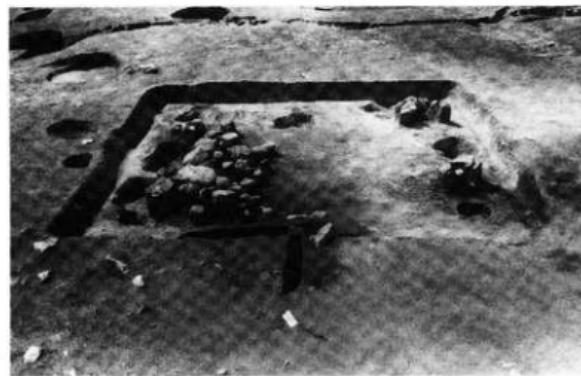




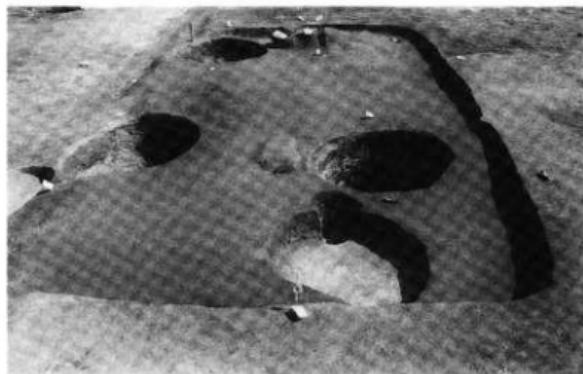
第2号住居跡



第3号住居跡



第4号住居跡



第5・6号住居跡



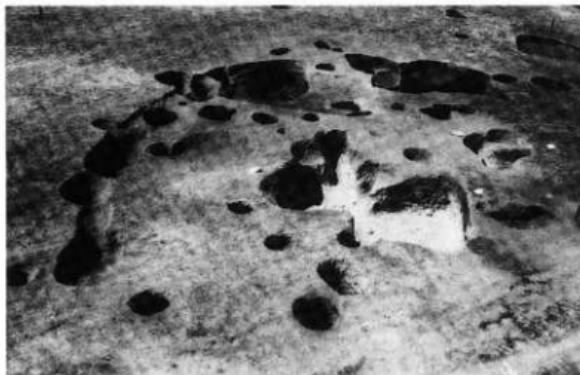
第7号住居跡



第8号住居跡



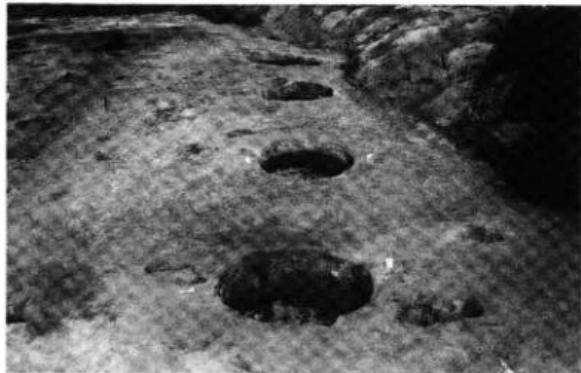
第9号住居跡



第10号住居跡



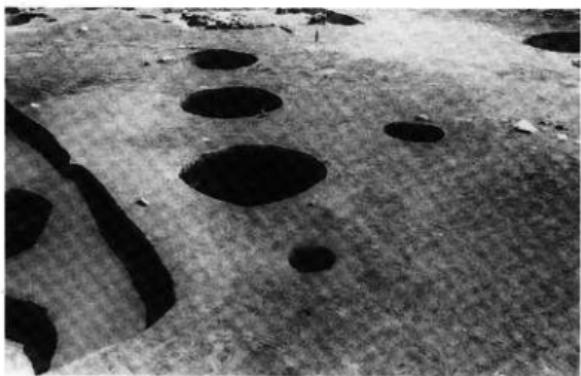
第1・2号掘立柱建物跡



第7~10号土坡



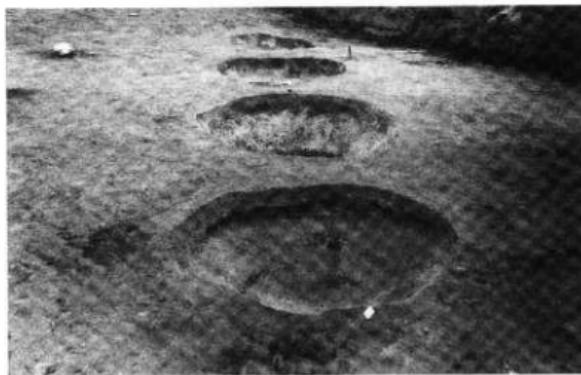
第11·12·20号土坡



第14·15·19号土坡



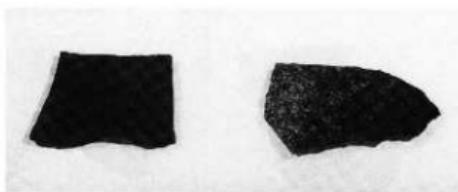
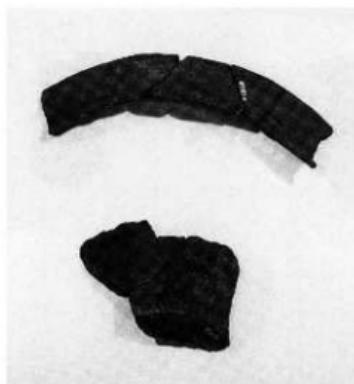
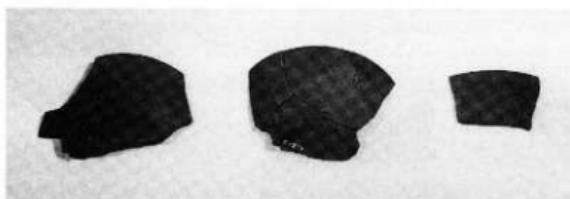
G-3・4区土坟群



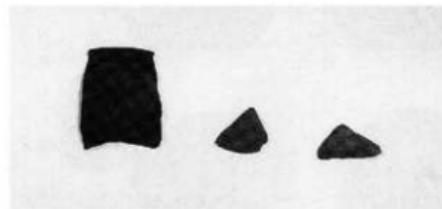
第69-72号土坟



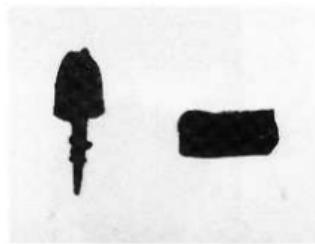
第52号土坟



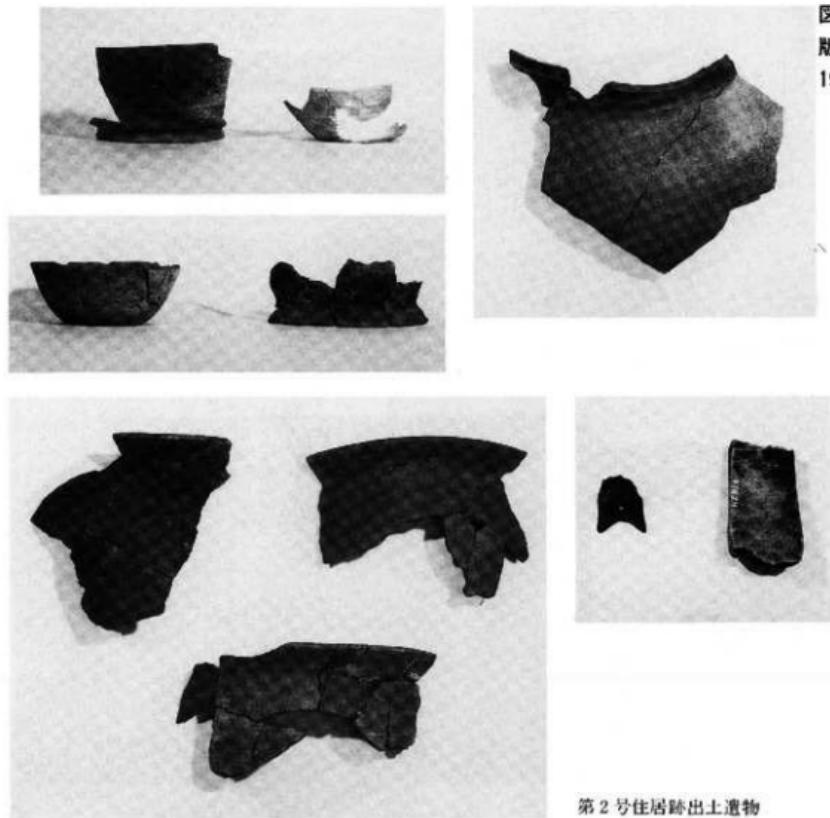
第1号住居跡出土土器



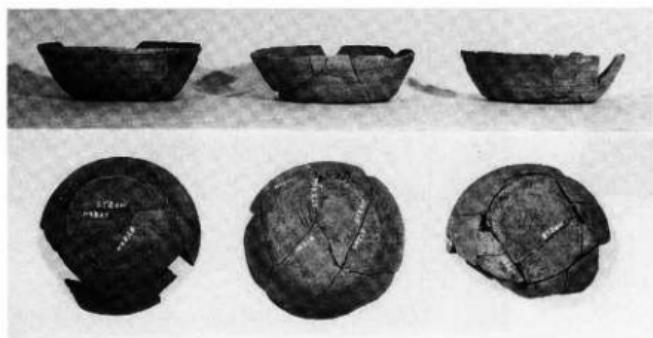
第3・5・6号住居跡出土土器



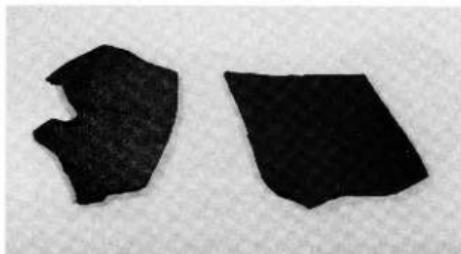
第8号住居跡出土遺物



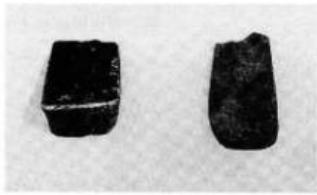
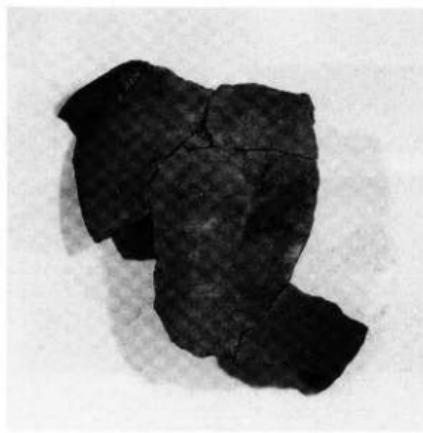
第2号住居跡出土遺物



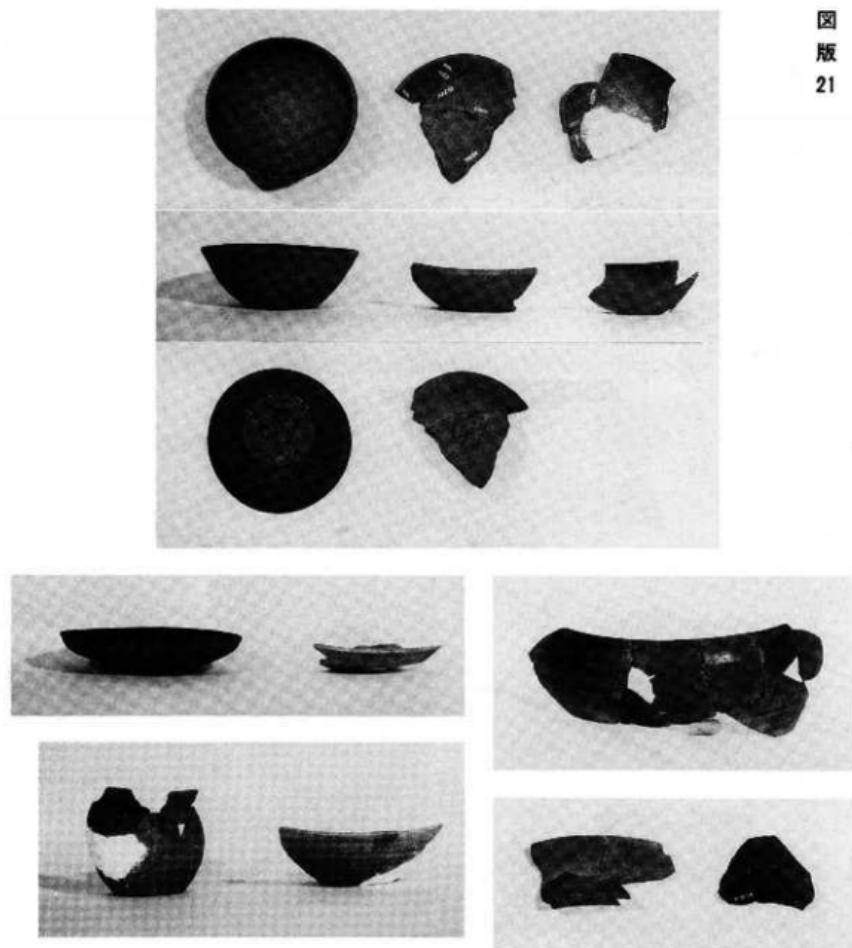
第4号住居跡出土土器



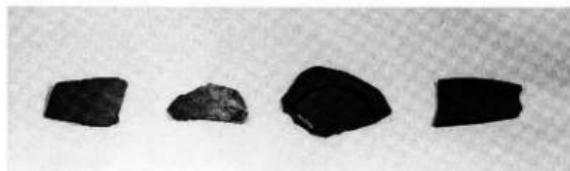
第4号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物



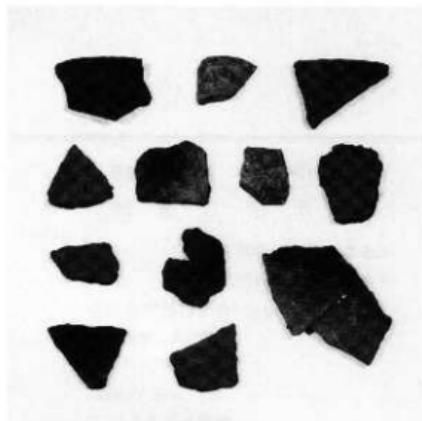
第7号住居跡出土土器



グリッド出土平安時代土器



グリッド出土繩文土器



グリッド出土弥生土器

所 帯 I 遺 跡

所 帯 II 遺 跡

平成元年3月25日印刷

平成元年3月31日発行

編集・発行 白州町教育委員会

山梨県北巨摩郡白州町白須312

電話 0551-35-2121

印 刷 (資) ヨネヤ印刷

甲府市丸の内一丁目14 6

電話 0552-35-4311

